

SF—ストライク・フォース

田んぼのアイドル、スズメちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

21世紀初頭、日本の学者により未知の新元素『ガルダニウム』が発見された。

この『ガルダニウム』が使用された兵器『ストライク・フォース』は既存の兵器を凌駕するものであり、これによって世界の軍事バランスは大きく変化した。

この『ストライク・フォース』による激動の時代を、元子供兵の主人公と仲間たちが奮戦する。

目次

入学編	1	1
入学編	2	12
入学編	3	21
入学編	4	31
入学編	5	41
入学編	6	51
入学編	7	61
入学編	8	71
入学編	9	81
入学編	10	91
入学編	11	101
入学編	12	111
入学編	13	121
入学編	14	131
入学編	15	143
学期末編	1	154
学期末編	2	163
学期末編	3	173
学期末編	4	185

入学編―1

私は荒野に立っている。

血と硝煙の匂い。そして、銃声のみがその場を支配している。どこを見ても、戦闘による黒い煙と赤茶けた大地が広がる。空は煙によって酷くくすんでいる。見慣れた光景である。現に、自分の手にも小銃が握られている。

ここに立っている者は、例外なく戦うしかない。戦って敵を殺さなければ、自分が殺されるという血みどろの戦場。

私たちは敵に何か恨みがあるわけではない。ただ成り行きで戦っているだけである。

私に銃を覚えてくれた大人はいつも「神のために戦えば、その行いが称えられ、神のみもとで救われるだろう。」と言っていた。それが本当なのか間違っているかなどどうでもいい。ただ、大人たちが敵だというものに銃口を向け、引き金を引く。それだけの単純な作業である。敵を殺せば褒められるし、食事にもありつけた。戦う理由なんてそれだけで十分だ。自分が生きるためなら、他人へ向かって引き金を引くことにためらいはない。

何も考えずただ狙いを定めて引き金を引く。こんなくそつたれな世界を生き抜くために……。

「起きてるか？そろそろ目的地に到着の時間だぞ。」

その声で夢の中から現実へ引き戻される。声の主は、優しそうな顔つきをした中肉中背の男である。髪は全体的に短く切りそろえられている。

「よく眠ってたな。これから入学式だって言うのに、藍那は一切緊張とかしないのか？」

先程から私に声をかけているのは私の保護者にあたる人物で、名前を仁科正純にしなまさずみという。

私の名前は仁科藍那にしなあいな、正純とは親子である。

しかし、私と仁科の関係は実の親子ではない。孤児であった私を仁科は養子として迎え入れてくれたのだ。

私は日本で生まれたわけではない。

仁科によると、本当の両親は2人とも国際援助に参加していた医者だったそうだ。私は両親が医師団として紛争地域へ行っているときに生まれた子供らしい。しかし、両親とも私の幼いころに紛争に巻き込まれて死亡している。

そんな私は、地元の住民によって育てられた。彼らからすれば、命を救ってくれた医者の子供を育てることで恩返しをしようと思っただけかもしれない。

しかし、彼らが住んでいるのは紛争地域である。自分一人の生活だつて苦しいというのに、幼い子供を育てていくのは無理があつた。

結果的に私は捨てられた。そんな私を拾ったのが反政府武装勢力であつた。そこで必要最低限の戦うための教育、そして、銃の撃ち方を学んだ。

私が初めて人を撃つたのは10歳を迎えた頃であつた。

戦場では戦う意思と銃を撃つための腕さえ残っていれば、立派な兵士なのである。私と同じ様な子供兵は多くいた、しかし、戦闘を重ねるごとに1人また1人と少しずつ減っていくのだ。そして、また新しい子供兵が補充される。

そんな環境で生き延びることのできていた私は運が良い方なのだろう。

子供兵として13歳を迎えようとしていた時に、私にとっての転機が訪れた。戦闘中に私は敵軍に捕らえられた。そんな時、国際ボランティア活動で来ていた仁科に発見され、私の身元を調べ、結果的に仁科の養子となることで私は日本へ来る事が出来たのである。

そんな私と仁科は今、高校の入学式の会場へ向かっている真つ最中である。もちろん今春から高校へ通うのは私である。といっても、この高校は日本の防衛省管轄であつて、決して普通の高校ではない。

学校名は『国立SF学園』という。『SF』とは『Strike Force』の略称であり、『Strike Force』とは戦闘を主

な目的としたワードスーツのような兵器のことである。このSFパイロットを育成することを目的とした学園、それが『国立SF学園』なのである。

この学園には全国から成績の優秀なものだけが集められ、将来的には国防の要たる国防軍へ入隊するための教育を受ける場所なのである。

そんなSF学園は日本本土にあるわけではない。八丈島から約15kmの位置に建造されたメガフロートが丸々学園なのである。大きさは約100万平方メートル、東京ドーム換算にすると21個分以上となる。

何故ここまで大きなメガフロートを用意したのか。それは、このメガフロートがアークロジックを目指しているためである。それに加え、学園内での戦闘訓練なども行われるためにこのぐらいの広さ必要とするのであった。

メガフロートに学園があるために、学園へは空路を使うのが一般的である。例にもれず私たちも輸送機をチャーターして向かっている。「そろそろメガフロートへ到着いたします。」

機長のアナウンスが聞こえる。輸送機の客室に乗っているのは私と仁科の2人のみである。

普通であれば、一個人が輸送機をチャーター何てまねはできない。しかし、仁科は元国防軍の軍人であったため、当時のコネを使ってチャーターしたらしい。

窓から見えるメガフロートがだんだん大きくなってきた。

駐機場へ着陸し、積み込んでいた荷物を私と仁科で降ろす。あたりを見回すと、自分たちの乗ってきたものと同じような可変翼機が多く泊まっている。

メガフロートを学園にしている関係上、この学園は全寮制となっている。部屋には必要最低限の家具等が予め用意されているとのことだが、やはり一人一人が棲み処を移すとするとそれ相応の荷物量にな

る。

そのため、2人で荷物を運ぶとなると大変である。

「事務室かどこかで台車を借りてくるよ。荷物は全部部屋に運んでおくから、藍那は学園を少し見てくるといい。」

「分かった。荷物は適当に部屋の中へ入れておいてくれればいいから。」

「了解だ。式に遅れるなよ?」

「分かってる。」

短い会話の後、藍那は駐機場を後にし、校舎などの立っているエリアへ向けて歩いて行った。

特にあてもなくフラフラと歩いてきたはいいが、あまり入学式の会場から離れてはいけないので、適当に座れるところを探す。

因みに、携帯端末にはこの学園の地図が入っている。地図は入学案内に際し、新入生に向けて配布されたものだ。

会場は学園内で大講堂と呼ばれている大きめのホールである。

タブレットタイプの携帯端末を取り出し地図のデータを起動させ、大講堂近くまでルート案内機能を使い向かう。

大講堂の近くにちようどよさそうな休憩場のような建物を見つけ、藍那は腰を下ろす。

式は10時から始まる予定となっている。現在に時刻は9時前である。余裕を持って10分前には入場するにしても時間に余裕がある。ここから会場まで歩いて5分とかからないだろう。そのため、後45分程時間がある。

「こんな時間に時間があるのなら、部屋に荷物を入れるのを手伝った方がよかつたのかもしれないな・・・。」

こんなことを呟きながら、携帯端末を操作してweb小説のサイトを検索し、予めブックマークを付けておいた小説を読み始める。

自分は日本で生まれ育っていないために、初めは日本語を話すことが出来なかつた。しかし、今は日常生活に何の支障をきたさずにレベル

までになっている。それに一躍買ったのは小説であった。そのため、今でも空き時間を利用しては小説を読む癖がついてしまっている。(まだ時間もあるし、小説読んでたらずぐに時間もたつてしょ。)

読み始めて20分ほどが経った時である。

「あのー、すみません。新入生の方ですか?」

読書中とはいえ、声をかけられたらきちんと顔を上げて対応するのが礼儀であるため、声の方向へ顔を向ける。

そこには、藍那と同じく真新しい制服を着た少女が立っていた。

少女はどちらかと言うと愛らしい顔つきをしている。彼女も藍那と同じく髪はロングの黒髪、それを三つ編みにしている。身長は140cmほどであるが、一際目を引く巨乳の持ち主で同年代の平均を大きく超えている。

「何ででしょうか?」

藍那の容姿は自他ともに認める目つきの悪さによって、とても人相が悪い。日頃から「怒ってる?」や「何でにらむの?」などと言われるほどである。

しかし、藍那の容姿は目つき以外は文句のつけようが無い程整っている。背中の中ほどまで伸ばした黒髪をポニーテールにし、前髪は目にかかるかかからないか程にしている。

総合的に評価するのならば美少女に含まれるだろう。

「ご、ごめんなさい。読書中に声をかけてしまって、本当にごめんなさい。だから、怒らないでください。」

案の定怒っていると勘違いされていた。

声をかけた張本人は、怒られたと勘違いしているためおどおどしている。

「大丈夫ですよ。起こっていませんから。この目つきのせいで、よく怒っていると間違われるんですよ。」

「そうだったんだ……。よかった……。」

相手は怒られているわけではないと分かり、胸をなでおろしている。

「ところで、要件は何ですか?」

「ああ、そうでした。入学式の会場ってここであってますよね？携帯の充電忘れてて、使い物にならなくなっちゃて……。」

「ここであっていますよ。式の開始は10時からなのでまだ時間はありますよ。」

「良かったです。」

「どうやら、場所があっていたため、ほっとしたようだ。」

「あっ！私の名前は西原にしはらかなこ香奈子かななこっていいいます。よろしくお願いします！」

「私は仁科藍那です。こちらこそよろしくお願いします。それはそうと、モバイルバッテリー使います？」

「藍那が制服のポケットからモバイルバッテリーを取り出す。」

「いいんですか？ありがとうございます。」

「香奈子はモバイルバッテリーを受け取り、早速自分の携帯端末の充電を始めた。」

「もう少ししたら会場に向かおうと思っているのですが、ご一緒にどうですか？」

「構いませんよ。」

短い会話を交わし、香奈子は藍那の横に腰を下ろした。

時刻は9時45分、入場するには丁度いい時間である。

「そろそろ移動しますか？」

「そうですね。行きましようか。」

藍那の問いかけに香代子が同意を示し、2人揃って会場へ向かって歩き始めた。

式の始まる10分前とはいえ、保護者席や来賓席はいっぱいになっている。生徒席も同じくほぼ満席となっていた。

「あそこなら2つ席が空いていますよ？」

「どうやら香奈子が席を見つけたようだ。」

「取られないうちに急ぎましようか。」

会場の中辺りの席をとることが出来、後は式が始まるのを待つだけとなった。

席につき、ひと段落したところで、「これより、2076年度入学式

を始めます。」というアナウンスが流れた。

式自体は普通の高校とあまり変わらなかった。

長い校長の話、その後の来賓祝辞、そして、在校生と新入生のあいさつといったものだ。敢えて普通の高校との違いを上げるとしたら、それは来賓に軍の将校が来ていることぐらいである。

入学式の後には各教室に分かれてのホームルームとなった。

クラスは携帯端末に学生番号と一緒に式の終わりに送信された。

「仁科さんは何組になりました？」

「藍那でいいですよ。私は2組ですね。西原さんは？」

「私も2組ですよ。同じクラスですね。それと、私も香奈子で大丈夫ですよ。」

「では、香代子。あまり時間もありませんし、そろそろ教室へ移動しませんか？あまりゆつくりしていると、出口が混雑しますしね。」
「そうですね。」

2人は式が終わってあまり時間が経っていないため、まだほとんど混雑していない出口へ向かって移動を開始した。

教室に入ると、自分達を含めてまだ5人しかいなかった。

座席表は予め黒板に貼られていた。どうやら席順は学生番号順であるようで、藍那と香奈子は隣同士だ。

2人とも席につく。まだホームルームが始まるまでは時間があるため、クラス内にいる5人で雑談となった。

「初めまして。私は西原香奈子です。これからよろしく願いします。」

「仁科藍那です。よろしく願います。」

「こちらこそ初めまして、私は岩谷雫です。それで、こっちは木村さんで、こっちは工藤さんです。」

「初めまして。木村律子です。」

「工藤春香です。よろしくです。」

各々自己紹介を終えると、香代子が教室を見回し不思議そうに声を

上げる。

「教室って何だか大学の講義室に似てますよね？」

岩谷・木村・工藤の3人が教室を見回す。

「確かにそうですね。言われるまで何とも思わなかったけど、確かに似てる。」

「やっぱり国立の学園だからかな？」

「逆に普通の高校ってどんな感じなの？」

「オープンスクールを見た感じ、こんな風に教室の後ろが前よりも高くなってるって感じじゃなかったよ。」

「へー。そうなんだ。私はオープンスクール行ったことないからわからないよ。」

各々が会話をしている中、1人携帯端末を操作していた藍那が顔を上げる。

「どうも、ここは軍の管轄の学園である為、教室は軍大学と似せた構造になっているらしいです。学園のホームページに書いてありました。」

そう言い、端末を4人に見せる。

「本当だ。っていうか、やっぱり軍の管轄なんだ、ここ。」

そう言った雑談話しているうちに、教室にはだいぶ人が集まってきた。

「そろそろ時間だし席に戻るよ。」

3人とも席が前の方なので、ここで別れることとなった。

少しして担任の先生と思しき人物が入ってきた。

教壇に立ち、ホームルームを始める号令をかける。

「今からホームルームを始めます。これから2組の担任をする小鳥遊碧たかなしみどりです。よろしくお願いします。」

小鳥遊の身長は平均よりも高いが、とてもおっとりとしている。そのため、威圧感というものは一切なく、とても親しみやすい印象を受ける。

「ホームルームと言っても、今日はあくまで顔合わせといったものですから、まずは自己紹介からしましょうか。では、出席番号1番の相

澤さんからお願いします。」

最前列左端の席の生徒が立ち上がり、自己紹介を始める。

「相澤佳代あいざわかよです。趣味は——」

順に自己紹介が行われ、次が藍那の番となった。

「それでは、次の人お願いします。」

起立し、一通りクラスの中を見回した後、口を開く。

「仁科藍那です。趣味は読書で、よくネット小説を読んでいます。こんな悪い目つきですが、怒っているわけではないので気軽に声をかけてください。以上です。」

藍那が目つきの悪さを始めに言ったのは、以前の学校の教訓からである。1月にわたり、ずっと機嫌が悪いと思われ話しかけられないということが起きたのだ。

「では、次の人お願いします。」

「私は西原香奈子といいます。趣味は——」

一通りの自己紹介が終わる。どうやらクラスは全員女子のようだ。その後は明日以降の予定などの連絡なども終了し、自主解散となった。

「藍那さんは、これからどうするんですか?」

「私は荷物が寮に運ばれているはずなので、片付けもしたいですし、一度寮に行ってみようと思います。」

「私も行きます。」

2人はまだ賑わう教室を後にし、寮へと向かった。

SF学園の寮は基本的に2人部屋である。

2組は女子のみであるが、学園には少数ながらも男子生徒がいる。そのため、男子寮と女子寮とで棟自体が別れている。

部屋は大体だいたい35平米ほどの広さで、バスルームとトイレは別々になっている。クローゼット、ベッド、机がそれぞれ2つずつ、そして、共用のテレビが1台となっている。

部屋の広さやレイアウトは女子寮も男子寮も大きな違いはないが、生徒の割合上子寮は女子寮よりも小さい。

寮の部屋に到着し、ルームネイトの名前をお確認する。

予想はしていたが藍那のルームメイトは香奈子であった。

「まさか藍那さんと同じ部屋だったとはね。改めてよろしくお願いします。」

「こちらこそよろしく。まあ、考えてみると私の出席番号が17で香奈子が18。同室になる可能性は高いわね。」

「確かにそうだよ。それよりも、中に入ってみようよ！」

「分かった。」

カードキーを差し込んで扉を開ける。そこには、2人分の段ボール箱の山があつた。

藍那は自分が仁科に荷物を適当に入れておいてくれと言ったことを思い出し、頭を抱える。

（確かに適当に入れておいてとは言ったが、これは予想外だ。どうしようか。何をやるにしても、まずは片づけからだ・・・。）

藍那が頭を抱えている横で、同じように香奈子も頭を抱えていた。

「藍那さん、どうしよう!?!こんな量の荷物、今日中に片付かないよ！」

「まあ、ここにおいても事態が好転するわけではありません。とりあえず、中に入ってこつこつ片づけをしましょう。」

各々の荷物を箱から出し、衣類をクローゼットに入れたり、季節外れのものやベッド下の収納スペースに入れたり、地道に荷物を片づける。

開始から2時間後、ようやく一段落することが出来た。後は段ボール箱を寮の廃品回収場に持って行けば終了といったところである。

「片づけもほとんど終わりましたし、ずっと制服でいるのも何なので着替えませんか？」

香奈子が部屋着と思しき少しゆったりとした服をとり出だし、着替えは始める。

「一応確認するのだけれど、私がいても気にならないの？」

「特には気にしないですよ。だって、女同士ですし。流星に異性の人がいいたら気にしますけど。」

「そうなの・・・。じゃあ私も遠慮なく着替えさせてもらおうわ。」

藍那も部屋着を取り出し、着替えるべく制服を脱ぐ。すると、昔付

いた傷跡が残る素肌があらわになった。

「その傷跡、どうしたんですか？」

「私は以前、子供兵として戦っていたの。傷跡はその時のものよ。」

香奈子は藍那に何と返したらいいのか分からず、困惑していた。

入学編―2

ストライク・フォースと呼ばれる兵器には、専用のコアが必要である。このコアは『ガルダニウム』というレアメタルに特殊な加工を施したものである。

このガルダニウムは、21世紀初頭に日本の火山学者によって発見された。九州にある活発な活火山の河口付近に見慣れない鉱物を、火山の調査に来ていた学者グループによって発見された。

この学者グループは地質学者が中心であり、残念ながら鉱物学者はいなかった。そのため、その鉱物は国営の研究機関に持ち込まれ、精密な解析が行われた。それにより、この鉱物は未知の新元素であることが判明した。

解析によつてガルダニウムの驚くべき特性が3つ発見された。

1つ目の特殊は、常にエネルギーを放出し続けているということである。

通常、孤立系状況下では物質もエネルギーも交換しないために、系のエネルギー総量に変化が無い。しかし、ガルダニウムは孤立系においても、エネルギー総量が増加し続けたのである。これは、エネルギー保存の法則と反しているために、世界中の物理学者の常識というものごとく破壊されたのだ。

2つ目はワームホールと思われるものを生み出せるということである。このワームホールは、生物が通過することはできないものの金属等の無機物は通過させることが出来た。

最後は、ガルダニウムという名前の由来ともなった特性である。ガルダニウムに外部からのエネルギーを与えると、周囲の重力に影響を及ぼすというものだ。航空機に生じるGの制御に成功した。それに加え、空気摩擦を限りなく0に出来るというものである。

これにより、ガルダニウムを使用した超高速旅客機などが作られ、世界はより狭くなった。

この特性によつて、航空機関連技術に革命が起こされた。そのため、インド神話に登場する神鳥『ガルダ』にちなんでガルダニウムと

名付けられた。

これらの特性に目を付けたのは、ガルダニウムを平和利用しようとする者たちだけではなかった。

各国はこぞってガルダニウムを使用した兵器開発に着手した。

しかし、ガルダニウムが産出される地域は限られていた。その中でも大量かつ良質なガルダニウム産出されたのが日本であり、ガルダニウムによって瞬く間に日本が資源大国となった。

そのため、日本はガルダニウムを使用した技術開発において、他国よりも1歩先を歩むことになった。それによって生まれた技術の1つがストライク・フォースの原型となるものであった。

いつしかガルダニウムは、人類の生活において必要不可欠なものとなりつつあった。

これによって世界は、ガルダニウムを巡り2023年に10年にも及ぶ第三次世界大戦が勃発した。当然、世界有数のガルダニウム産出国である日本も戦争に巻き込まれた。しかし、日本はストライク・フォースを戦闘に導入し、他国を圧倒した。これにより、ストライク・フォースの戦術的優位性を世界中に知らしめることとなった。

ストライク・フォースのコアには使用者との適合率というものがある。この適合率が30%以上でなければストライク・フォースを動かせることができない。このコアは何故か男性より圧倒的に女性の方が適合しやすい傾向にある。

そのため、SF学園の生徒の比率も男子1に対して女子9となっているのである。

香奈子は藍那に何と声を掛ければ良いか分からず、部屋の片づけが終わった後も2人の会話はなかった。

時刻は午後6時半。少し早めに夕食をとるのならちょうどいい時間だろう。とは言え、やはり香代子から藍那を誘うのは、少し気が引ける。

(このままだと物凄く気まずい……。でも、私から夕飯に誘うのは

なあ……。」

そんなことを考えていると、

「少し早いけど、夕食にしない?」

このタイミングでの藍那からの誘いは、香奈子からすれば渡りに船である。

「どこでも食べますか? やっぱり食堂に行きますか?」

SF学園の食堂はメニューが豊富かつ、生徒なら無料で食事ができる為利用する者も多い。

「いや、購買で適当に買って来てここで食べようと思っているわ。どうしても食堂に行きたいというのなら、私はそれでもかまわないけれど。」

「いえ、大丈夫です。今日は部屋で食べましょう。」

「そう? なら、混雑しないうちに行きましようか。」

2人揃って部屋を後にした。

購買は寮の1階にあり、藍那たちの部屋は3階にあるため少し距離がある。もちろん購買も規範的に生徒であれば買物は無料である。

「食べ物だけじゃなくて、日用品もたくさん置いてますね!」

香奈子が感心したような声をあげる。

「一応、ここに来れば日々の生活に困るようなことはありませんよ。夕食なら、このお弁当なんていいかですか?」

購買の従業員の女性が日替わり弁当を勧める。

「迷うな……。藍那さんはどれにします?」

「私はこのレーションでいいわ。」

藍那が手に持っているのは、不味いと評判のブロック状の携帯食料である。

「そんなものより、日替わり弁当のほうがいいよ?」

店員が不思議そうな顔をしながら日替わり弁当を勧めてくる。しかし、

「いえ。私はこれでいいんです。」

「そうかい? じゃあ、一応学生証を見せてもらえるかい?」

藍那が学生証を取り出し、店員に見せる。

「香奈子は決まりましたか？」

「は、はい。私は日替わり弁当にします。」

香奈子も店員に学生証を見せる。

「それでは、部屋に戻りますか？」

2人揃って部屋に戻っていった。

「レーションを買っていくなんて、変わった子だね。」

店員は心底不思議そうに呟いた。

部屋に到着し、夕食の準備をする。時刻はもうすぐ午後7時、夕食にはちょうどいい時間だろう。食事の準備と言っても、先程購買で買ってきたものを机の上に出すだけであるため、すぐである。

「では、食事にしますか？」

「そうですね。」

藍那は包ビニールを解いてレーションを取り出し、香代子は弁当の蓋をとって食事を始める。

食事を始めて少し経ったとき、藍那が口を開く。

「香奈子は私の過去のこと、気まづくなってしまうているのではないですか？」

「・・・はい。聞いてはいけないことだったのではないかと思って・・・もしそうなら、とても申し訳ないことをしてしまったから・・・。」

「私は、自分の過去のことと触れられるのは、別に何とも思いませんよ。ただ、そのことで私を腫れ物のように扱うのはやめてほしいですね。ですから、香奈子が気にすることはありませんよ？」

「えっ？怒っていたんじゃないんですか？」

香奈子は心底驚いているようである。

「・・・？どうして？」

「だって、あれから何も話しかけてくれなかったし・・・。」

「それは、別段話す用事がなかったからですよ？」

「そうだったんだ・・・。安心しました。良かった・・・。」

小首をかしげながら話す藍那に対して、香奈子はほっとしている。

「それはそうと、明日の朝一番から実力テストですね。香奈子は大丈夫ですか？」

「忘れてた……。ど、どうしよう!？」

香奈子は絶望の淵に立たされた人間の顔になっている。

「たぶん大丈夫だと思いますよ？単に入学直後の実力テストというだけですから。」

「でも不安だよ……。」

「私は明日に備えて、早めに寝ます。」

「勉強しなくて大丈夫ですか？」

「直前になってやってもあまり意味はないと思うので、テスト中に十全の力を発揮できるように、早めに寝ます。」

食事の後、テスト勉強に勤しむ香奈子をしり目に、藍那はシャワーを浴びて直ぐに就寝した。

翌朝、2人とも7時に起床し、朝食を済ませて8時から始まるホームルームに間に合うように登校する。

藍那はよく眠ったため、一切寝不足といった様子はない。しかし、対照的に香奈子はとても眠たそうである。

新入生は今日から3日間、学力テストや身体測定、それに加えて、ストライク・フォースを実際に動かす講習など、様々なことを行う。

SF学園は軍の管轄であるが、普通科の教科も学ぶ。そのため、実力テストは国語・数学・英語・社会の4つが行われた。

時刻は12時半、昼休憩である。

「テスト……。駄目だった……。」

香奈子は机に突っ伏してうなだれている。

「いつまでもそんな調子だと、5限目に遅れますよ?。」

藍那は香奈子と対照的に、朝に購買で買っておいたレーションをかじっている。

「藍那さんはテストできたんですか?。」

「私はまあまあといったところです。それよりも、次は体力測定なんですから、昼食を抜いては支障をきたしますよ?。」

藍那に促され、香奈子は昼食をとり始めた。

昼休憩は1時間であるため、5限目は13時20分から開始される。

今日の5限目は体育で、体力測定が行われる。

SF学園は入学するにあたり、生徒たちのだいたいの身体能力を把握している。しかし、軍管轄の学園であるため訓練も行われる。そのため、生徒たちの正確な身体能力を把握しておく必要があるのだ。

学園内にはグラウンドが5つある。そのうち、今2組が集合しているのは2つ目の第二グラウンドである。

体力測定として行われる科目は、持久走・反復横跳び・短距離走・上体起こし・握力測定と言った、普通科の高校でも行われているものばかりであった。

軍管轄の学園に在学している学生とはいえ、まだ入学して間もない。当然、入学早々の体力測定では普通の高校の記録と大差ない。優秀な成績を残す生徒もいるが、それは中学生時代に部活動等でのトレーニングで鍛えている者たちである。

しかし、一般の生徒とは次元の違う記録を残す生徒がいた。それは、仁科藍那である。

藍那は、ほんの数年まで子供兵として戦っていた。戦場で生きていくのは、生半可な鍛え方では不可能である。それも、少女であるのだからなおさらである。

養子となり日本に来た後も、体力を維持する以上にトレーニングを行ってきた。それにより、藍那は高校生の平均を大幅に上回る記録を出したのであった。

一日の授業がすべて終わり、藍那と香奈子は自室で休んでいた。

「それにしても、藍那さんはすごく運動ができるんですね?」

「まあ、私は日本に来た後もそれなりにトレーニングしていたもの。」

「そうなんです。それはそうと、明日はストライク・フォースの訓練ですよ? 私、すごく楽しみです。」

「訓練と言っても、午前は講習会、午後からは歩行練習だけでしょ? 実

際にSFを使った飛行や闘訓練とかの本格的な運用訓練はまだ先よ？」

「でも、やっぱり楽しみですよー！」

香奈子はとてもうきうきしているようだ。

「ところで、藍那さんのコア適合率ってどれぐらいでした？」

「私は60%でした。香奈子は？」

香奈子は目を丸くして驚いている。

それは無理もないことである。通常、コアの適合率は平均30%程であり、高くても40%程である。にも関わらず、藍那は60%という平均を大きく上回る数値であるのだ。

「わ、私は、37%です……。」

少し香奈子の表情が暗くなる。

「これでも、結構高い数値だと言われて、正直浮かれていたんです……でも……。」

「あまり気にしなくてもいいと思いますよ。実際に適合率は25%あればSFが動かせるわけですし、普通にSFを運用するにあたって37%は十分な数値だと思いますよ。」

「そう、ですか？」

「ええ、適合率は訓練次第でどうにかなると思います。ですから、頑張っていきましょう。」

「はい！私頑張って訓練しますー！」

香奈子は先ほどと違い、やる気に満ちていた。

翌日は朝一番からグラウンドに集合していた。2組が集合しているのは、昨日と同じく第二グラウンドである。

生徒はSFを装着する際に着用する特殊スーツ、通称『SFスーツ』を着用している。SFスーツの目のためには競泳水着を彷彿とさせるデザインをしている。

二列横隊の生徒の前には並んでいる、学園所有である訓練用SF『初風』6機と国防軍主力SF『摩耶』を装着した教官2人である。

教官は埼玉の入間基地所属の現役軍人で、指導のために来ている。教官は2人とも女性である。それは、SFのコアとの適合率の関係上、国防軍のSF部隊の人口比率も9対1という構図になっているためである。

講習と言ってもSFの安全管理の講習や捜査上の注意など、様々な項目がある。そのため、SFを用いての歩行訓練など、実際に生徒が操縦するのは10時を過ぎてからであった。

SFはパワードスーツのような兵器であるが、大きさは2〜3mととても大きい。その大きさ上、操作はマスタースレーブ式操作法が採用されている。

そのため、握力制御などの微調整がとても難しい。よって、最初に行われる訓練は、卵を割らないようにつまむこと。そして、基礎的な運動を行い、SFの操作に少しでも早くなじむことである。

講習の後、学園が所有している初風を使用しての機動訓練。その後、午後からは先に述べたように、基礎的な訓練が行われた。

基礎的な訓練はやはりとても地味である。SFを装着してグラウンドを走り回ったり、SF使用しての格闘訓練。ましてや飛行訓練などを想像していた生徒からすると、とても残念この上ないだろう。

そんな地味な作業は体力よりも精神力を消耗する。

卵の殻と同じ硬さのボールをつぶさないように摘まむというのは、絶妙な力加減が要求される。卵を摘まむなんて簡単だろうと思うかもしれないが、SFの握力は軽く人間の10倍近い。そのため、少しでも力を入れすぎるとたちまち割れてしまうのだ。

そんな作業に悪戦苦闘している生徒たちに対し、教官はいとも簡単に摘み上げる。

「やっぱり凄い・・・。」や「あんなに簡単そうに・・・。」といった声が生徒たちの中から聞こえる。難しさを実際に体験している為、教官がやっていることが如何に凄いかを身に染みて体感していたのだ。

「今日は疲れました・・・。」

香奈子は自室のベッドに倒れこむように横になり呟いた。

「やっぱり力加減は、少し難しいわね。」

椅子に腰かけた藍那も応える。

「でも、藍那さんは最後の方にはちゃんと割らずに摘まめてたじやないですか。やっぱり、コツとかあるんですか？」

「コツという程じゃないけれど、機械越しに物体の感触を感じるようにするといいですよ。」

「……………全く分からない……………」

「時期、分かるようになると思いますよ。教官たちも似たようなことを仰っていましたし。」

「うーん、やっぱり才能なのかな？」

「確か、偉人の言葉に『天才とは努力する凡才のことである』と言うものがあります。香奈子も努力すれば、きっとできるようになりますよ。」

藍那に励まされ、香奈子は少し照れ臭そうにする。

「そういえば、明日もグラウンド集合でしたよね？今度は何をやるんだろう。」

「明日の予定については、訓練着を着た状態で第二グラウンド集合としか連絡を受けていないので不明です。まあ、なんにせよ。これからの学園生活で使うことになるであろうことの講習だと思えますよ。」

「そうですね。」

他愛のない話をして、一日の疲れを癒すのであった。

入学編―3

時刻は8時半。2組は第二グラウンドに集合していた。服装はみな訓練着を着用している。

訓練着とは、国防軍でも迷彩服に使用されている丈夫な生地を使用したものである。

「全員集合しましたね？今から射撃訓練場に移動します。私についてきてくださいね。」

担任である小鳥遊の指示に従って、クラスの面々が移動する。

「射撃訓練場ということは、やっぱり銃を使うための講習なんでしょうか？」

若干不安そうに香奈子が藍那に尋ねる。

「たぶんそうでしょうね。しかし、銃を使うということにあまり不安を抱く必要はありませんよ？きちんとした使い方をすれば、あまり危険なものではありません。」

藍那が励ますが、やはり香奈子の不安はぬぐえていないようだ。

第二グラウンドから徒歩で約5分のところに射撃訓練場がある。

訓練場に入ると、白髪の混じった頭の男性がいた。顔には少なくとも皺があり、口髭と顎髭は綺麗に切りそろえられている。外見的には還暦に近いような渋い印象を受ける。生徒と同じく訓練着を着ているが、デザインが若干違っているためどうやら教員のようだ。

「私はここまでです。この後は、射撃訓練場担当の岸先生に引き継いでもらいます。では、岸先生。後はよろしくお願いしますね。」
どうやら、小鳥遊は生徒を案内するためだけだったようだ。

「先ほど紹介を受けた岸だ。一応この射撃訓練場の責任者ということになっている。これから、実銃を使用するための講習を行うので、みな集中して聞くように。」

岸の声は姿に見合った渋いものだった。

「まず、銃とは――。」

銃の分類、安全装置、分解から組み立て、撃ち方などの事について、細かく説明がされる。しかし、藍那からすれば別段聞く必要を感じさ

せないものだった。

「——であるから……。その生徒。ちゃんと聞いているのか？ 今後の実弾訓練の時、安全に訓練を行うための講習なんだ。しっかり聞くように。」

自分からすればどうでもいい話だと思い、聞き流していた藍那が岸に注意を受ける。

「先生、先程からお話になっていることは、教本に乗っていることと大差ありません。」

まさか注意した生徒から、反論が返ってくるとは思っていなかった岸は少しぼかんとする。

「それに、私はある程度銃の扱いになれており、所持及び携帯を国家機関から緊急事態の場合に限りますが、許可を得ております。ですので、出来れば退出を認めていただけないかと思えます。」

2組の面々は藍那の言葉に岸が激怒するかと思った。しかし、岸は落ち着いた雰囲気で

「いいだろう。しかし、そこにある分解されたハンドガンを組立・射撃し、30 m先の的に命中させることが出来たらだ。お前が言うことが本当ならばたやすいだろう？」

と、提案をした。

「了解しました。」

藍那が短く応え、分解された銃が置かれた机の前に立つ。

「ガバメントですか。この銃なら簡単です。」

そうつぶやくと、瞬く間に銃を組み立てる。

その手際の良さに岸は「ほう」と感嘆の声を漏らす。

「岸教諭、弾をいただけないでしょうか？」

「いいだろう。」

実弾を保管している棚のカギを開け、3発の銃弾を取り出す。

「弾は3発だ。」

「十分です。」

短い会話の後、藍那は弾マガジンに詰め射撃場へ向かう。そして、30 m先の的に向かって、3度引き金を引く。

3回の銃声とともに打ち出された弾は、的の中心付近を打ち抜いた。

岸は機械を操作し、的を近くに移動させ着弾点を確認する。弾は中心から誤差10cm以内にあたっている。

「・・・いい腕だ。」

岸は的を見ながらしみじみと言う。

「退出を許可する。昼からの講義は1時半より、第3特別訓練場だ。遅れるなよ?」

「はい。ありがとうございます。」

藍那は岸に一礼し、射撃場を後にした。

「よし。まあ、射撃のデモンストレーションはこんな感じだ。講習を再開するぞ?」

岸は何事もなかったように、講習を再開した。

藍那は射撃場から退出した後、SF訓練場へ向かっていた。

昨日の最後にはSF操作のコツを少し掴めて、卵の殻と同じ硬さのボールを割らずに掴まめていた。しかし、それはあくまで感覚を掴めてきたというだけであって、その感覚をものにしたとは言えない。そのため、藍那は講習を途中退出し、自主練習に向かっていた。

藍那が歩きながら、ふと腕時計で時刻を確認する。

(まだ9時半。昼からの講義は1時半からだから、11時半に終わればちょうどいいぐらいね。)

そんなことを考えつつ歩いていると、SF訓練場に到着した。

SF訓練場は地下1階、地上3階のなかなか大きい建物である。地上部分は主にSFの操作訓練を行う設備があり、地下には格闘訓練にも対応した広い空間がある。

藍那はSFの貸し出してもらおうべく、受付に行く。

「あの。SFの訓練をしたいのですが、貸し出してもらえますか?」
受付兼警備員の男性に声をかける。

「訓練のメニューは?」

「まだSFの感覚をつかめていないので、ボールを掴まむ基礎訓練です。」

「基礎訓練ってことは・・・、君、新入生だよな？今の時間、銃の講習やってるはずだけど、君は何でここにいるの？入学早々さぼり？」

「いえ。さぼりではありません。きちんと教諭の了解を得ております。」

「本当に？」

「ええ。確認していただいても構いません。担当教諭は第二射撃訓練場担当の岸教諭です。」

「分かった。確認してくるから、少し待つてね。」

「分かりました。」

事務室の奥に受付の男が消えていった。

数分後、男性が帰って来た。

「確認とれたよ。疑って悪かったね。で、基礎訓練だったよね？場所は2階の204号室。貸し出しSFは初風の067番機を使用してくれ。これが部屋のキーカードで、こつちがSFの起動キーカードね。訓練が終わったら、またここに返しに来てね。では、頑張つてね。」

受付の男から2つのキーカードを受け取る。

「ありがとうございます。」

藍那は小さくお辞儀をし、2階への階段に向かって歩き始めた。

再び腕時計で時刻を確認する。

(あと少しで9時45分。思いのほか時間がかかってしまったわ。)

足早に訓練室へ向かう。

カードキーで開錠し訓練室に入る。訓練機を起動させ、訓練着の下にあらかじめ着ていたSFスーツ姿となり、自主訓練を開始した。

その頃、射撃訓練場では実技講習へと移っていた。

皆、銃の分解組立から射撃訓練を2つの班に分けて行っていた。皆真剣に作業に取り組んでいた。

射撃訓練を行っている者たちからは、「あれー、的に当たんない・・・。」や「仁科さんはあんなに簡単そうにやってたのに・・・。」

といった声が聞こえる。

「どうだ？銃つてのは意外に難しいだろ？1日2日で上達するもんじゃないから、こつこつ地道に練習していくしかないぞ？」

担当の岸が生徒を励ましながら、訓練を行っていた。

一方で銃の分解組立の練習を行っている班は、マニュアル本が配られていた。やはりマニュアルを見ながら作業しても、慣れない作業であるのでスムーズにいかない。そのため、皆黙々と作業に取り組んでいた。

分解組立の実習を行っている生徒の中に、クラスの委員長を務めている小林静がいる。静は腰のあたりまである黒髪をカントリースタイル・ツインテールにしている、少しツンとした雰囲気少女である。銃の分解組立という地味な作業のストレスでイライラしたのか、静が途中退出した藍那に対し怒り始めた。

「仁科さんって、どういうつもりなんですか？」

「どうっていうと？」

静と同室者の佐々木七海が応える。

七海は淵の細い眼鏡をかけた、赤い髪の少女である。髪は肩の辺りまで伸ばしており、少し長めの前髪をヘアピンで留めている。

「自分は周りの人たちと違うっていうような行動よ！ああいった行動はクラスの輪を乱すからやめてもらいたいものよ。」

「でも凄かったよね……。私じゃ無理だよ。静もあんなに簡単に出来ないでしょう？」

「ええ、まず無理ね。銃の組立だけでこんな手間取っている私じゃあ、絶対に無理。」

「そうよね。やっぱり、仁科さんにはこの講習、必要ないんじゃない？」

「あなたまで……。そうやって認めてしまったら、これからも勝手な行動に出る人たちを容認してしまうでしょう！」

「ごめんごめん。まあ、そうよね……。だったら、直接言ってみたら？席近いんだし。」

「そうするわ。」

「まず私達は、仁科さんに追いつけるように頑張ろう！」
再び七海が作業に戻り、静も七海にならない作業へ戻った。

時刻は11時半となり、藍那は自主訓練を終えて片づけをし、受付にカードキーを返却した。

(少し早めに昼食にしようか。今の時間だと購買もすいているでしょうし。)

昼食を購入すべく、自分達の女子寮一階の購買へ向かった。

いつもと同じく昼食はレーションであった。

レーションを食べ終え、時計を確認する。時刻は12時15分。次の第3特別訓練場へ移動する前に行っておきたいところがあるため、少し早いが移動することにした。

藍那は第二射撃訓練場に併設されている教官室に来ていた。扉を3度ノックし、

「仁科藍那です。入室してもよろしいでしょうか？」

と、尋ねる。

「どうぞ。」

入室許可の返答はすぐに帰ってきた。

「失礼します。」

藍那が部屋の扉を開ける。部屋には日替わり弁当を食べている岸がいた。

「すみません。お食事中でしたか？」

「いや、かまわんぞ。」

藍那は岸のもとまで行き、頭を下げ謝罪する。

「先ほどは大変失礼な態度をとってしまい、申し訳ありませんでした。」

岸は手を振って応える。

「まあ、お前には退屈な話だっただろうな。今更銃のことについて説明を受ける必要はないよな。」

「・・・はい。」

「それで、講習を抜け出して、SFの自主訓練をやったのか？驚いたぞ。いきなりSF訓練場の受付から、「目つきの悪い不愛想な生徒が来て、講習を退出する許可をもらったって言うのだが、それは本当か？」って連絡してきたんだからな。」

「それは、ご迷惑をお掛けしました。」

「いや、いいんだ。それにしても、その目つきはあの時から変わらんな。一目でお前ってわかったぞ。」

「そういう貴方も以前とあまりお変わりありませんね。岸明雄きしあきお大佐。」

「大佐はやめてくれ。もう俺は退役した身だ。今はただのSF学園の教官の1人だよ。それよりも、右肩は大丈夫か？」

「はい。全く問題ありません。貴方に撃たれた傷跡は残っています。が、以前の状態と差異はありません。」

「そうか……。それは良かった。」

「どうなされたのですか？肩の傷のことは、2年以上前のことでしょうか？」

「いやな、思いのほか的中心から離れた所に当たっていたんでな。もしかしたら、あの時の傷が後遺症となっているんじゃないかと思つて、少し心配していたんだよ。」

「そうだったのですね。中心を外したには、単純に今の私の実力です。なんせ、平和な日本では、撃つ機会は極めて少ないですから。」

「それもそうか。そろそろ移動した方がいい時間だ。気が向いたらまた遊びに来い。」

「はい。それでは、失礼します。」

岸との会話を終え、藍那は第3特別訓練場へ向けて移動し始めた。

藍那が第3特別訓練場へ到着したのは1時を少し過ぎた頃であった。

特別訓練場のエントランスには、2組の生徒が数人いた。藍那はその中に見知った顔を発見する。相手も藍那を発見した様で、駆け寄つ

てきた。

「藍那さん。心配しましたよ。今までの何やってたんですか!？」

「講習を途中退出した後は、SFの自主訓練をやっていたわ。それより、香奈子は随分と速いのね。」

「ええ、購買が空いていたから。つて、そんなことより、昼からの講義にも来ないんじゃないかって、本当に心配したんですからね!」

いきなり香奈子に詰め寄られ、藍那は少し困惑する。

「そう、それはごめんなさいね。さすがに無断欠席はしないわ。」

「そうですよね……。でもですよ!いきなり講師の先生にと移出してもいいかなんて——」

「香奈子も講習の後、実際に銃を撃つたの?」

「このままでは埒が明かないと判断し、強引に話題を変える。」

「撃ちました。物凄く難しかったです。」

「やっぱり、初めてだからハンドガンだけ?」

「いいえ、アサルトライフルっていうんですか?大きいサイズの銃も撃ちました。」

「そうなの。流石は軍の管轄といったところね。」

「はい。それにしても、やっぱり藍那さんは凄いですね。私、なかなか的に当てられませんでした。それなのに、藍那さんはあんな簡単そうに……。」

「まあ、私の場合は経験があったから。香奈子もすぐに上達するわ。」

「そうですね。何か銃を撃つときのコツとかってありますか?」

「あなたの射撃を実際に見てないから、何とも言えないわ」

「そうですね。また教えてくださいね。」

「もちろんよ。」

会話をしているうちに人もだいたい集まってきている。

「2組の生徒は第1講義室に集まってください。」

アナウンスがかかり、生徒たちが移動を始める。

「私たちも行きましょう。」

藍那は香奈子に手を引かれるような形で、移動を始めた。

講義開始時刻である13時半を迎え、講義室に2組のメンバーは着

席して待っている。

少しして講師と思われる壮年の男性が入ってきた。年齢は40代かそれ以上で、刈り上げたほぼ白髪のと白髪交じりの無精ひげが特徴の男性だ。

「みんな集まってるか？午前中の講習を途中退出した不良娘がいたそうだが、ちゃんと来てるか？おっと、俺はこの第3特別訓練場の担当教官の1人の石塚啓吾いしづかけいごだ。よろしく。」

石塚は飄々とした口調で「実にオツサンくさい」といった印象を受ける。

「早速だが、講義の説明を始めるぞ。残念ながらあまり時間が無いから、手短かに説明するぞ。質問や聞き逃しは後でまとめて受けるから、まず一通り聞いてくれ。」

石塚が一通り見渡し、説明を始める。

「簡単に説明すると、模擬戦闘をやってもらおう。」

石塚の言葉に「「ええええ!!」」と声上がる。

「まあ、聞けて。使うのは実銃だが、弾は訓練用のペイント弾だ。撃ち方は午前中に習っただろ？場所はこの訓練場の市街地エリア。同時に訓練を開始して、総当たりのバトルロワイアルだ。時間は今から移動して、30分後に開始。終了は残り1人になるまでだ。質問は？」

小林が手を挙げて質問する。

「1つよろしいでしょうか。この訓練の目的は何なのでしょう？」

「目的としては、この訓練場の使用方法を学んでもらうのと、入学早々のお前たちの実力測定だ。」

SF学園では、実技の上達度を図るために、学期はじめに実力測定として実技演習を行う。今回の模擬戦闘もその一環なのである。

「ありがとうございます。」

「他には無いか？」

藍那が挙手する。

「おお、不良娘か。なんだ？」

「今回使用する銃はなんのでしょうか？」

「ハンドガンがM1911A1通称『ガバメント』、アサルトがM4A1カービンだ。アンダーバレル装着の武装は無し、フォアグリップと各種スコープの装着は各自自由だ。」

「わかりました。ありがとうございます。」

「他に質問は無いか?」

手は上がらなかった。

「よし、じゃあ、全員ついてこい。」

石塚を先頭にして、市街地エリアに向かって移動する。

「ど、ど、どうしましょう!?!?」

いきなり香奈子が藍那に泣きつく。

「香奈子。まず落ち着いて。今回はあくまで模擬戦闘。当たったら痛いとは思うけれど、死にはしないわ。」

「そういう問題じゃないですよ!!」

「・・・?どういう問題?」

「当てれる気がしないですよ・・・。」

「大丈夫ですよ。あくまでも実力測定の一環。少々成績が悪くても問題はないわ。それに、まぐれでいい結果が出るかもしれないわよ。ビギナーズラックというやつね。まあ、装備品についての解説ぐらいはするわ。」

「藍那さん!私を守りながら戦ってください!」

香奈子が懇願する。その懇願に藍那が微笑む。微笑むと言っても、藍那は目つきの悪さで悪事をたくらむような表情になってしまっているが・・・。

「嫌です。」

一言で香奈子の懇願を切り捨てた。

「そんなあ・・・。」

「さあ、早くいかないとおいていくわよ。」

「まったく!酷いですよ!待ってください!!」

スタスタと歩調を速める藍那を半泣き状態の香奈子が追いかけていった。

模擬戦闘が始まって15分が経過した。

市街地エリアで30人の総当たり戦、つまり遭遇戦である。市街地エリアの広さは東京ドーム1個半分の大きさを誇り、ビル等の建物も忠実に再現されているため体感ではもつと広いように感じるだろう。そのため、遭遇する確率は自然と低くなる。

この模擬戦闘では、ペイント弾を使用しているため、着弾した位置がよくわかる。それを利用し、着弾位置によって持ち点から点数が引かれていく。最初の持ち点は全員一律で10点、引かれる点数は急所に近いほど点数が高く設定されている。例えば、頭と心臓の位置が10点、手足が1〜3点といった具合である。

低い遭遇率と減点方式のため例年通りであれば、2時間を越える長丁場なのだ。そのため、まだ始まって15分でキルカウントをもらっているのは、よっぽどの不運持ちである。

しかし、今回は違った。たった15分で20名もの生徒にキルカウントが出ているのである。

そんなありえない事をしているのは、他の誰でもない。もちろん仁科藍那だ。

藍那は模擬戦闘が始まって直ぐに、機械と化した。いち早く敵を見つけ倒すようにプログラミングされた戦闘マシン。差し詰め走る銃座と言って良いだろう。

生徒には目を保護するためのゴーグルは支給されているが、このゴーグルに他の生徒の位置を知らせる機能はもちろんない。にも関わらず、藍那はどこにいるかもわからないクラスメイトを次々と狩っていた。

藍那は子供兵時代に身につけた敵の気配を察知する鋭敏な感覚と正確無比な射撃によって一人で20人にキルカウントを出していたのだ。

藍那は5階建の雑居ビルのような建物の屋上に陣取り、アサルトライフルで狙撃をしていた。アサルトライフルには倍率変更機能の付

いていないダットサイトのみが取り付けられている。

藍那がまたもや建物の物陰に隠れている者を発見、何の迷いもなく引き金を引く。弾はターゲットの後頭部に吸い込まれるように着弾し、21人目のキルカウントとなった。

現在に位置から見えるターゲットはもうおらず、場所を変更する必要がある。

藍那はなるべく建物の中を通り、気配を消して移動する。移動中、三方向を高さ2mほどの壁に囲まれた所にいる者を発見した。

前方から攻めれば、最悪の場合銃撃戦となり、自分も被弾するかもしれない。

どうしようかと一瞬迷い、後ろへ回り込むことにする。

何をするか決めれば、即行動に移る。アサルトライフルを置いてハンドガンだけを持ち、パルクルのようにして生徒の背後にある壁の上に立つ。そこから生徒へとびかかりチョークスリーパーをかけ、藍那は相手のホルスターからハンドガンを抜き取る。そのまま、背中からほぼゼロ距離で、心臓の位置に1発撃つ。

22人目のキルカウントであった。

小林静は三方向を壁に囲まれた位置に陣取っていた。

ここならば敵が来るのは前方のみ、壁は2mほどあり狙撃されにくい位置である。ここで前を通った敵に銃撃すれば、確実に倒せるという自分の考えた最強戦法である。

そんなことを考えながら前方のみに集中していると、いきなり背後からチョークスリーパーをかけられた。そして、自分のホルスターから銃が抜かれ、背中に1度痛みが走る。

何が起こったのか分からず混乱していると、左耳のモニタールームにつながっている無線から「キル判定だ。直ちに待合室まで帰ってこい。」と指示が出された。

(待って、私がやられた!?ありえない……。だって、三方向壁なのよ……?)

混乱しながら前を見ると、目の前に仁科藍那がいた。状況的に見て私を倒したのは彼女だろう。

「どうやって……。」

思わず呟くような声で聞いてしまった。

すると、彼女は自分の背後の壁を指差し

「あの壁の上から奇襲しただけよ。」

あまりに短く、それだけを言っただけで横を通り過ぎていく。

「敵が来るのは前方からだけとは限らないわ。一応、全方向に注意をしておくことね。」

藍那から助言をされ、静は敗北感に襲われた。

静を倒し、アサルトライフルを回収して次のターゲットを探す。

移動している最中、少し離れたところで銃声が聞こえた。迷わず銃声の位置へ向かい、正確な射撃で倒す。

いつの間にか藍那を含め残り2人となっている。もちろん、彼女たちはそのことを知らない。

藍那は残りの敵を倒すべくフィールドを走る。しかし、どこからも気配を感じない。藍那は敵の発する殺気を頼りに探す。人間だしも、他人に銃口を向けるときには殺気が出るものだ。しかし、どこからも殺気を感じ取れない。

(おかしい……。何も感じない……。)

藍那は若干焦る。そんな時

「藍那さん。無事だったんですね？」

突如、背後から声をかけられた。思わずハンドガンを抜いて、素早く後ろを向く。そこには香奈子が立っていた。

(そんな……。私が香奈子の気配を感じられなかったなんて……。)

藍那は内心軽く混乱する。

「香奈子……。よね……。？」

「そうですね？あのー、あと何人ぐらい人が残っているんですか？流石に藍那でもわかりませんよね？」

香奈子はいつも通りの調子で藍那に尋ねる。その表情には一切、殺気を感じられない。その表情を見て、藍那は安心する。

(どうやら、香奈子は殺気を発していなかったから、気配を感じられなかったのね……。)

「わかるわよ。」

そう言つて藍那は香奈子にハンドガンを向ける。

「あ、藍那さん、撃たないでください!!」

香奈子は両手を挙げて降参のポーズをとる。

藍那は相変わらず悪巧みをしているような微笑みを返し、

「香奈子が最後の1人ですよ。」

香奈子の被っているヘルメットに向かって1発撃った。

香奈子にキル判定が入り、石塚の声で模擬戦闘を終えるアナウンスが流れた。

「さあ、香奈子。戻りましょう。」

若干、放心状態の香奈子に声をかける。

「は、はい。つて、藍那さん。酷いですよ!!」

我に戻った香奈子に大激怒された。

待合室に使われている第1講義室に藍那と香奈子に戻つてくると、藍那が先に部屋にいた石塚に苦笑いをしながら「やってくれたな」と言われた。

「私がかまざいことをしましたか?」

「あのなあ、一人で自分以外の29人平らげちまったら、訓練にならねーだろうが・・・。」

石塚は額を抑えながら続ける。

「お前が一人で全員やつちまったら、俺はどうやって今回の模擬戦闘の評価をつけりゃいいんだ?ただでさえ、30分で模擬戦終了なんて前代未聞だつてのに・・・。」

「それは申し訳ないことをしました。」

「本当に悪いと思つてる?」

「はい。」

「まあ、いいや。全員よく聞け、今から再度模擬戦をやる。今度はもちろん、こいつを抜いてだから安心しろ。」

こいつとは、当然ながら藍那である。

「というわけで、各自、準備を整えて、さつき使ったゲート前で待機。俺の合図でスタートだ。目安は今から10分後。いいな。各自解散。」

石塚の指示で藍那以外の全員が動き始めた。

10分後、予定外の模擬戦闘2回戦目が開始された。

モニタールームには教官の石塚と予定外の2回戦の元凶となった藍那がいた。

市街地エリアには各所にカメラが設置されており、訓練や模擬戦闘の様子を中継できるようになっている。

モニタールームにある大きなスクリーンには、模擬戦闘の行われている市街地エリアが映し出されている。

模擬戦闘が始まって約30分。断続的な遭遇戦による銃声が聞こえるが、未だにリタイア者は出ていない。

「お前にとっちゃこんな訓練、あくびが出るぐらい退屈だろ?」

じつとモニターを見ていた藍那に石塚がいきなり声を掛ける。

「兵士として実戦を経験している。それも1回や2回なんて生ぬるいもんじゃない。そんな奴が、今日初めて銃を握った素人の相手なんざ簡単すぎだよな?そりゃあ、一方的な狩りになるわけだ。」

藍那はモニターから目を離さず応える。

「そんなことを言ってしまったら、あなたもそうではありませんか?石塚啓吾大佐?」

「おいおい。俺はもう元大佐だぜ?2年前に岸と退役して、それからはずっとここで教官だよ。」

「では、あの内戦後直ぐに退役なされたのですか?」

「まあ、そうだな。」

「その後にご結婚なされたようですね。」

笑いながら左手の薬指にはまった指輪を見せる。

「1年前にな。」

「それに、少し老けたように感じます。」

「そんなお前は変わんねーな。その目つきと、ありえねーぐらい鋭い気配は変わんねーな。変わったといやあ、胸、でかくなっただんじや

ねーか？」

「立派なセクハラ発言ですよ。」

「ハハハ。冗談だよ。大目に見てくれや。」

ハア、と一息ついて石塚がしみじみと話始める。

「それにしても、人を撃つことしか知らなかった子供が、今は立派な学生か。立派になったもんだ。仁科の奴は元気にしてるか？」

「はい。以前と変わらず元気です。」

「そうか。こんな風に話していると昔を思い出すな。にしても、戦闘技術はあんまりさび付いていないようだな？」

「いえ。自分としては落第点です。なんせ、あの程度の戦闘で疲労を感じてしまいました。明日からトレーニングをしなくてはいけません。」

「そうか……。今回の模擬戦の成績的に考えて、お前はこれからの訓練は免除でいいような気もしないでないが、どうする？」

「私一人だけ特別扱いというのは、クラスでの摩擦が生まれますので。免除の件は結構です。」

「そんなこと言ったら、午前中の講習を抜け出したじゃねえか。」

「ですので、これ以上はまずいかと。」

「まあ、そうだな。わかった。厳しく指導してやるから覚悟しろよ？」

「よろしくお願いします。」

模擬戦闘2回戦は結局2時間で終了した。

藍那以外の者は、ほぼペイントで汚れている。

「今日は肉体的にも精神的にも疲労している。全員、明日以降の授業に備えてゆっくり休むように。以上。解散。」

石塚の号令で疲れ切った体を引きずって帰路に就いた。

寮に着くと、直ぐに訓練着の洗濯し、シャワーで汗を流す。

洗い終わった訓練着を干しながら香奈子が藍那に声をかける。

「藍那さん。午前中に銃の携帯が認められているって言ってましたけ

ど、あれって本当なんですか？」

「本当ですよ。まあ、緊急事態に限るという制限付きではあるけれど。」

「じゃあ、今、銃を持っていたりするんですか？」

「ええ、あるわよ。」

先に干し終わっていた藍那が、自分の荷物を入れているクローゼットの中を探す。そして、小さな黒い箱を取り出し、開けて中身を香奈子に見せる。

「これはグロック17。紛れもない実銃よ。」

香奈子は驚きのあまり少しの間固まっていた。少し時間を置いて、状況の整理がついたのか再起動する。

「本手に持ってたんだ……。まさか、他にはありませんよね？」

加奈子は恐る恐るといった様子で尋ねてくる。

「あるわよ。あとはアサルトライフルが1丁とスナイパーライフルが1丁。それと、ナイフが2本ね。」

「いったいどこと戦争するんですか!？」

さも当然といった口調で返してくる藍那へ素早くツツコミを入れてくるあたり、香奈子もだいたい藍那に慣れてきたようだ。

「?戦争はしないわよ?これはあくまでも自衛用よ?」

完全に自衛の範囲を超えている。

加奈子は藍那の言葉に絶句したが、すぐに再起動した。

「……………いやいやいや、自衛の域を完全に超えてますよ!」

「そうかしら…………?」

藍那は心底不思議そうな顔をしている

「そうですよ。それに、ここには警備の軍人さんもいますし、学園は安全じゃないですか?」

藍那は真面目な顔をする。

「香奈子、いい?この世界には絶対に安全なところは存在しないの。」

「それはそうですけど…………。」

「備えあれが憂いなし、だったわよね?まあ、そういうことよ。」

「はあ…………。まあ、そうですね…………。」

藍那の感覚が少しずつれていると認識した香奈子は、ため息をついた。

「それよりも、香奈子はどうやって模擬戦中に殺気を消せたの？」

話が変わり、先ほどの模擬戦闘の話題になった。

「どういうことですか？」

「他人に銃口を向けたとき、多かれ少なかれ殺気を放ってしまうものよ。私はその殺気を頼りにみんなを探してた。なのに、香奈子からは一切殺気を感じなかった……。どうやったの？」

真剣な表情で尋ねてくる藍那に、香奈子は少し困惑する。

「……自分でもわかりません。全く意識してませんでしたから。強いて言えば、遭遇を避けて逃げてばかりだったからかな？」

「そんなことで……。」

藍那は信じられないといった様子だ。

香奈子は自分でも良く分からないことなので、半ば強引に話題を変えらる。

「そうだ！暇な時でいいので、銃の撃ち方とかを教えてください！」

藍那は香奈子の殺気を出さない方法に納得してはいない様子である。

「それはいいけれど……。やっぱり納得いかない……。まあいいわ。石塚たい……。教官も言っていたように、思いのほか疲労しているわ。今日はもうゆっくりして明日に備えたほうがいいわ」

藍那はグロツク17をクローゼットにしまう。

「そうですね。夕食まで休息をとりましょう。」

藍那と香奈子は夕飯前の18時まで仮眠をとることにした。

時刻は20時を迎え、生徒は皆、寮の自室か友人の部屋で過ごしている。そのため、屋外にはほとんど人影がない。

こんな時刻にも関わらず、石塚はとある場所を目指して歩いていた。

2076年になっても喫煙者は一定数存在している。しかし、健康

やマナーなどの様々な理由から、とても肩身の狭い思いをしているというのは今と変わらないだろう。

石塚もそんな喫煙者の1人である。

SF学園には区画ごとに1ヶ所ずつ喫煙所が設けられている。しかしながら、喫煙所と喫煙所の間隔がかなり広い。そのため、講義の合間に一服といったことがしにくいのである。

そんな喫煙所事情であるが、教員寮の近くに1ヶ所あるということが唯一の救いだろう。

石塚もそこへ向かっている最中だった。

いつもであればこの時間に喫煙所を利用しているのは石塚1人である。しかし、今日は珍しく先客がいた。

「よお。岸、久しぶりだな。」

石塚は友人に声をかけるように声をかける。

「ん？石塚か。確かに久しぶりだな。」

「お前も相変わらず喫煙者か。健康に悪いから禁煙しろ。」

「お前も相変わらずの喫煙者だろ。他人に言う前に自分がやめろ。」

「ハハハ、まあ、そうだな。にしても、葉巻とは渋いね。」

「今の煙草は加熱式煙草が主流なのに、お前も昔ながらの紙巻き煙草か？」

「このご時世、喫煙者自体が古いんだ。俺はわざわざ新しいもんに手を出したりはしねーよ。」

「まあ、俺もそうだな。それよりも、仁科藍那がここへ入学してるの、知ってるか？」

岸が面白いものを見つけたような口調で尋ねる。

「知ってるよー。俺の担当の模擬戦闘でひどい目にあったよ。」

「ほお、どんな目に合ったんだ？」

すると、石塚は昼にあつた出来事を思い出しながら話し始める。

「藍那の奴、1人でクラスの全員平らげやがった。これじゃ評価のつけようもねーから、予定外の2回戦をやる羽目になったよ。」

話し終わった石塚は、少しげんなりとしているようだった。

「なかなかの目に合ってるな。俺は講習を途中で退出された。」

「え？あの話してお前のところだったの？」

岸の話に、石塚は驚きをあらわにする。

「普通の学生に混じって、藍那みたいな規格外の奴がいると色々やりにくいもんだな。」

「そうだよな。他のクラスの奴らにいい影響を及ぼすか、悪影響を及ぼすか、そりや様子を見るしかねーからな。」

「たまに自分と比較して、落ち込む生徒がいるからな。なかなか難しいもんだ。」

岸も石塚も教員として、生徒のことを心から心配している。

「それよりよー、明日からまた始まるなあ？あの年に一度のバカ騒ぎが。」

「そうだな……。今年は怪我人が出ないことを祈るしかないな。」

「そういや、お前って射撃部の顧問やってたよな？」

岸は射撃訓練場の教官ということもあり、射撃部の副顧問の仕事も担当している。

「確かにやっているが、それがどうかしたか？」

「いやな、藍那を入部させないのかってな。」

「まあ、部活を選ぶのはあくまで藍那自身だ。俺からは何も言わないつもりだ。」

「そうか。そんじや、そろそろ俺は帰るわ。」

短くなった煙草を灰皿に放り込み、石塚が帰路に着く。

「明日からまた忙しくなるからな。また気が向いたら話そうや。」

手をひらひらと振りながら石塚は帰っていった。

「俺もそろそろ戻るか……。」

呟くと、岸も葉巻の火を消して帰路に就いた。

講習や実力測定は昨日で終わり、今日からは普通授業が始まる。それと同時に部活動への勧誘も始まる。

SF学園は軍管轄の学園ではあるが、普通の高校生と同じように部活動に所属する事ができる。しかし、SF学園特有の普通高校には無い部活動が存在する。例としては、実銃を使用したサバイバルゲームのようなことを行うサバイバルフイールド部、SFを使用したアクロバティックな演技を行うアクロバット飛行部などが存在している。

もちろん、普通高校のような運動部や文化部に属する部活動も存在している。

これは、どの高校にも当てはまることなのかもしれないが、いい新入生を取り合うという光景を目にするだろう。それがSF学園では少々過激になることがある。これが、教員の中で言われている『年に一度のバカ騒ぎ』である。

時刻は早朝5時半。

藍那は横のベッドでぐっすり眠っている香奈子を起こさないように運動着に着替え、部屋を後にした。

藍那は第一グラウンドへ向かい、トレーニングを始める。

メニューとしては、第一グラウンドは1周1kmなので、これを10周。その後、片手腕立て伏せを左右100回ずつの予定である。

何故、藍那が早朝トレーニングをしているのか。それは、昨日の模擬戦闘で疲労を感じてしまったためである。

以前の自分であれば、あの程度では疲労を感じなかっただろう。にも関わらず、疲労を感じてしまったがために藍那自身は、体力が落ちってしまったということに少しショックを受けていたのだ。

そのため、本格的に訓練が科目として始まる前に、全盛期の体力へ戻そうと努力しているのだ。

自主トレーニングを終えて部屋に戻ったのは6時半頃のことだっ

た。」

トレーニングによって汗をかいたため、そのまま登校するというのは憚られる。そのため、1度シャワーを浴びて着替える必要があった。(流石にもう、香奈子も起きていますでしょう。起きているのなら、シャワーの音を気にする必要もないわよね。)

自室の扉を開けて、藍那はため息をこぼす。トレーニングに行く前と同様に香奈子は眠っているのである。

(まだ6時半ですし、起こさないと遅刻してしまうという時間でもないから、そのままでもいいわよね。)

着替えとタオルを取り、シャワールームへ向かった。

素早く汗を流し、タオルで体を拭いて、予め用意していた下着を着用する。

自室にいたのは香奈子だけということもあり、藍那は下着姿のままでシャワールームから出てくる。

普通であれば、何かしら香奈子が反応を示すだろう。しかし、当の香奈子本人は以前爆睡している。

(まだ起きませんか……。まだ時間的にも余裕がありますし、このままでもいいでしょう。)

藍那は再び部屋着に着替え、昨晚し忘れていた準備を始めた。

この時代には教科書と言う分厚い紙の本は存在しない。教室の各座席には埋め込み式タッチパネルディスプレイの搭載PCがあり、教科書は全部その中にデータとして入っている。そのため、登校する際に低限必要なものは授業用のノートと筆記用具だけとなる。

しかし、年頃の女子生徒はそれ以外にも必要なものがあり、男子生徒に比べて少し荷物の量が増える。

例に漏れず、藍那にもそれが当てはまる。しかし、藍那の場合はナイフを1本忍ばせているのだ。これは、あくまでも護身用である。そのため、むやみに取り出したりはしない。このことはルームメイトの香奈子にも知られていない。

人間誰しも、秘密の1つや2つ持っているものである。

時刻は午前7時を迎え、香奈子がセットしている目覚まし時計のア

ラームが鳴り響く。

しかし、香奈子に起きる様子は全くない。ただアラームが鳴り続けている。

「香奈子。起きてください。起床時間よ。」

流石にもう起こさないとまずいと判断し、藍那は香奈子を起こす。

「ううん……。あと1時間……。」

「あと1時間も寝ていたら、間違いなく遅刻よ？いいから起きて。」

揺すってみても香奈子に起きそうにない。

「もう起きないと朝食を食べる時間が無くなるわよ？それでもいいの？」

「……。」

「こうなったら最終手段ね……。」

藍那が香奈子の脇腹をくすぐる。すると、たまらず香奈子が飛び起きた。

「や、やめてください。あ、藍那さん、本当にやめて……。」

香奈子は涙目になりながら笑い声を上げている。

「もう起きる気になりましたか？」

「なりました!!なりましたからくすぐらないで!!!」

藍那はようやくくすぐるのをやめた。

「朝っぱらからひどいですよ!いきなりくすぐるなんて。私は脇腹がとっても弱いんですから。」

「いいことを聞いたわ。明日からも香奈子が起きないときは、脇腹をくすぐって起こすわね。」

香奈子が制服に着替えながら、藍那に対して抗議している。しかし、藍那は右から左といった様子で、香奈子の抗議を適当に流しつつ制服に着替えている。

「それにしても、この女子の制服って、変わったデザインですよね?」

香奈子が制服に対しての疑問を投げかけてきた。

SF学園の女子の制服はスリットの入った膝丈の白色ワンピースに腰骨の辺りまである黒の上着といったものである。制服自体はス

リットが入っているおかげで、あまり動きにくいといった感覚はない。現在はまだ冬服であるため、中のワンピースと上着は長袖である。夏服はワンピースがノースリーブ、上着の袖が肘までとなり、生地も少し薄手のものとなる。

ちなみに、男子の制服は一般的なブレザーとあまり変わらない。

「確かに、言われてみればそうよね。まあ、動きにくいというわけでもないし、別にいいんじゃない?」

「そうですね。それに、他の高校の制服よりも、こっちの方が私は好きですし。」

「そろそろ朝食をとった方が良くない?」

「そうですね。じゃあ、購買に行きましょう。」

購買で朝食とついでに昼食も購入して、部屋に戻った。

数学や英語といった教科を終え、あつという間に昼休みになった。クラスの皆は購買や食堂に行っているため、教室の中はがらんどろになっていく。

「いやー、仁科さんって銃を使うのも凄いいけど、英語も得意なんですね。うらやましいなー。私、英語が苦手で……。」

藍那の後ろの席の八月一日美咲が声をかけてきた。栗色の髪を肩まで届かないポニーテールにして、アホ毛が元気よく前に飛び出している少女である。彼女も藍那達と同じく、朝食をかうついでに昼食も購買で買ってきている。

「私は数年前まで海外で生活していたから、それで英語も少しできるのよ。」

「へー、海外ってどのあたり?」

「中東よ。国まではどこだったかしら……。」

「中東って、今でも内戦とか起こって危なくない?」

「ええ、とても危険よ。」

「じゃあ、何でそんなところへ?」

「まあ、いろいろとね……。話すとき長くなるから、先生も来たしまた

の機会にね。」

藍那は出入口の方を一切見ずに、担当の小鳥遊が来たことを察知し、美咲との会話を終わらせた。

小鳥遊が教室に入ってくるなり、教室を見回す。どうやら、誰かを探しているようだ。

「仁科藍那さんはいますか？いるのなら、ちよつと出てきてくれませんか？」

「あ、藍那さん。いったい何をしちやっただんですか？」

まさか藍那の名前が呼ばれるとは思っていなかったのか、香奈子が手に持っているロングのパンを握りつぶしながらあたふたしている。

「何で西原さんが慌ててんの？」

「私は何をしてないわよ。強いて言うなら、昨日の途中退出の件かしらね。少し行ってくるわ。」

藍那はスタスタと小鳥遊のところへ歩いて行った。

「仁科さん、少し相談があるんだけど、時間大丈夫？」

「はい。構いません。昼食も先ほど終えましたし、問題ないかと思えます。」

「そう、良かった。じゃあ、ちよつとついてきてくれる？」

「わかりました。」

藍那は小鳥遊の指示に従って、後をついて行った。

「——ということが風紀委員としての仕事内容です。役職上、生徒に対して実力行使する必要が出てくる場合があります。なので、通常はある程度訓練を積んだ、2年生になってもらうんですが、生憎今年は希望者の数が少ないため、仕方なく1年生から数人なってもらうことになったんです。そこで、仁科の実力測定の結果が目に残まってお願ひしているんです。やってくれませんか？」

藍那は職員室に連れてこられるなり、いきなり多くの教員の目のあ
る中で風紀委員に勧誘された。何ともNOとは言いにくい雰囲気である。

「分かりました。微力ではありますが、風紀委員の仕事を引き受けさせていただきます。」

仕方なく引き受けることにする。

「良かったー。引き受けてくれないんじゃないかって心配してたんですよ。」

小鳥遊は心底安心したようで、先ほどまでの険しい顔はどこかへ行行ってしまった。

「ところで、委員の仕事にはいつから参加すればいいんですか？」

「今日からお願いしたいんですけど、大丈夫ですか？」

「今日からですか？」

流石にいきなり今日から参加するように言われるとは予想していなかったために、怪訝そうな顔をしてしまう。

「ええ。今日の放課後から1週間、部活動勧誘期間が始まりますよね。毎年、いい生徒を獲得しようと、部活動同士でいざこざが起こるんです。酷いときは傷害事件になりかねない喧嘩が起こったりもして、けが人が出たりするんですよ。それを未然に防いだり、仲裁する仕事を教員だけでは手が回らないので、風紀委員にもやってもらうんです。」

「なるほど、分かりました。」

「それじゃあ、放課後直ぐに風紀委員室に来てくださいね。場所は後で座席のPCへメールを送っておきます。」

「分かりました。それでは、失礼しました。」

小鳥遊と別れ職員室を後にし、教室へ戻ることにした。

教室に戻るとほとんどの人が昼食から帰ってきており、雑談を楽しんでいた。

「藍那さん。大丈夫でしたか？」

藍那が教室へ戻ると、勢い良く香奈子が駆け寄ってきた。

「怒られませんでしたか？お説教されちゃいましたか？」

「香奈子。落ち着いて。怒られもお説教もされてないから。」

「えーじ、じゃあ何だったんですか？」

「風紀委員になってほしいとよ。」

「へー、風紀委員って規範的に上級生から選ばれるんでしょう？それに選ばれるって、やっぱり仁科さんすごいね。」

美咲が感嘆の声を漏らしながら歩いてきた。

「まあ、今年は希望人数が少なかったらしく、私はあくまで数合わせよ。そんなに凄いいことじゃないわ。」

「そんなことないって。2年生の人が選ばれるときだって、成績次第では選ばれないんだから。それを先生直々に勧誘に来るなんて、やっぱりすごいって。」

「そうなの？それよりも、もうすぐ予鈴になるわ。そろそろ席に着いた方がよくない？」

美咲が時計を見る。時計の針はもうすぐ1時15分を指そうとしていた。

「もうこんな時間か！じゃあ、また後で。」

3人が席に着くとほぼ同時に予鈴が鳴った。

6限目を終え、皆、帰り支度を始める。部活動見学へ行く予定があるものは、混雑する前に気になる所へ行くためにいつも以上に急いでいる。

それと同じように理由は違うが、藍那もいつも以上に急いでいた。

そんな時に声がかけられた。

「仁科さん、ちよつといいかしら？」

「何？」

藍那は素っ気ない返事を返して、声の方を向く。

すると、何故か少しおびえている静がいた。

小林静は藍那に声を掛けたはいいが、睨まれたため内心とても焦っていた。

（不味いよ。絶対に不味いよ……。怒ってるよ……。だって、あんなにらんでるんだもん。怒ってないと、あんな殺意のこもった目で睨まないよ……。）

藍那は声をかけてきたのにもかかわらず、ずっと固まっている静を不審に思う。

「何か要件があるなら、早く済ませてもらえないかしら。」

ただ、淡々とした口調で言ってくる藍那に静はまたしても怯える。

(ヤバイ!!殺気以上に怒ってるー!!)

静は心の中で叫ぶ。

「何も無いようなら、もう行きますね。」

荷物の整理を終えた藍那はそそくさと教室を出ていく。

「あ……。」

静は呼び止めようとするが、藍那は行ってしまった。

「委員長、どうしたんですか？藍那さんに何か用事があったんですか？」

肩を落としている静に香奈子が声をかける。

「私、藍那さんと同室だから、私が代わりに聞きますよ？」

「そんな大したことじゃないんだけど……。それよりも、私、何で彼女を怒らせちゃったんだろう……。西原さんならわかる？」

香奈子は少し考え込む。

「うーん。たぶんですけど、藍那は怒っていないと思いますよ。藍那は目つきがあれなので、怖いようなイメージを受けますけど、凄く優しい人なんですよ？さつき、急いだのは、風紀委員室に用事があるからですし。」

「そうなの？私の勘違いだったのかな……。」

「ところで、藍那への用事って何だったんですか？」

「ああ……。昨日の講習を途中退出した理由を聞こうと思つてね……。

それよりも、何で仁科さんが風紀委員室に用事があるの？」

「どうやら、藍那が風紀委員に選ばれたようなんですよ！」

「ええええ!!普通、入学早々に風紀委員には選ばれないでしょ!？」

「でも、あんな戦闘スキル見せられたら、なんか納得しちゃうよねー。」

香奈子と静の会話に七海が入ってきた。

「昨日の模擬戦闘で近接戦を見たわけじゃないけど、あんな射撃スキル持つてる人が近接は無理なんてないと思うよ。仁科さんっていったい何者何だろう？」

香奈子は藍那の過去のことを本人からの聞いているため知っている。しかし、本人の許可もなく他の人に話していいことではないと思いい、「さあ……。」と、お茶を濁すことにした。

藍那は風紀委員室に到着した。

風紀委員室は生徒会室と隣接しており、同じ階には職員室も存在している。広さはだいたい40畳ほどであり、一般的な学校の教室と同じような広さである。部屋の中には長机が口の字に並べられており、各机に3つずつパイプ椅子が並べられている。入り口から見える位置に置かれている棚には、活動日誌などのファイルがきれいに整頓されて置かれている。

3回ノックをし、入室する。中には風紀委員の先輩と思しき生徒が3人の女子生徒がいた。

「失礼します。」

「・・・？何か用事かな？」

先輩方に若干不審そうな目を向けられる。

「はい。私は風紀委員担当の小鳥遊教諭より、風紀委員になるように言われ、本日の放課後にここへ来るように指示を受けて来ました。」

「君、新入生だよな？風紀委員って結構危険な時もあるけど大丈夫？ある程度の実戦訓練を積んでないと、たぶん務まらないよ？」

「はい。危険ということもある程度は職務内容の説明を受けましたので、承知しております。実戦訓練に関しては問題ないと思います。」

「へー、言うじゃない。まあ、いいわ。メンバーが集まるまで適当なせきにすわってまってる。あと、私が風紀委員委員長の弓弦恵利佳だ。よろしく。それで、こっちが斎藤で、こっちが相模原。」

「斎藤奏恵よ。一応副委員長ね。よろしく。」

「相模原桃子です。書記と会計をやっています。よろしく。」

委員長の弓弦を中心に、藍那から見て右側にいるのは副委員長の斎藤で、左側が書記兼会計の相模原である。

「仁科藍那です。よろしくお願いします。」

短く挨拶と自己紹介を済ませ、藍那は席について待機することにした。

藍那が風紀委員室に着いて10分が経とうとする頃には、かなりの人数が集まってきた。次々に入室してくるのは全員上級生であり、藍那は少しだけ居心地の悪さを感じていた。

「みんな揃ってますか？」

かなりの人数がいる風紀委員室に小鳥遊が入ってきた。

「一応、皆さん知っていると思いますけど、今年の風紀委員には1年生を採用しています。彼女が仁科さんです。」

小鳥遊の紹介を受け、藍那も立上り一礼する。

「仁科藍那です。よろしくお願いします。」

「仁科さん、わからない事があったら先輩たちに聞くように。皆さんも仕事内容などを教えてあげてくださいね。」

「はい。」

紹介と簡単な挨拶を終え、今日から1週間の『年に一度のバカ騒ぎ』に関する説明と風紀委員の仕事内容の説明がされた。

説明を終え、風紀委員の仕事が始まった。

今日の仕事内容としては3つ。暴力沙汰が起きないように注意喚起。暴力沙汰になりそうになったら未然に防ぐ。そして、仮に起きてしまった場合は実力行使でもいいから止める。である。

藍那は初めての仕事である為、補助として委員長である弓弦がつくことが小鳥遊の提案で決定した。

説明が終わり、次々と風紀委員室から出ていく。そんな中、藍那は弓弦のもとへ向かった。

「弓弦先輩。今日はよろしくお願いします。」

「ああ、仁科か。まず空手部と柔道部が練習を行っている第1武道館に向かう。一応ここは毎年恒例の危険地帯だから、気を引き締めてね。」

「了解しました。」

「それと、これを胸ポケットに入れておいてくれ。」

弓弦からスマートフォンのようなものを渡された。

「これは小型のカメラで、暴力沙汰が起こった時の貴重な証拠になるから、ちゃんと電源を入れておいてくれ。それと、今日は必要ないが、通信機としての役割も持つから、大切にしてくれよ。」

「はい。」

「では、行こうか。」

藍那は弓弦の後ろをついて移動を始めた。

藍那たちが第1武道館に到着した時には空手部と柔道部が一触即発の状況になっており、多くの見学に来ている新入生や野次馬に囲まれた。

「またか……。一応仁科もついてきてくれ。」

「分かりました。」

弓弦がため息をつきながら、生徒たちの壁をかき分けていく。

藍那たちが人垣の最前列に到着した時には、既に道着を着た生徒たちが殴り合いを始めていた。

野次馬たちは面白半分で騒ぎ立てている。

「これはまずいな……。」

「弓弦先輩、私がけんかを止めますので、先輩は野次馬をお願いしませぬ。」

「待て！危険すぎる！」

弓弦が藍那を制止しようとして声を掛けるが、藍那は制止を聞かずに飛び出した。

「風紀委員です。暴力行為を即座にやめ、各部の勧誘活動へ戻ってください。繰り返します。暴力行為を即座にやめ、各部の勧誘活動へ戻ってください。さもないと——」

つかみあっていた2人の男子生徒が藍那の方を向く。

「さもないと、どうなるんだ!? ああ!!」

頭に血が上っている彼らには、藍那の言葉は挑発のように聞こえたのだろう。

「実力行使に移らせていただきます。」

藍那の一言に男子生徒の怒りが頂点に達した。

「やってみろや!!」

男子生徒の1人が藍那に殴り掛かる。しかし、藍那は最小の動きのみでかわし、逆に投げ飛ばした。

まさか自分が投げられるとは思っていなかった男子生徒は、受け身をとれず背中から落下した。背中から落下した生徒はたまらずもんどりうつ。

「風紀委員に対する暴力行為として、一時的に拘束させていただきます。」

藍那は拘束する作業を手早くこなす。

「おい！何でも俺たちの主将だけしよつ引かれるんだよ!? さつきやりあつてたのは柔道部も同じだろう!!」

空手部の部員たちが次々に抗議する。

「風紀委員に対する暴力行為と申しました。」

どうやら藍那が拘束している男子生徒は空手部の主将のようだ。

「納得いくかよ!! 主将を離しやがれ!!」

空手部の部員が藍那に殴り掛かる。

「これは明確な暴力行為であり、今すぐにこの行為をやめることをお勧めします。この要求が受け入れられない場合は、先ほど同様に実力行使で解決ということになります。よろしいでしょうか？」

空手部の部員13名の攻撃をかわしたり受け流したりしながら、藍那は警告する。

しかし、藍那の警告が受け入れられる様子はない。

「繰り返します。今すぐにこの行為をやめることをお勧めします。受け入れられない場合は実力行使で解決ということになります。よろしいですね。」

藍那が突き出された右の拳をかわし、手首を掴む。そのまま捻り上げて後ろで拘束し、次に殴り掛かってきた生徒に拘束していた生徒を突き飛ばすようにして、正面衝突させる。それによって2人を制圧し、次の標的に狙いを定め倒していく。結果、藍那1人によって空手部の部員全員が倒されるという事態となった。

野次馬の対応を終えようやく終え、弓弦が戻ってきた。弓弦は目の前に広がっている目を疑うような光景を前に少し呆然としていた。

「これは……。仁科、どういう状況なのか説明をしてもらえるか？」

弓弦は倒れ伏した空手部の部員達を次々に結束バンドで拘束している藍那に尋ねる。

「はい。空手部の主将である男子生徒が私の警告を無視し、暴力行為に及びました。それを理由として彼を拘束したところ、他の空手部員が主将の開放を求め動力行為に及びました。一応警告をいたしました。聞き入れてもらえなかったので、やむなく実力行使によって全員を拘束しました。以上です。」

藍那が淡々と話すのを聞いていた弓弦は半ば混乱する。無理もない、つい先日入学したばかりの女子生徒が、毎日のように自分の武を磨いてきた上級生を全員倒したというのだ。

「仁科、全員倒したのはいいが、けがはしていないか？」

「はい。問題ありません。」

「それは、無傷で全員倒した。ということか？」

「はい。」

弓弦はさらに混乱する。

自分でも1人で全員倒すことはできるだろう。自分で言うのもなんだが、弓弦はこの学園ないでも有数の実力者だ。弓弦相手に格闘戦鬪で勝てる者は生徒の中ではまずいないだろう。

しかし、そんな弓弦でもこの人数を相手にするとなったら無傷とはいかない。

弓弦は藍那の言っていることを信用しきれず、近くにいた新入生と思しき女子生徒に尋ねる。

「その君。本当に彼女は一度も攻撃を受けずに全員倒したのか？」

「え……え！私ですか？は、はい！確かに見ている限り全部躲していたと思います。とてもすごかったですよ！あの身のこなしは——」
「わかった。ありがとう。」

次第にエキサイトし始める女子生徒に礼を言っただけで会話を一方的に終える。

「まだ信じられないが、君が言っていることは本当のようだ。」

「はい。それよりも、先輩。この方たちの処遇はどうなさるのですか？このままというわけにはいきませんし……。」

「ああ……。すまない。とりあえずは生徒指導室に連れていく。仁科も手伝ってくれ。」

「了解しました。」

藍那は弓弦の指示に従って事後処理を進め、拘束した生徒たちを生徒指導室に連れて行った。

生徒指導担当の教師に引き渡し作業を終え、2人は風紀委員の業務に戻ることもなった。しかし、今回の逮捕者は数が多く引渡し作業が長引き、帰宅時刻が近づいたため今日の業務はここまでとなり、解散となった。

時刻もだいぶ遅くなり、外もかなり暗くなっている。

「先輩。今日はお世話になりました。お先に失礼します。」

まだ事務作業をしている弓弦に藍那が挨拶をして帰ろうとしていた。

「少し待ってくれ。仁科、君は何者なんだ？あの人数を1人で相手するのは私でもできる。だが、無傷となると話は別だ。君はどこでその技術を身につけた？」

帰ろうとする藍那を引き留め、ずっと気になっていたことを尋ねる。

「昔にいろいろありまして・・・。」

藍那は話すと長くなるため、ごまかそうとする。

「・・・。まあ、いい。あまり言いたくないこともあるだろう。」

「はい・・・。申し訳ありません。」

藍那は弓弦が勝手に自己解決してくれたことを幸いに、適当に話を合わせる。

「とはいえ、君の実力を確認しておきたい。今から少し付き合ってもらうが、かまわない？」

「今からですか？もう下校時刻間際ですが？」

「ああ。許可は取ってある。問題はない。」

「しかし——」

「問題ないな？それと重要な用事でもあるのか？」

完全にNOと言える雰囲気ではない。

「分かりました・・・。」

渋々了承し、弓弦は「よしー」といった様子で頷いた。

「では、先ほども行ったが、第1武道館で行う。ついてきてくれ。」
「分かりました。」

藍那は弓弦に逆らうだけ無駄だと思い、素直に従うことにした。

第1武道館には下校間近だというのに明かりがついていた。

藍那と弓弦が到着すると、副委員長の斎藤奏恵と初期兼会計の相模原桃子が待っていた。

「委員長、遅いです。先生方には無理を言って開けてもらっているんですよ！それに、委員長のわがままに付き合っている私たちの身にもなってください！」

「そうですよ。委員長は少しわがままが過ぎます。私たちはなれていきますけど、今回は私たちだけでなく仁科さんまで巻き込んで・・・。仁

科さんごめんなさいね。」

「いえ。私のことはお気になさらず。」

相模原の気遣いの言葉を受け、藍那は頭を下げる。

「まあ、仁科もこう言っているし、いいじゃないか！」

「委員長はもつと自重してください!!!」

弓弦が笑い飛ばそうとしたが、斎藤と相模原の2人に怒られてしまった。そのせいで弓弦は先ほどより少し小さくなったように感じた。

「まあ、仁科には無理言っつけて付き合ってもらっているんだ。始めて大丈夫か？」

ようやく元の調子に戻った弓弦が藍那たちに声をかける。

「はい。それは、いいのですが。この御二方はなぜこちらへ？」

「私たちはあくまで見届け人です。」

「けが人が出たときの対処のために最低2人は見届け人として付ける決まりになっているのよ。」

藍那の質問に対して丁寧の説明してもらえた。

「なるほど、分かりました。それではよろしくお願いいたします。」

藍那は見届け人2人から弓弦に顔を向ける。

「委員長。それで、私たちはどのようなことをするのでしようか？」

「ああ。軽く組手をしよう。小手調べなどと思わず全力で来い。」

「分かりました。」

藍那は「全力で来い」と言われた限りは本気で向かうことを決め、弓弦に対して先ほどとは違う真剣な表情をとった。

「いい表情だ。」

藍那の顔を見て弓弦の表情も真剣沢帯びる。

向かい合う2人を交互に見ながら、斎藤が1歩前が出る。

「2人ともわかっていると思うが、相手に重傷以上のけがを負わさないこと。もちろん、死に至るような攻撃はもつてのほかです。それと、今回は武器の使用は禁止です。2人とも武器似るようなものは携帯していませんか？」

2人とも頷く。

「それでは、始め!!」

斎藤の右手が振り下ろされる。

それと同時に弓弦は強く握った拳を突き出す。何の迷いもない、ただ藍那を倒すという1つを目的とした正拳突きである。

正拳突きは寸分の狂いもなく藍那に命中し、一撃のもとに勝敗がつくと弓弦を含め見届け人の2人も予想した。

しかし、弓弦の拳が何かをとらえるという感覚は無かった。その代わりに体が宙を舞う少しの浮遊感の後に背中に痛みを感じ、いつの間にか弓弦は武道館の天井を見ていた。

何が起こったのか理解できない。なぜ自分が仰向けになっているのか。正拳突きを放ったはずの自分がなぜ、武道館の畳の上で寝ているのか。一切理解できずに呆然としていた。

「委員長、もうよろしいですか?」

弓弦は藍那の問いかけに我に返った。

(そうか……。私は彼女に投げられたのか……。しかし、どうやって……。?)

弓弦は自分が藍那に何をされたのかよくわからないため、考え込んでしまう。

「委員長?大丈夫ですか?」

自分の問いかけに返答がないため藍那が再び呼びかける。

「ああ……。すまない。大丈夫だ。」

藍那の手を借り弓弦が起き上がる。

「委員長、まだ続けますか?」

「いや、もう結構だ。」

ほんの一瞬で2人の組手は終わり、両者ともに怪我も無いためそのまま解散となった。

藍那が予想外のハプニングに見舞われているということなど知らない香奈子は、自室で藍那のことを心配していた。

(遅い……。あまりにも遅すぎます。いくら風紀委員の仕事があるか

らって遅すぎます。まさか、何か大怪我でもして医務室にでも行つて
るんじゃない!!)

落ち着きなく色々な事態を考えていると、何事もなかったように藍
那が帰ってきた。

「藍那さーん。心配しましたよーん!!!」

香奈子は勢い良く藍那に抱き着こうとするが、見事な回避で藍那に
よけられ壁に激突した。

「痛たた…。藍那さん!心配しましたよ!帰ってくるのが遅いから、
仕事中に怪我でもしたんじゃないかって。何があつたんですか!？」

壁に打ち付けた場所を手で押さえながら、何があつたのかを聞く。
「ただいま。別に大したことはありませんでしたよ。ただ、風紀委員
の委員長が私の実力を知りたいって、第1武道館で少しだけ組手をし
ました。」

「まさか!!それって噂に聞く、新人いびりの類ですか?」

「多分違うわ。本当に私の実力を知りたかっただけだと思う。いきな
り1年生が入ってきて怪我でもされたら、それこそ風紀委員にとつて
は問題だと思うから。」

「確かにそうですね。後輩が仕事中に怪我をしたってなったら大変で
すからね。まあ、藍那さんは怪我をするよりもさせる方って感じす
けど。」

「香奈子。『口は禍の元』っていうことわざを知ってる?」

「え?藍那さん、どうしたんですか?顔が怖いですよ?まさか怒って
ます?ちよ、待って!うわーん!」

藍那は香奈子に対して般若のような形相で制裁を加えた。

弓弦は寮の自室に帰り着くなり、ルームメイトの齋藤奏恵さいとうかなえに先ほど
組手について詳しく聞いていた。

「本当に何があつたかわからないんだ。私はどんなふうふうに投げられた
?」

「それは見事に。恵利佳の正拳突きせいけんつきの力をうまく利用して、きれいに

投げていました。それはもう、教科書に乗せられるほどきれいでしたよ。」

「そんなにか……。ところで、仁科が使った投げ技は何という格闘技のものだ？」

「1回見たぐらいじゃわかりませんよ。でも、強いて言うなら軍隊の近接格闘訓練で見た技に似ていました。」

奏恵の推測は正しい。

藍那が得意としている格闘術はCQC(Close Quarters Combat)である。

CQCは軍隊や警察において近距離での戦闘を指す言葉である。主としては、個々の兵士が敵と接触、もしくは接触寸前の極めて近い距離に接近した状況を想定した格闘術である。

藍那は子供兵時代に、周りの大人たちが訓練しているのを見て学び、かなりの実力を持っている仁科正純に基礎からみっちり叩き込まれたものであった。そのおかげで、藍那の実力は正規の国防軍の軍人よりも上出あるほどであった。

そんなことを知る由もない恵利佳と奏恵は、藍那のことについての話をつづけた。

「なるほど。軍隊の近接格闘術か。何が起こったのか分からないうちに倒されていたっていうのは、私がまだ小さかった頃に爺さんにやられて以来だったよ。」

弓弦恵利佳の実家は空手道場である。そのため、恵利佳は幼い頃から師範の祖父に空手を教えられてきた。恵利佳には元より天賦の才能があり、全国大会、中学生の部で3年連続優勝するほどの実力者だ。「そうなの？なら、彼女は風紀委員として問題なくやっていますね？」

「ああ、もちろんだ。頼りになる新入生が入ってきてくれて頼もしい限りだよ。」

「そうですね。なら、明日からはもう彼女に補助をつける必要はありませんね？」

「必要ないだろうな。」

こうして、藍那は実力を認められ、風紀委員の職務を明日以降は上級生と同じように1人で行うこととなった。

翌朝、藍那は昨日と同じように早朝の自主トレーニングをし、登校した。

藍那がクラスに入ると昨日と違い、どこかよそよそしい雰囲気であったが、

「おっはよ〜〜！藍那っち。」

1人だけ手を振りながら藍那のもとへやって来る生徒がいた。

彼女の名前は星川恵利ほしかわえりと言う。彼女は鮮やかなオレンジ色の髪をショートカットにし、少し長めの前髪を少し大きめのヘアピンで留めている。このヘアピンは毎日違っており、かなりの数を所持しているようだ。性格はとても活発で、誰にでもフレンドリーに接しているためクラスの中ではムードメーカー的な存在になっている。容姿は非常に整っており、美少女といってもよいだろう。

恵利は藍那の席の左後ろの席であり、日頃からよく話をしている。

「おはよう。星川さん。」

藍那も恵利に挨拶を返す。

「も〜、いつも言ってるじゃない。恵利でいいよ。それに、私って名字で呼ばれるのはあんまり好きじゃないんだ〜。」

「そうだったの・・・。それよりも、クラスの様子が昨日と違うようだけれど、何があったの？」

藍那は先ほどから気になっていたことを恵利に尋ねる。

「そりゃ〜。昨日の藍那っちの活躍を見たからだよ。それにしても凄かったなく。現役空手部14人抜き、『大物ルーキー』現るって感じだよ。みんなそれを知ったらこんな感じになっちゃった〜。」

えへへ、と笑いながら頬を掻いている。どうやら皆に知らせたのは彼女のようだ。

「まあ、いいわ。それよりも、『大物ルーキー』ってどうい事なの？」

「私は昨日のあの現場にいたのよ。まあ、半ば野次馬だったんだけどね・・・。藍那っちを見てた人たちの中で「あの新生は誰だー！」っ

て話題になつてたのよ。」

「それで『大物ルーキー』って訳ね……。だいたい理解したわ。」

藍那は頭痛を覚え、額に手を当てる。

そんな時、少々遅れて香奈子が教室に入ってきた。

「恵利さん、おはようございます。えっと……、藍那、どうしたんですか？」

頭を抱えている藍那に香奈子が不思議そうに尋ねる。

「これは昨日のことを話してんだよ。」

藍那の代わりに恵利が応える。

「昨日のこと？って何ですか？」

しかし、香奈子の記憶には『昨日のこと』ということに該当する事柄はなく、なお一層不思議そうな顔になる。

「まさか、香奈子っち。昨日のこと藍那っちから聞いてない？」

「はい……。それで、昨日のことって何ですか？ものすごく気になります。」

「昨日のことってのは、空手部と柔道部が乱闘騒ぎになったのを、藍那っちが一人で空手部14人を倒しちゃったっていう話。」

ここで恵利は香奈子が多少なりとも驚くと思っていた。しかし、

「何だ、そんなことですか。何かしらの事件を起こしたのかと不安になりましたけど、そうじゃないなら安心ですね。」

恵利は香奈子が一切驚かない事に目を丸くする。

「香奈子っち、なんで驚かないの？1対14だよ？普通ならこんなことできないでしょ？」

恵利は物凄い勢いで香奈子を問い詰める。

「いやいや、藍那さんと生活しているとそれぐらいじゃあ驚かなくなりますよ。それより、藍那さんに倒されたっていう空手部の皆さんは怪我とかしていないんですか？」

「相変わらず香奈子は失礼ね。私はそこまで未熟じゃないわ。まあ、多少の打ち身や擦り傷ぐらいはできているかも知れないけれど、捻挫や骨折みたいな大怪我はさせていないわ。」

「そうなんですか？それは良かったです。流石は藍那さんですね！」

恵利は2人の会話に苦笑いするしかなかった。

「それよりも、藍那さんって今日の放課後の予定ってどうなってますか？」

「？まだわからないけれど……。どうしたの？」

「藍那さんって風紀委員だから、お仕事のついでに一緒に見て回ろっかな？って思ったんですけど……。どうですか？」

「おそらく、それなら問題ないわ。」

「はい。それなら私も一緒に行きたいわ。」

恵利が手を挙げて、自分も同行したい旨を主張する。

「私は大丈夫ですけど。藍那さんはどうですか？」

「私も問題ないわ。詳しい話は昼休みにでも話しましょう。もうすぐ予冷が鳴るわ。」

3人は各々席に着き、HRが始まるのを待った。

一日の授業が終わり、放課後となった。

3人が帰り支度をしていると、藍那の携帯端末に着信が来た。

宛名を見ると『風紀委員長』となっている。風紀委員長とは弓弦恵利佳であり、実質藍那の上司に当たる。そのため、直ぐに着信に出る。

「もしもし、仁科です。」

「もう、授業は終わったか？」

「はい。少し前に終わりました。ところで、要件は何でしょうか？電話をしてくるといふことは、何か事件でも起きたのでしょうか？」

藍那は面倒ごとに巻き込まれるのは嫌だが、仕事である以上聞く必要がある。

「いやいや、事件は起きてはいない。電話をしたのは、今日から君には1人で仕事に当たってもらおうと思っただけ。」

仁科から予想外の発言を受けた。

「はあ……。大丈夫なのですか？私はまだ新入生ですし……。」「何を言っているんだ。昨日、君は私を倒したじゃないか？それなら、

君は我々風紀委員の主戦力の1人だ。ということは、もう一人前ってことだな。」

「どうやら、藍那は勝手に風紀委員の主戦力にされているらしい。」

「・・・分かりました。風紀委員の仕事に必要なものは持っていますので、このまま向かいたいと思います。よろしいですか?」

「ああ。構わない。じゃあ、頑張ってくれ。」

通話が終わり、藍那が香奈子と恵利を見る。

「どなたからの電話だったんですか?」

香奈子が尋ねてくる。

「風紀委員長からよ。どうやら、私は今日から1人で職務に当たるようになったわ。昼休みに話していたけれど、待ち合わせをする必要がなくなっちゃわね。」

「藍那っちく。ってことはこれから3人で動けるっていうわけ?」

「ええ。仕事に必要なものは全部持っているし、風紀委員室へ行く必要もないから動けるわ。」

藍那は手早く帰り支度をしながら応える。

「それで、2人はどこを見て回りたいの?私はどこでもいいから、2人に任せるわ。」

藍那が香奈子と恵利に尋ねる。

すると、恵利はうくん、と腕を組んで悩む。そして、

「それじゃく、今日は文化部の方を見に行かない?文化部ならいざこざに巻き込まれる確率も低いでしょ。」

恵利の意見に賛成の意を示すように香奈子が頷く。

「確かに、運動部と違って文化部なら、勧誘活動が力業って感じじゃないですよ。特に、茶道部なんて物静かでおとなしいってイメージですし。」

「香奈子のイメージはさておき、私も異論はないわ。それじゃあ、行きましょ?」

授業が終わり、各々放課後の時間を活用すべく移動しているため人数がまばらになったクラスから3人は恵利を先頭に目的地へ向かって移動を始めた。

場所を移し、藍那たち3人は文化部の部室が入っている第二部活棟へ来ていた。

第二部活棟の前にはあまり大きくはないものの庭園が設けられており、昼食時になると生徒でにぎわう。

第二部活棟は3階建て、各階に5部屋ずつ部室が入っている。部室の広さは風紀委員室とあまり変わらないものの、部活で使用する備品などを入れた箱や棚などが置かれているため少し狭く感じる。全部屋とも風通しのよい設計になっており、なおかつ冷暖房の設備がある為快適な部室になっている。

第二部活棟の前に設置されている掲示板に『新入部員大歓迎!!』と書かれたポスターと部室の案内図が貼られている。

「私、この『ロボット研究部』が気になります。ここに行きませんか？」案内図を見ていた香奈子が目を輝かせながら藍那と恵利に詰め寄る。

「私は構わないわ。恵利はどう？」

「私も大丈夫だよ。若干気になってたし。」

「それじゃあ、行きましよう!!」

2人の賛同が得られ、嬉しかったのか香奈子はいつも以上にテンションが高くなる。

「えーっと、場所は2階の3番目の部屋ですね。」

香奈子は再び部室の位置を確認し、『ロボット研究部』の部室へ向かった。

「我々、ロボット研究部は——。」

ロボット研究部の部長と思しき女子生徒が部活の活動内容などを説明する。

主な活動内容としては、自作のドローンやローバーの制作とSFのメンテナンス作業などである。授業項目としてSFのメンテナンス自習は存在するが、授業以外でSFの専門的な作業に参加できるというところがこの部の強みらしい。

説明が終わると他の部員も交じって、懸命に藍那たち3人を勧誘する。目つきの悪い藍那にもグイグイ来るあたり、どうやらいい新入部員を獲得するために必死なのは運動部だけではないようだ。

一通りの勧誘活動が終わわり、実際に昨年度作成したドローンやローバーを使った実演が行われることとなった。しかし、部室は広いとは言えず、部室内でドローンを飛ばしてしまうと備品やドローン自体が壊れてしまう恐れがある。そのため、一度外へ運び出し、第二部活棟の前にある小さな庭園で行うこととなった。

実演が始まり、部長がコントローラーを使ってドローンを操作する。

目の前を部長の操作によって飛ぶドローンを見てみると、藍那は微かに気分が高揚していることに気づいた。

藍那が日本に来て数年、同年代の生徒とほぼ同じ学力を身に着けるために毎日勉強に励んでいた。

子供兵時代には勿論、誰も勉強など教えてくれる者などいなかった。知っていることは戦うことだけであつた藍那は、人一倍の努力をしてSF学園へ入学した。

そのため、藍那は実際にドローンなどを見たことが無かつた。日々の生活で娯楽が一切なかつたわけではないが、こういつた物に触れる機会がなかつたため藍那は微かにわくわくしていた。そのため、藍那は笑みを浮かべていた。

しかし、藍那の笑みはニコツつという感じではなくニヤツつという感じであり、香奈子と恵利以外の生徒は少ししたじろぐ。

藍那がロボット研究部の実演を楽しんでいると、胸ポケットに入っていた携帯端末がいきなりなりだした。

楽しみを邪魔された形となり、多少不快に思った藍那はチツつと舌打ちをして不快感を出さないように細心の注意を払って電話に出る。「もしもし、仁科です。」

「書記の相模原です。第2武道館で応援要請がありました。現在地から一番近い風紀委員があなたなので、急行してください。」

藍那は面白いテレビ番組を途中で消された時のような感覚を覚え、

舌打ちしそうになる。しかし、仕事であるため仕方がないと諦める。「了解しました。微力ながら急行します。」

通話を終え、頭を仕事モードに切り替える。

「申し訳ありません。風紀委員の応援要請が入ってしまったため、ここで失礼します。」

ロボット研究部の面々に謝罪する。

「藍那さん、応援ってどこへ向かうんですか？」

「第2武道館よ。」

「第2武道館だったら、その角を左に曲がってまっすぐ行ったらさぐだよ。」

ロボット研究部の部長が親切にも第2武道館の場所を教えてくださいました。

藍那は「ありがとうございます。」と感謝を述べ、お辞儀する。

「私もついていくよう。香奈子たちはどうする？」

「もちろん私もついていきます。藍那さん、かまいませんよね？」

「ええ。大丈夫よ。でも、急行する必要があるから、私は先に行くわね。」

3人はロボット研究部の面々へ一礼し、第2武道館へ向かって走り出した。

藍那は現役時代に比べると、少しだけ体力が落ちてしまっている。しかし、一般の高校生と比べると圧倒的に藍那が上である。

そのため、3人ともほぼ同時に第2武道館へ向かって走り始めたにもかかわらず、藍那と香奈子と恵利の2人の間にはかなりの距離が開いていた。

「やっぱり、藍那っちってすごいね。ほんと、何者って感じだよ。」

恵利が走りながら香奈子へ話しかける。

「普段の生活じゃ、あんまり意識することはないんですけど…。やっぱり藍那さんと私たちって少し違うんですね…。」

どんどん離れていく藍那の背中を追いかけながら、香奈子は呟くように応えた。

風紀委員2年の鮫島尊は危機的状况に陥っていた。

さめじまたける

応援要請が入り悟は第2武道館へ急行した。

尊が武道館に入ると目を疑うような光景が広がっていた。

そこには数名の風紀委員と剣道部員が倒れ伏していた。倒れている生徒は皆、苦痛によると思われるうめき声をあげている。そして、そんな生徒の中唯一立ってっている3年生の風紀委員の女子生徒に対し一方的に竹刀をふるっている深い藍色の長髪と紅い瞳をした少女がいた。

長髪の少女に対し3年生の風紀委員の女子生徒は防戦一方であり、じり貧であることはすぐに分かった。

状況から見えてここに倒れている生徒たちを倒したのはこの長髪の少女だろう。もしそうであるならば、自分一人では対処しきれないと尊は判目の前で判断する。

「鮫島です。第2武道館へ到着しましたが、自分一人では対処しきれないと判断しました。至急応援を送っていただけないでしょうか？」
尊は早急に応援を要請した。

「こちら風紀委員本部の相模原です。了解しました。なるべく近くの風紀委員へ応援要請を送ります。少しの間持ちこたえてください。」
通話が終わり、自身も参戦しようとした時、目の前で先ほどまで交戦していた風紀委員の女子生徒が肩口に竹刀を受け、「ガハツ・・・」という苦悶の声とともに崩れ落ちた。

尊は一瞬頭が真白になる。先ほど倒された女子生徒は去年も風紀委員を務めており、尊よりも遥かに実力が上であった。

そんな彼女が敗れた相手に実力の劣る尊が勝てるわけがない。

そのため、尊は応援が来るまで防戦のみに集中し、応援が来るまで耐えることを瞬時に決め、近くに転がっていた竹刀を構える。

「風紀委員である。直ちに抵抗をやめろ!!」

尊は一応の注意勧告をする。

「次から次へと忌々しい・・・。」

長髪の少女が尊を睨みつける。その眼には殺気などと生易しいも

のではなく、殺意がこもっていた。

尊は睨まれ、一瞬怯む。しかし、引くことが出来ない状態になってしまっている。

尊は覚悟を決め、竹刀を構えなおした。

藍那が武道館に飛び込むと、数名の風紀委員と剣道部員が倒れ伏していた。倒れている生徒は皆、苦痛によると思われるうめき声をあげている。そして、そんな生徒の中に唯一立ってっている風紀委員の男子生徒に対し一方的に竹刀をふるっている深い藍色の長髪をした少女がいた。

少女は何度も男子生徒へ一切の容赦もなく竹刀を振り下ろしている。男子生徒は手に持っている竹刀で懸命に受け止めていた。

少女の紅い瞳には殺意がこもっており、危険な状態であることが藍那には一目で分かった。

男子生徒が少女の一撃を受け止めきれず、竹刀を弾き飛ばされ宙を舞う。

しかし、長髪の少女は攻撃をやめようとせず、竹刀を上段に構える。

一刻の猶予もない。藍那は落ちていた竹刀を掴み、男子生徒の前に飛び出す。

長髪の少女は何の迷いもなく、藍那へ竹刀を振り下す。藍那はその一撃を逆手に持った竹刀を滑らせるようにして受け流す。

しかし、長髪の少女は追撃をかけようとしてくるが、それを許す藍那ではない。

切り上げようとする長髪の少女へ藍那が蹴りを入れるが、素早く反応した長髪の少女は後退して蹴りを躲し距離をとる。

「応援要請を受けて来ました。先輩は怪我人を避難させて下さい。」

藍那は長髪の少女から目を離さず風紀委員の男子生徒へ指示を出す。男子生徒は「わかった。」と短く答え、怪我人の介抱へ向かう。

「次から次へと・・・、イライラする。」

長髪の少女は藍那を睨みつけ、敵意をあらわにする。その瞳には先ほど以上に殺意がこもっている。

藍那は竹刀を真っ直ぐに持ち直す。

「どうしたの？さっきみたいに打ち込んでこないの？それとも、反撃されて怖くなった？」

長髪の少女へ向かって藍那が挑発する。

「調子にいいいい!!乗るなああつ!!」

藍那の挑発で頭に血が上った長髪の少女が突っ込む。

藍那の竹刀の握り方や構えを見る限り、完全に素人である。それに
対し、相手は竹刀1本で何人も倒している。

長髪の少女は勝利を確信し、一切の躊躇なく竹刀を振りかぶる。しかし、彼女のほんの少し残った冷静さは必死に警戒するが、無視される。

藍那は左手を剣先に近い物打に当て、あえて真っ直ぐ長髪の少女の一撃を正面から受け止める。

藍那の挑発によって長髪の少女は冷静さを失っているため、力押しをしてくる。

2人の力は拮抗しており、硬直状態になる。しかし、藍那がいきなり左手を後ろに引き、上体を下げた。それによって長髪の少女は状態が崩れる。

長髪の少女は無理矢理体勢を立て直そうとするが、藍那が腰の回転を利用して切り上げる方が速い。

腰の回転をフルに活用して放った藍那の一撃が長髪の少女の脇腹を打ち抜く。

苦痛を押し殺すように「クツ・・・。」と小さく漏らし、長髪の少女は武道館の床に彼女が倒した生徒と同じように倒れ伏した。

「藍那さん!!大丈夫ですか?！」

藍那が長髪の少女を倒したのとほぼ同時に香奈子と恵利が武道館に入ってきた。

「大丈夫よ。2人ともいいタイミングね。悪いのだけれど、そこにいる先輩と一緒に怪我人の介抱をお願い出来る?」

自分たちでは勝てなかった相手を倒してしまった藍那に呆然としている男子生徒を見て、香奈子と恵利は顔を見合わせて笑ってしまった。

深い藍色の長髪と紅い瞳をした少女、志摩刀華しまとうかは医務室のベッドの上で目を覚ました。

窓から見える空は薄暗くなっている。自分が第2武道館にいたときには、まだ明るかったことを考えるとかなりの時間が経過していると思われる。

しかし、どうしてこうなっているのか、どうも思い出せない。最後の記憶は恐ろしく目つきの悪い女子生徒に脇腹を打ち抜かれたというものである。

いつまでも横になっているわけにもいかないと思い、起き上がろうとする。しかし、脇腹に鈍痛が響き、起き上がることが出来なかった。「目が覚めたようね。」

高身長のおっとりした女性が医務室に入ってきた。確か、1年2組の担任教師の小鳥遊碧だった気がする。

刀華は起き上がろうとするが、小鳥遊がそれを制止する。

「あなたは1年3組の志摩刀華さんで間違いないかしら?」

刀華は「はい。」と短く答える。

「もう時間も時間だし単刀直入に聞いわ。どうしてあんな行動に出たの?」

「どうやら、なぜ武道館で乱闘騒ぎを起こしたのかの事情聴取のようなものだろう。」

「私が志摩流剣術の直系の家出身ということは知っていますか?」

小鳥遊は頷く。確か、彼女は剣道中学生の部で連覇していたはずだ。

「この学園の剣道部に入るつもりはなかったんですが、一応のぞいてみようと思って第2武道館へ行ったんです。案の定、剣道部の方々に入部するように勧められたんですが、入部の意思はないと断ったんです。すると、主将が決闘を持ち掛けてきて、私が負けたら入部するように言ってきたんです。もちろん断ったんですが、それが逆に彼らを刺激してしまつたらしく、剣道部全員で襲ってきたんです。私は全員

を相手して勝ったんですが、それを暴力行為と思ったのか風紀委員の方が乱入してきて、最終的にあんなことになってしまいました。反省はしています。」

刀華は大雑把ではあるが、事の顛末を小鳥遊に話した。

「だいたい分かりました。暴力行為を行ったものの、原因としては剣道部の無理な勧誘もあったということね。明日にでも剣道部に話を聞く必要があるわね。」

刀華の聴取を小鳥遊はメモ帳にまとめめる。

「あの、私が倒してしまつた方々の怪我の具合はどうでしたか？」

「全員打ち身程度だったわ。一番怪我がひどいのはあなたよ。」

メモ帳に書きながら答えてくれる。

「それと、最後に戦つた吊り上がった切れ長の目をした黒髪の女子生徒が誰なのか分かりますか？」

小鳥遊は少し考え込むようなしぐさをする。小鳥遊の記憶の中ではこの特徴に合致する生徒は一人しかいない。

「違つかもしれないけど・・・、多分、仁科藍那さんね。風紀委員で私のクラスの子よ。」

そこで、刀華は驚愕する。通常、風紀委員は2年生以降の生徒で構成される。にもかかわらず、1年生が在籍しているなど普通は有り得ない。

「後で寮まで送って行ってあげるから、ここで待っていてね。」

そう言うと、小鳥遊は医務室から出ていった。

刀華は仁科藍那という名前を忘れないよう頭の中で何度も言いながら、明日、彼女を訪ねてみようと思つた。

小林静は朝から少し気合が入っていた。

月曜日の放課後に藍那へ話があると声をかけたものの、要件を話すことが出来ずに彼女は教室を出て行ってしまった。

周りの人の話によると、藍那は風紀委員の用事があつたらしく急いでいたとのことだ。

怒っていないと藍那と仲のいい西原香奈子は言っていたものの、信じる事が出来ない。自分にはどうも殺気のコもった目で睨まれたように感じた。

昨日も昼休みに声をかけようとタイミングを窺っていたのだが、香奈子と星川恵利と話し込んでいた。そして、気が付くと昼休み終了の予鈴がなってしまったのだ。

放課後も風紀委員の仕事ということで話しかけられなかった。

静が藍那に言いたいことは、勝手に講習を抜け出すような真似はクラスの統率を乱すからやめてほしいということ。そして、どうしてもあのような行動に出たのかという事を聞きたいのだ。

たったこれだけの事を……。と思うかもしれないが、ちよつといい？と聞いていきなり睨まれた相手に話しかけるというのは、かなりハードルが高いことなのである。

今日こそは話しをするぞ！と気合を入れて、気が付くとまた昼休みになっていた。

そして、現在藍那は先の授業の片づけをしており、1人なのだ。今しかない、と思つた静は勇気をもって話し掛ける。

「あの、仁科さ——」

「仁科藍那ッ!!少し話がしたいから、出てきてくれ!!」

静の声は、教室の扉を開けて藍那の名を呼ぶ闖入者の声によつてかき消された。

藍那は「いきなりの呼び捨てなんて失礼ね……。」と言いながら闖入者のもとへ行つてしまった。

今回もダメだったと静は心底うなだれる。

そんな静の元へ香奈子が寄つてきて、「どうかしたの?」と尋ねてくる。静はこうした理由で藍那に用事があったと香奈子へ説明したが、藍那本人ではないので意味はない。

静は再びうなだれつつ、昼食の準備に取り掛かった。

2組を訪ねた闖入者は志摩刀華であった。

刀華は藍那を連れて人通りが少ない廊下の突き当りへ来ていた。

自分の目の前にいる長髪の少女は確か、昨日自分が倒した生徒だつ

たような気がする。

藍那はこれから昼食を摂ろうと思っていたため、出来れば早く用事を済ませてもらいたかった。

そんな藍那に対して刀華は藍那に、ずっと睨まれていると錯覚していた。

「昼食前に呼び出してしまつて申し訳ありません。私は3組の志摩刀華といひます。お怒りだと思ふが、少しだけ話しをしてくれないでしょうか？」

刀華はまず藍那に怒りを鎮めてもらおうと思ひ、謝罪から始めることにした。

藍那は自分を強引に連れ出した相手が、意外にも丁寧な謝罪をしてきたことに少し驚く。

「ええ、構わないわ。もう知つてゐるだろうけど、仁科藍那です。よろしく。それと、別に怒つてゐないわよ？」

藍那はいつもと同じように怒つてゐるという誤解を解こうとする。「そ、そうなの？ ずっと睨まれているように思つたから、てつきり起こつてゐるのかと思つてしまつて……。」

刀華の「睨まれてゐる」という言葉を受け、藍那は自分の目尻を人差し指を当ててグリグリと動かす。

「よく間違われるのだけれど、この睨んでゐるような目つきは元からの。そのせいで、さつきの貴方のように怒つてゐると勘違いされるわ。」

「そうだつたんですね。よかつた……。」

藍那が怒つてゐるわけではないと分かり、刀華はホツとする。

「それで、用件は何かしら？ 次の授業は実射実習なの。」

藍那たち2組の授業スケジュールは、月曜と火曜日が一日を通して数学や国語などの座学、水曜日が午前はS F 関連の座学で午後からは実弾を用いた実習、木曜、金曜日は午前にはS F の操縦訓練、午後は近接格闘や銃を用いての市街地訓練などの実習が入つてゐる。

月曜日と火曜日以外、特に木曜日と金曜日は肉体的にかなりハードなカリキュラムなのである。

「そうだったの……。では、まずは昨日のことを謝罪させてください。本当に申し訳ありませんでした。それと、1つ聞きたいことがあるのだけれど、いいかしら?」

藍那は話すように促す。

「あなたはどこかで剣術を学んでいたの? 竹刀の握り方や構えは素人のようだったけれど、あの動きや野生の狼のような鋭い気配はやろうと思ってもすぐにできるものではない。なら、どこでそれを身に付けたの?」

刀華は少し興奮したように問いかけてくる。

「剣術は少しだけ習ったことがあるわ。でも、基本的な動きを少しだけ習っただけだから、本格的ではなかったわ。気配は狼のようかどうかわからないけれど、動きは昔死に物狂いで訓練したから、そのせいでと思うわ。」

剣術は依然CQCと一緒に正純によって教わった。剣術はCQCと違い軽く教わっただけなので強さは一般人とさほど変わらないが、子供兵時代に身に付けた近接格闘の技術でカバーしている。

「その、昔っていうのは、どういったことがあったの?」

刀華は相手のプライバシーに関するかもしれないことなので、恐る恐るといった感じで尋ねてきた。

「私は以前、子供兵として実際に戦場に立っていたの。」

それがどうした、といった様子で藍那は昔のことを話す。それに、どう反応したら良いのかわからず、刀華が少し混乱する。その様子を見て、藍那は最近どこかで見えたことがあるようだと思った。

「わたしからも1つ用事があるから、ついてきてくれないかしら?」

「え、ええ……。」

藍那はいまだ混乱する刀華をつれ、職員室へと移動した。

「小鳥遊先生、少しよろしいでしょうか?」

職員室の中に入り、小鳥遊の机の横まで刀華を連れてきた藍那が小鳥遊へ尋ねる。

「仁科さん、どうしたの?」

昼食の弁当を食していたが、親切にも藍那たちに対応してくれる。

「風紀委員にまだ、欠員が1人いましたよね？」

「ええ、確かに1人足りませんが、それがどうしたの？」

「そのもう一人を連れてきました。」

藍那は連れて来た刀華を前に出す。

刀華は何が起こっているのか理解できていない様子であり、頭の上
に『？』が浮かんでいるようだ。

「確かに彼女なら戦力的にも問題ないわね……。」

小鳥遊は藍那が言おうとしていることを理解し、真剣に悩む。

「志摩さん。少し話があります。この後残ってください。仁科さんは
この後実習だから、遅れないように言ってくださいいね。」

藍那は「はい。」と返事をし、職員室を後にした。

残された刀華はいきなり小鳥遊手をがっちり握られた。

「志摩さん。この場では詳しい話が出来ないから、放課後私のところ
に来てください。そこで風紀委員の仕事内容を説明します。」

そこで刀華はやっと話の内容を理解する。

「ちよ、ちよつと待つてください!!いいんですか?私はまだ1年生で
すよ!」

刀華の言葉に小鳥遊はニコニコとした笑顔をする。

「1年生なんてあんまり関係ないわよ?実際、仁科さんの前例がある
んだもの。」

手を小鳥遊に強く握られており、逃げることも断ることも難しい。

刀華はここで藍那に嵌められたことに気づく。

(やられた……!覚えてろよ……!!仁科藍那あああ!)

心の中で呪詛を吐く。

刀華にはニヤニヤ悪い笑顔をしている藍那を幻視した。

藍那は用事を済ませ、昼食を摂るために2組へ戻った。

すると、香奈子と恵利が心配そうな顔をして出迎えてた。

「藍那っち、大丈夫だった?さっきのって昨日武道館で暴れてたやつ
だよね?まさか御礼参りってやつ?」

恵利が心配そうに尋ねてくる。

「違うわ。ただ話をしたかっただけみたい。」

「それじゃ、あの人はどうしたんですか？」

話をしていたにしては少しばかり短いと思ったため、香奈子が尋ねてきた。

「職員室に置いてきたわ。次は実習だから、あまり長話もしていられないもの。」

香奈子と恵利はよく分からないといった顔をしているが、藍那はあえて無視することにした。

「私は昼食がまだなの。実習に遅れてはいけないから、少し急ぐわ。」
藍那の昼食はいつもと同じレーションであるため、飲み物で流し込めば2分とかからないが。

そこで、香奈子はあることが気になった。

「今日の実習って射撃実習ですよね？藍那さんって出るんですか？」

「流石に毎回さぼったりはしないわ。前回は講習だったから抜け出しただけよ。今回からは自習だからちゃんと出るわ。」

よくわからない理論ではあるが、香奈子と恵利は何故か理解してしまった。

前回の講習と同じように全員訓練着に着替えている。ただ、前回とは違い射撃訓練場へ現地集合になっている。

時間通りに射撃訓練場に集まり、実習が始まるのを整列して待つ。

少しすると担当教官が入ってくる。担当は前回と同じく岸であった。

「全員揃ってるか？ん？仁科がいるのか・・・。」

岸は少し悩む。

「仁科。お前は1年のこの単位はもうくれてやる。その代わり、俺のアシスタントだ。いいか？」

岸のまさかの発言にクラスがどよめくが、藍那はこう言われると分かっていたかのように、「はい。」と応えるだけだった。

「それじゃあ、決定だ。仁科は前に来てくれ。これからの予定を説明する。」

いきなり静が手を挙げた。

「ん？確か、小林だったな。何だ？」

「岸先生、こんな勝手なことをしてよいのですか？それに、生徒をいきなりアシスタントにつけるなんて……。」

静は納得できないといった様子である。

「この実習と単位については俺に一任されているから、特に問題ないぞ？」

「ですが……。」

まだ納得できない静は反論しようとするが、

「それに、お前たちも見たら？仁科にはこの実習は正直言って不要だ。それなら、教える側に回ってもらった方が、こつちとしても楽だからな。」

岸の言っていることは正論ではないが、クラスの半数以上を納得させてしまった。

藍那を岸のアシスタントに就けることによって、一人一人にさける時間が増えた。それにより、2組はほかのクラスよりも射撃の上達率が格段に高くなった。

藍那は実習を終えて着替えを済ませ、荷物をとるために2組へ戻っていた。

教室到着にタイミングを合わせたように、藍那の携帯へ小鳥遊からメールが入った。文面は『この後、職員室の私の所へ来て下さい。』とだけある。

藍那は何か小鳥遊に用事があったかと思い返し、刀華を小鳥遊へ丸投げしたことを思い出した。

荷物は予め昼休みの内にまとめておいたため、片づけなどの時間は一切かからなかった。

職員室へ向かおうと自分の席から移動しようとした時、昼休みの時のようにして刀華が勢い良く2組へ入ってきた。

しかし、昼休みと違い、刀華は怒りのこもった凄い形相になっている。そのせいか、放課後ということもあり、にぎやかになっていた教室が静まり返った。

「仁科藍那!!よくもはめてくれたな!!」

刀華は藍那と目が合った瞬間に怒りをぶつける。

「はめた記憶はないけれど?どうかしたの?」

怒りをぶつけられている藍那は一切気にしている様子はない。それに対し、刀華は更にエキサイトする。

「嘘をつくな!!昼休みにとんでもない目に合ったぞ!いきなり風紀委員にならされるなんて聞いてない!」

刀華は変なところでまじめらしい。

「うまく言って逃げればよかったのに……。それで、仕事内容の説明は受けた?」

「今からだ。」

ここで先ほどの小鳥遊からのメールの内容が繋がった。どうも小鳥遊は刀華を連れて自分のところへ来いと言いたいのだろう。

「わかったわ。それじゃあ、職員室へ行きましょうか。」

藍那はそう言うと言奈子と恵利の方を向き、今日は一緒に見て回れないことを説明した。

香奈子と恵利は了解の意思を藍那へ伝え、藍那と刀華は職員室へと向かった。

職員室に着くと、小鳥遊は何の前置きのなく刀華へ風紀委員の仕事内容の説明を始めた。

藍那としては1度聞いたことのある内容だったが、確認のためと思いついて聞くことにした。

一通りの説明が終わり、小鳥遊が刀華へ質問はないかと問う。

「1つ質問があります。風紀委員は武器の携帯が認められているのですか?無手の私では戦力にはなれません。」

言われてみれば、武装している相手に無手で立ち向かうというのは、危険極まりない。まさに愚か者のすることだ。

近接格闘訓練を積んだ藍那のような者であれば問題ないかもしれないが、刀華のように得物を持ってこそ真価を発揮するタイプの者には死活問題である。

「武器の携帯は非殺傷武器のみ許可されています。ですが、非殺傷弾

を使用した銃火器や木刀といった、相手に大怪我を負わせる可能性のある物は許可できません。志摩さんの場合は、警棒程度なら許可できると思います。」

藍那は警棒でも相手に大怪我を負わせる可能性も無きにしも非ずだと思っただが、話が長引くとめんどくさいので言わないことにした。「分かりました。太刀ほどではないですが、小太刀もそれなりに修練を積んでいるので問題ないと思います。」

「警棒は風紀委員室の物品棚に置いてあると思うので、それを使ってください。それと、仁科さんには志摩さんの教育係になってもらいます。今日から数日の間、ペアで行動してくださいね。」

藍那自身も風紀委員になって数日であるが、小鳥遊がいいというのであれば構わないのだろう。

「では、2人とも頑張ってくださいね。」

小鳥遊からの激励を受け、藍那と刀華は風紀委員室へ向かった。

風紀委員室に着き、藍那たちは用具を収めた棚をあさる。

書類などの事務系に関するものは几帳面な相模原が整理をしているため、とてもよく片付いている。

しかし、それ以外の物品は委員長である弓弦が管理をしている。弓弦はよく言えばダイナミックな性格、悪く言えば大雑把なのである。そのため、段ボール箱に適当に放り込まれている物品中から、目的のものを探し当てるのに思いのほか時間がかかった。

風紀委員室に来たのが約20分前であり、現在の時刻は16時になろうかという頃だった。6時限目が終了したのが15時10分であつたから、かなりの時間を使つてしまつている。

「では、行きましようか。」

藍那が警棒を腰につけた刀華へ問う。

「それはいいけど、なんて呼べばいい？ 私は刀華って呼び捨てにしてくれてかまわないよ。」

「私も呼び捨てにしてくれてかまわないわ。それじゃ、行きましようか。」

2人は仕事へ向つた。

基本的に部活動同士での暴力沙汰は運動部で起こる。その中でも格闘技や武術部系の部活では特に多かった。そのため、風紀委員の見回りの多くはこれらの部活が集中する武道館周辺がメインとなる。

藍那と刀華も例に漏れず武道館周辺に向つていた。

「よう、風紀委員。ちよつと面かせよ。」

小走りで向つていた藍那たちに物陰から声が掛けられた。決して穏やかな雰囲気ではないが、藍那と刀華は待ち伏せなどを警戒しおとなしく従うことにした。

物陰から声を掛けてきた男子生徒に校舎と校舎の隙間へ連れてこられた。

そこには男女合わせて20数名がおり、その全員が藍那と刀華へ敵意を持っているように感じられた。

藍那と刀華はその全員に見覚えがあった。

「どうなされたのですか？先輩方は仲がいいんですね。」

藍那が言うように、2人の前に立っているのは空手部と剣道部の生徒であった。

「ハハハ、風紀委員のお前には何もしないぜ。でもな、俺たちのメンツをつぶしやがったそっちの女には、復讐してーんだよ。」

剣道部員の一人が刀華に竹刀を向ける。

「それで、こいつらに話を持ち掛けられてな。お前を潰すのに協力することを条件に、俺たちもこいつらに協力することになったんだよ。」
空手部主将を中心に空手部員たちが、藍那を痛めつけるのを楽しみそうに下卑た笑みを浮かべる。

「まあ、最初はそっちの女だ。」

剣道部員の数名が刀華へ威嚇しながら近づく。

「先輩方は丸腰のか弱い少女を集団でリンチするのが好きなようだね。やれやれ、人間としてどうかと思うね。」

刀華は剣道部員に向かって挑発する。

その言葉で剣道部員たちは頭に血が上る。

「謝ったらちよつと痛めつけるぐらいで終わらせてやろうと思ってたが、二度と歯向かえねーようになるまで痛めつけてやる！おいっ！お前らはそっちの風紀委員の奴を押さえてろよー！」

1人の剣道部員が空手部員たちに命令し、刀華へ竹刀で殴り掛かる。

刀華は懐から伸縮式の警棒を取り出して伸ばす。警棒は伸ばすと小太刀ほどの長さになった。

刀華は警棒で竹刀を受け流し、カウンターで相手の肩口を打ち抜いた。

警棒の一撃をまともに受け、鎖骨を砕かれた生徒は痛みにもたうち回る。

「反撃された!?こんなの聞いてないぞー！」

「なんで武器を携帯してるんだよ!？」

のたうち回る仲間を前に、ほかの者たちはうろたえる。

数人で囲んでしまえば抵抗などされないと踏んでいた剣道部員たちにとつて、刀華の反撃は完全に予想外のものだった。

「言い忘れてましたけど、私、今日から風紀委員になったんですよ。ということ、風紀委員に対する動力行為として、全員拘束させていただきますね?。」

刀華から更に予想外の言葉を聞き、なお一層うろたえ始めた。

うろたえ、パニック状態になっている相手を倒すのは刀華にとつて容易いことである。そのため、剣道部員たちは瞬く間に倒されていった。

「先輩方どうしますか? 共闘を組んでいた剣道部の方々はほぼ全滅ですが。何もしないとこののなら、今回は大目に見ますが?。」

藍那は胸ポケットに入れている携帯端末を操作しながら、空手部員に警告を交えながら問う。

「それじゃあ、今日は引くとするか。」

空手部の部長がポケットに右手を入れ、藍那の前を通り過ぎる。その時、部長が右手で藍那に殴り掛かった。その拳には金属製のメリケンサックのようなものはめられている。

空手によつて鍛えてきた正拳突きが藍那をとらえるかと思われた。

しかし、藍那はいとも簡単に躲した。

先ほどの正拳突きは完全に不意打ちだったはずである。にもかかわらず、藍那は完ぺきなタイミングで回避した。それに、部長は動揺する。

「長年、空手という武道に取り組んでこられた先輩が、こんな卑劣な手に出るとは……。それに、鍛えられた正拳突きだけでも危険だといふのに、メリケンサックまで使うなんて。何を考えていらつしやるんですか?。」

藍那は残念そうに問う。

「何で避けられたんだ!? 完全に不意打ちだったはずだ! なのになんて——。」

「簡単なことよ。最初から警戒していた。それだけよ。四方敵に囲まれた状態でリラックスしていたとでも思ったの？」

藍那は部長の逆質問が終わるよりも早く、疑問に答を応える。藍那の言葉には

先ほどとは違い、敬語がなくなっており半ば高圧的な物言いになっていた。

「テツメー……ッ……ふざけやがって!!」

部長に続くように他の空手部員も藍那に襲い掛かる。

しかし、月曜日の再現のように藍那への攻撃は当たらなかった。そのことに空手部員達は苛立ちを覚える。

「そこまで!!」

殺気が充満した空間を切り裂くように、凜とした声が響いた。

藍那たちへ襲い掛かかっていた生徒たちがその声の方を向く。そこには、風紀委員副委員長の斎藤奏恵がいた。

「斎藤!!邪魔すんな!!お前もぶっ飛ばすぞ!」

藍那に攻撃をかわされ続け、苛立ちが募っていた男子空手部員が斎藤を威嚇する。

「やってみなさいよ。あんたらに出来るならだけど。」

斎藤は微笑を浮かべながら挑発する。苛立ちが募っていた空手部員は斎藤の挑発で怒りが頂点を迎え、飛びかかる。

斎藤は空手部員の攻撃を雑に躲す。それによって、斎藤は態勢が崩れる。

この態勢では反撃はおろか、避けることもままならない。しかし、斎藤は崩れた姿勢から空手部員の鳩尾にこぶしを叩き込んだ。

こぶしを受けた空手部員はその場に崩れ落ちる。

普通なら怯みはするかもしれないが、ここまでのダメージは受けない。何故ここまで強打を崩れた体勢から打てたのか藍那には分からなかった。

しかし、この疑問の答えはすぐに分かった。

「発勁……。」

刀華がつぶやく。それを藍那は聞き逃さなかった。

「発勁って？刀華は何か知っているの？」

藍那は剣道部員を全員倒した刀華の元へ行き、疑問を問う。

「実際に見るのは初めてだけど、発勁としか考えられない。原理は分からないけど、どんな体勢からでも強打を打てるの。」

刀華は藍那の問いにもつたいぶることなく答える。

「あなた達も手伝ってくれない？」

突如声をかけられた2人は斎藤の方を向く。そこには、3人ほどを拘束している斎藤がいた。

「ボーっとしてないで、手伝ってくれない？」

斎藤の2度目の呼びかけで藍那と刀華は作業に取り掛かった。

刀華の剣術や斎藤の発勁を目にし、藍那は武術に興味がわいていた。

これまでは、CQCやナイフによる格闘術などの訓練受けてきた。しかし、未知の戦闘技術を目にし、藍那は更に自分の戦闘技術を高められるのではないかと思っていた。

戦場において、生還できるかどうかは8割が運、残りの2割が自分の技術だと藍那は思っている。

自分の運は鍛えることは当然できない。しかし、残り2割の自身の戦闘技術は鍛えることが出来る。少しでも自分を鍛えることで生還率を上げる。これは、藍那が子供兵時代に刻み込まれていることである。

藍那自身、SF学園へ入学した段階で自分が国防軍へ入隊すると思っていた。

日本国防軍はあくまで日本国の専守防衛を目的としている。国防軍は以前自衛隊という名前であったが、第3次世界大戦の影響で憲法を含む国防関係の事柄を一新した。

国防軍は日本に隣接している中華連邦共和国からの度重なる軍事的挑発などにより、2国間の関係は一触発という状態であった。

SFは日本の航空戦力の主力である。

しかし、中華連邦は日本に次ぐガルダニウムの産出国であるため、中華連邦による領空侵犯の9割はSFによるものである。

そのため、1度戦闘が発生してしまうと威嚇行為では終わらず、命のやり取りになってしまう。

現に数年前には領空侵犯を行っていた中華連邦軍のSFと日本国防軍のSFとの戦闘が発生し、両国合わせて13名もの死者を出すという不幸な事件が起きた。

そのため、国防軍に入隊するというのは正真正銘命を懸ける覚悟が必要なのだ。

しかし、藍那自身に自殺願望はない。死にたくはない。死なないように自分を可能な限り鍛え上げたいと思っていた。

藍那と刀華は斎藤と共に逮捕者を移送し、事後処理を済ませている。

「藍那、なんであそこに副会長がきたの？校舎と校舎の間なんて普通分からないでしょ？」

刀華は自分たちの増援として斎藤がどうやって問題が起きたのを知ったのかが気になるようだ。

「これよ。」

藍那は胸ポケットから、風紀委員に配られている携帯端末を取り出した。

「これで、一部始終を録画して、副会長の端末に位置情報を添付して送信したの。無策で敵についていくなんて愚行はしないわ。」

「ふふーん。なるほどね。それなら証拠も押さえているから言い逃れもできないしね。藍那ってかなりの策士だね。」

刀華は笑いながら藍那を冷やかす。

「策士ではないわ。当然のことよ。」

藍那は刀華の冷やかしをサラッと流す。

「それより、刀華に頼みたいことがあるのだけれど。」

「ん？なんだい？」

「私に剣術を教えてくださいませんか？その代わりと言っては何だけど、銃やナイフを教えるわ」

刀華は藍那からの頼みごとが意外過ぎたのか、少しの間フリーズする。

「何で私から？ 剣術だけなら剣道部でもよくない？ 私はともかくとして、藍那は剣道部にとって恩人的な立ち位置だから、教えてくれないってことはないでしょ？」

「確かに、ダメとは言われないと思うわ。でも、実力は刀華の方が上だから、刀華に指導してほしいの。」

刀華は藍那の言い分に一理あると思う。それに、刀華自身銃というものSF学園に入學して初めて握った。そのため、教えてくれるというのはとてもありがたい。

「藍那って、元子供兵だったよね。ってことは、やっぱり銃の扱いも慣れている？」

刀華は聞いていいことなのか分からず、恐る恐るといった感じで藍那にきく。

「ええ、ライセンスを持っているわ。それに、実弾実習で教官の補佐もしているわ。」

さも当然のように藍那が答える。

「そっか……。まあ、私はいいけど、いつ稽古する？」

「早朝と放課後でどう？」

刀華は「早朝か……。」と呟いていたが、了解したようだ。

「それじゃあ、明日の早朝5時半に第一グラウンドに集合にしましょう？」

藍那の提案に刀華が頷く。

事後処理も終わり、今日の仕事は終了となった。

早朝に集合の予定を立てたため、出来るだけ早く帰って休もうという事になった。

藍那が自室に戻ると、香奈子がラフな部屋着姿でゴロゴロしながらノートパソコンをいじっていた。

「香奈子。あんまりゴロゴロしていると、太るわよ？」

藍那は香奈子の方を見ずに声をかけ、自分のクローゼットの前まで行く。

「藍那さんお帰りなさい。私、お腹にお肉が付きにくいんですよ。どうも、胸に集まっているようで・・・。」

藍那が香奈子の方を見ると、うつ伏せの姿勢により潰れた豊満な胸が目に入った。

「チツッ」

藍那の舌打ちに香奈子がビクツとなる。

藍那の胸も平均に比べれば大きい部類に入るだろう。しかし、学年のなかで1位2位を争う大きさを持つ香奈子に比べれば小さく見える。

藍那も1人の女性である。当然、自分の容姿や身体つきが気になる。

そのため、舌打ちが反射的に出てしまった。

香奈子はこの話題を長引かせると、自分も藍那もいろいろとダメージを受けると思い話題を変える。

「そういえば、昼休みに小林さんが藍那さんと呼んでいたようですよ。あの闖入者に邪魔されたようでしたけど・・・。」

藍那は聞きなれない『闖入者』という単語の意味が分からなかったが、あえて追及する必要がないと判断した。

『小林さん』って言ったたら、確か委員長だったわね？」

「ええ、2組のクラス委員長の小林静さんです。」

「クラス委員長が私に何か用事でもあったのかしら・・・。」

藍那は少し考えるが、答えは見つからない。

幸い、藍那はまだ部屋着に着替えていない。今から小林の部屋を訪ねることも可能だろう。

「香奈子、私は委員長のところへ行ってくるわ。急ぎの用事ではないと思うけれど、重要な話だといけないから。」

「分かりました。いつてらっしやうい。」

香奈子は上半身を起こして部屋を出る藍那を見送る。

藍那と香奈子の部屋は309号室である。今回の目的である小林

の部屋は306号室である為、さほど距離は離れているわけではない。

自室を出てすぐに目的地に到着する。

藍那が3回ノックをすると、「はい」という声とともに、小林のルームメイトである佐々木七海が扉を開けた。

「こんな時間にごめんないね。小林さんはいる？」

まだ19時を迎えていないためあまり遅い時間ではないが、課題などをやっていた可能性があるので謝しておく。

「仁科さんか……。珍しいね。まあ、入ってよ。」

七海はいきなりの藍那の訪問に少し驚いた様子だったが、すぐに部屋に迎え入れてくれた。

藍那は「お邪魔します。」と言いながら入室する。

「静は夕飯を買いに行ってるから、ちよつと待ったら帰ってくると思うよ。」

「わかったわ。それじゃあ、少し待たせてもらおうね。」

「はいはい。」

七海は藍那に椅子をすすめ、自分はデスクトップパソコンを置いている机に向かった。

「ただいまー。」

5分もしないうちに静が帰ってきた。

静が自室の扉を開け、初めに目に入ったものは藍那だった。静は状況が呑み込めず混乱する。

「お邪魔しているわ。小林さんに用があつてきたの。」

藍那が一礼して、要件を述べる。

静には藍那が自分への用事ということに一切心当たりがない。そのため、要件を話すように勧める。

「香奈子に聞いたのだけれど、あなたが昼休みに私を呼んでいたのよね？何か大切な用事があったのではないの？」

静は「なるほど」と思う。どうやら、香奈子が気を回してくれたと理解した。

「昼の件は、午後の実習にちゃんと参加するように言おうと思っただ

けだから、気にしないで。」

「何故そんなことを？」

首を傾げつつ藍那が聞く。

「前は途中退出したから、もしかしたら参加しないんじゃないかって思っ。クラスの不和に繋がるから、あまり勝手な行動はしないでほしいのよ。」

「ご迷惑をかけたようね。ごめんなさい。次からは気を付けるわ。」

藍那は素直に謝罪を述べ、静に頭を下げた。

静は素直に謝罪されるとは思っていなかったため、再び混乱する。

「頭を上げて、仁科さん。」

藍那は謝罪を受け入れてもらえたと判断し、頭を上げる。

「私も仁科さんに謝らないといけないことがあるの。月曜日の放課後、急いでいたのに引き留めてしまっごめんなさい。まだ怒ってる？」

静はずっと藍那が怒っていると勘違いしており、あの時睨まれたに違いないと思っていた。

しかし、藍那はそんなことがあったことを忘れていた。恐らくは自分の目つきの悪さが原因だろうと予測が出来た。そのため、適当に流すことにした。

「心配しないで、あの時含め怒ってないわ。この目つきのせいでよく怒ってると思われるけど、基本的に怒ってないわ。」

「そうだったんだ。よかった・・・。」

静は胸をなでおろす。

「用件も済んだことだし、私はそろそろ部屋に戻るわ。それじゃあまた明日。」

「ええ、わざわざありがとう。また明日。」

藍那は大した要件ではなかったものの、自分への勘違いが晴らせたということに多少の満足感を得ながら自室に戻った。

藍那の朝は早い。

子供兵時代に日が昇ると同時に起床するという生活を送ってきたため、日本に来た後も体が勝手に目覚めてしまう。

いつもは朝5時に目覚めてしまうため、登校時間までかなりの時間がある。そのため、体力増強を兼ねて以前よりトレーニングを行っていた。SF学園へ入学して数日は行わなかったが、やはり日々のルーティーンともいえるトレーニングを再開していた。

藍那はいつも通り5時に目が覚めた。

今朝は刀華との約束もあり、少し早めに準備をしてグラウンドへ行くことにした。

いつもと同じように寝間着から運動着に着替える。上は半袖のランニングウェア、下はロングのスポーツタイツに上とそろいの短パンを履いている。その後、あらかじめ準備していたスポーツドリンクを水筒へ移す。

あくまで早朝の自主トレーニングである為、水筒は500mlの水色のものである。

準備を済ませ、何時ものように部屋を出ようとした時、

「ん……。あれ、藍那さん。朝、早いですね……。こんな時間にどこ行くんですか？」

朝に弱い香奈子が珍しく目を覚ました。

実を言うと、香奈子は少しでも藍那へ追いつくべく今日から藍那に内緒で早朝トレーニングを始めようとしていたのだ。

昨晚、腕時計式の目覚まし時計をセットして張り切っていた。

「自主トレよ。香奈子こそ今日は早いね。」

「えっ！藍那さんも自主トレですか？」

香奈子が驚きの声を上げる。

「私も、ということとは、香奈子も自主トレ？それなら、一緒にどう？」

香奈子は藍那に内緒でトレーニングをし、藍那を驚かせてやろうと画策していた。しかし、藍那に早くもばれてしまった。

香奈子は「はい。」と返事をし、自分もトレーニングへいくための準備を始めた。

刀華も5時頃に起床し準備を整え、待ち合わせ時間よりも少し早い5時25分にグラウンドへ来ていた。

しかし、刀華は1人ではなかった。

刀華のルームメイトの柴田佳乃しばたかのも一緒であった。

佳乃は身長180cmほどもあり、かなりの長身である。整った美しい顔立ちをしており、おっとりとした目をしている。瞳の色は透き通ったセルリアンブルーをしており、とても美しい。背中の中ほどまである深みのある黒の髪を青い紐で一つにまとめ右肩に流している。

刀華と佳乃の2人はSF学園の校章の入った学園指定の体操着を着ている。

「何で佳乃まで来てるの？ ゆっくり寝ててもいんだよ？」

「いやいや、刀華さん1人だといろいろと心配ですから。いつ問題を起こしかわかりませんしね？」

佳乃は刀華へ嫌味をサラツと言う。それに刀華は「ははは・・・。」と苦笑いをする。

「それより、いらつしやったようですよ？」

刀華たちと同じ学園指定の運動着を着た少女と、ランニングウェアを着た少女が歩いてきた。

「おはよう。刀華1人だと思っていたけれど・・・この人は？」

藍那が刀華に問う。

「こっちは私のルームメイトの柴田佳乃。私がトレーニングに行くつて言ったらついてきたんだよ。」

刀華が苦笑いしながら佳乃について説明する。その横で佳乃が「よろしく願います。」と一礼しながら挨拶している。

「それはそうと、そちらの方は？」

刀華は香奈子を見る。

「はじめまして。藍那さんのルームメイトの西原香奈子です。よろしく願います。」

香奈子は刀華と佳乃に自己紹介をする。

「時間も惜しいから、早速ウォーミングアップしましょう?」

藍那の一言で、早朝トレーニングが開始された。

普通、ウォーミングアップとはストレッチと軽いランニング程度を思い浮かべるだろう。

しかし、藍那の提示したメニューはストレッチと5kmのランニングだった。5kmは決して軽いランニングではないが、藍那に真顔で軽いランニングだと言われ他の3人はため息をついた。

ストレッチを終え、ランニングが始まって15分。藍那はいつもと同じ様にかんりの速さで走っていた。

藍那の速度は普通の人にはとても速い速度である。しかし、以前から道場で下半身の強化を目的に走り込みをしていた刀華は必死で藍那に食らいつき、距離を離されないように走っていた。

香奈子は最初の数分、藍那について走っていたがすぐに限界を迎えペースダウンした。一方、佳乃は自分のペースを守り順調に走っていた。ちなみに先ほど藍那に周回遅れにされた。

(はぁ。。。興味本位で刀華についてきたはいいけど、こんなに真剣なトレーニングだったなんて。。。刀華が言うようにゆっくり眠っていればよかった。。。)

佳乃は心の中で嘆く。気合を入れなおすため顔を上げると、今にも死にそうな香奈子を発見した。

香奈子はゾンビ映画のゾンビか水を求め徘徊する亡者のように、とぼとぼと走っていた。

明らかに限界を迎えている。

このままではまずいと思い、少し前を走っていた刀華のもとまで走る。

「刀華、あれって少し不味くない?」

佳乃は香奈子の方を指さし、刀華へ伝える。

刀華も香奈子の方を向き、満身創痍の香奈子を確認する。そして、全力疾走で藍那に追いつき、ランニングを中断した。

全員でグラウンドのわきにある芝生で休息をとる。5kmを予定していたランニングは途中で中断となり、中でも満身創痍だった香奈子

は大の字に伸びていた。

「ペース配分を考えないのはダメよ?」

藍那が香奈子に忠告している。そんな藍那はほとんど疲労が見えない。

刀華と佳乃は香奈子ほどではないが、疲労している。

「それにしても、藍那はすごいなあ。あのペースで走ってほとんど疲れてない。やっぱりただものじゃないね。」

刀華は藍那に感服したという様子である。

「私はただ訓練を重ねただけよ。」

藍那は何でもないと口にした様子である。

「まあ、仁科さんともかくとして、やっぱり走るのって胸が小さい方が有利なのかしら?」

いきなり佳乃が刀華を見ながら呟く。

佳乃の胸は藍那と同じぐらいで平均以上である。香奈子は平均値を大幅に上回っており、今いる4人の中で1番大きい。それに対し、刀華は少々残念である。

佳乃の言葉を受け、刀華は自分の胸と他の3人の胸を見比べる。刀華以外の胸は豊満で、自身の胸はチマツとしている。

刀華は佳乃の言おうとしていることを理解した瞬間大爆発した。「巨乳が何だったの!?ただ大きくても肩は凝るし、動くのに邪魔になるし。邪魔なだけだよ!!それに、胸の大きさが価値が決まるわけじゃないんだよ!!」

刀華は最後の方はやけくそになり、涙目になっていた。

今回のトレーニングは昨日予定していたような訓練ではなく、単に楽しく運動するだけになってしまった。

藍那達2組と刀華達1組はともに、木金曜の午前中は丸々SFの操縦訓練である。

早朝のトレーニングを早々に切り上げ、4人は各々SFスーツを着用した状態で第2グラウンドへ集合していた。

1限目からグラウンドで実習ということもあり、ショート・ホームルーム S H R 無しで現地集合となっている。

しかし、トレーニングが早く終わりすぎてしまったため、8時現在まだ藍那たち4人しか集まっていない。集合時間は8時半であるため、当然ともいえる。

SF学園は全国から優秀な人材が集まってくる。そのため、15分もしないうちに1組と2組の全員が集合した。

操縦訓練の科目は1組と2組の担任とSF担当の教官が1人の計3人で担当する。このSF学園の教員のほとんどが元軍人かSF学園卒業者であり、担任を任されている教員はSFを操縦することが出来る。

その中でもSF操縦訓練の担当教官である小久保夏希こくほなつきは国防空軍に所属していた経験があり、学園内でも屈指の実力を持つ。

生徒が集合して数分後3人の教員が集まり、少し早めに実習が始まった。

「今回はSFを装着しての歩行訓練と、前回と同じ握力制御を行う。それでは、各自SFを装着して再集合してくれ。」

3人の教員を代表して小久保が指示を出す。小久保は今年で45歳を迎えるが声には張りがあり、よく通るためメガホンなどの拡声器は必要なかった。

前回のSFを装着しての握力制御訓練では腕部のみを装着していた。しかし、今回はスラスタ等スラスタの飛行ユニットと武装を除いたすべてを装着している。

これは、藍那を含めて生徒は全員初めての経験であり、グラウンドに併設されているSFの格納庫から皆ぎこちない動きで出てきた。格納庫からグラウンドの集合場所まで100mの距離もない。普通であれば歩いて2分もかからないだろう。しかし、慣れないSFによつて再集合に10分もかかってしまった。

「まあ、初めてにしては上出来か。今日と明日の2日でまともに歩けるようになってもらう。飛んだり跳ねたり走るにはだいたい1カ月かかると思ってくれ。そのための基礎として歩行ができないと話にならない。間違えても怪我をしないように各々訓練に励んでくれ。」

小久保の号令を受け、各々歩行訓練を開始した。

SFは3〜4mの人型のパワードスーツのようなものである。そのため、歩行方法は普通に歩くのと大差ない。しかし、SFのパワーは人間の10〜20倍であるため、力加減がとても難しく気を抜くと転倒してまう。

SFで転倒してしまうと3〜4mの位置から落下してしまうのと変わらない。しかし、ガルダニウムが生み出すワームホールを応用した機体の周りに薄膜のように展開されているシールドと、SFによる重力制御によって大怪我をするということはない。

だとしても3〜4mの位置から転倒するのは恐怖である。そのため、皆とても慎重に歩いていた。

これはコア適合率60%という驚異的な数値をたたき出している藍那も例外ではなかった。

練習機の初風を装着した藍那はバランスをとりながら、他の生徒と同じように歩行訓練に取り組んでいた。

訓練を開始して10分、藍那と香奈子はスムーズに歩行していた。SFでスムーズに歩行するには普通半日はかかる。しかし、藍那と香奈子はたった10分足らずで慣らしてしまったのだ。

これは単純に才能があったとしか言えないが、教員を含め周りの生徒は目を丸くしていた。

「先生。一応歩行は問題なくこなせるようになりました。次の段階へ進んでもよろしいでしょうか？」

小久保の元へ藍那と香奈子がSFを装着したまま歩いていく。

そんな2人に度肝を抜かれつつも、小久保は2人に走行練習と握力制御訓練をするように伝えた。

藍那と香奈子の2人は数分でSFによる走行をこなせるようになり、握力制御訓練へ移った。

愛奈は握力制御をほとんど習得している。しかし、香奈子はまだまだであった。

「藍那さん……。どうやったらそんなにうまく掴めるんですか？」

難なく訓練用の割れやすいボールを掴み、ジャグリングのようなことをしている藍那に香奈子が話しかける。

「香奈子はお箸を使うのは得意?」

なぜSFの話の中にお箸が出てきたのかわからず、香奈子は首を傾げる。

「はい。得意か苦手かと言ったら得意だと思います。小さい頃から母に細かく言われてきましたし。」

「そう。なら、鍋の中の豆腐をお箸で崩さずに摘まむ感覚を思い出してみて。そうするとうまくいくと思うわ。」

藍那は箸を使うのはあまり得意ではない。藍那にとっては箸で豆腐を摘まむのもSFで卵を摘まむのもあまり変わらないのである。ただ、他の人にそれが当てはまるかと問われれば、そうでもない。

しかし、香奈子には藍那の助言がベストだったようで、ジャグリングとまではいかないが普通に摘まめるようになった。

静と七海たちはなかなか上達しないでした。

藍那と香奈子を基準に考えては他の者たちの進捗スピードは遅いだろう。しかし、これが普通なのである。

だが、あの2人はできているのにもかかわらず、自分たちはできていないという焦りは徐々に生徒全体に広がっていった。

静は今年の入学生の中で2位の成績で入学した。自分的には運動も平均以上にできていたから、この学園でクラスのトップになれると思っていた。

しかし、反則じみた仁科藍那という少女がいた。

静は藍那を羨ましくは思うが、憎く思うことはない。それどころか、彼女と切磋琢磨することによって自分を含むクラス全体の底上げになってくれるのであれば、静は嬉しく思う。

だが、静は自分が思う以上に負けず嫌いだった。

素直に藍那へ助言を求めることが出来ず、1人で黙々と歩行訓練に励んだ。

七海は自他共に認めるオタクである。

このSF学園を目指したのは趣味であるインターネットの最新機器などに触ることができるといいうことが目的であった。

中学生の時、七海はクラス内でいじめにあっていた。そんなつらい

時代に心の支えになったのがインターネットだった。

七海からすればSFの操縦や勉強などはSF学園での最新機器に触るための手段に過ぎない。そのため、周りの誰よりも気楽に訓練に取り組んでいた。

しかし、手を抜いて何とかなるほどSF学園は甘くない。周りにいるクラスメイト、特に自分のルームメイトである静は学年の中でも有数の成績を誇る。

そんな者たちに囲まれ、ここでは自分の過去を知る者もない。

そうであるなら、自分も心機一転以前自分をいじめていたやつらを見返すためにも、努力してみようと思隣にいる静のように歩行訓練に集中した。

刀華と佳乃も例にもれず悪戦苦闘していた。

2人は協力し合い訓練に取り組んでいたが、なかなか上達しなかった。どうすればうまくいくかということと話しながら取り組んでいたが、なかなか難しい。

そうしていると、グラウンドのトラックをSFを装着したまま走っている藍那と香奈子を発見した。

「おい。藍那ーッ！ちよつと来てくれーッ！」

刀華達はあまり早く動けないので、ダメもとであったが藍那と香奈子に手を振る。

藍那は手を振る刀華達に気づき、軽快な足取りで走ってきた。

「どうしたの？何か問題でもおきた？」

「いや、問題はない。が、何でもそんなに軽快に走れるんだ？以前からSFに乗ってたのか？」

「SFの前身装着は今日が初めてよ。ここまで動けるのは、そうね……。才能かしら。」

「……。才能は認めざる負えないが、何だか認めたくない……。藍那の自分は天才だという言葉に唸る。

「まあ、難しく考えないで、いつも歩いているように歩くことを意識するといいわ。」

「私は目をつぶって歩いてみたら、すぐに感覚がつかめました。」

藍那と香奈子が2人に助言する。

「ありがとうございます。参考にさせていただきますね。」

佳乃は藍那と香奈子の後ろにいる人物に気付き、2人に礼を言いつて自分たちの訓練に戻った。

「仁科と西原。お前たちは特別メニューだ。ついてこい。」

藍那と香奈子は自分たちを呼ぶ声に振り向く。そこには、小久保が先ほどと違い教員用の初風を装着した状態で立っていた。

小久保の装着している初風は藍那たちが今装着している初風ようにスラスターを外していない。

小久保の初風は腰部スラスターユニットと肩部に浮遊しているスラスターユニット、それに背中にあるメインスラスターを装備している。肩部のスラスターユニットは重力制御による相対距離の固定によつて浮遊させている。

この重力制御による相対距離の固定は、機体に直接装備しているユニットと同じような強度を持つ。スラスターの燃料はワームホールによる燃料供給を行っている。(ワームホールは生物を通過させることはできないが、生物以外の有機物と無機物は何の干渉も距離も関係なく通過できる。そのため、SFやガルダニウムを使用している飛行機や船のといったものに、燃料タンクというものは必要なくなった。)「お前たち2人は筋がいい。例年であればまだ早いがお前たちには飛行訓練に移ってもらう。」

小久保の声はSFの歩行音や生徒の声でにぎやかになったグラウンドにもよく通り、小久保の声を聴いた生徒は全員藍那たちの方を向いた。

例年、SFの飛行訓練に入るには早くても1カ月は必要である。これは、歩行と走行、握力制御などの基礎的な技術を完全に習得しなくてはならない。そのため、たった1日もたたないうちに飛行訓練を行うというのは、異例中の異例である。

「飛行の難易度は走行の比ではない。いくらお前たちが天才的な才能を持っていても、そう簡単にはいかないだろう。覚悟しておけよ?」

藍那と香奈子は「はい。」と応え、歩行訓練を行っている他の生徒の

邪魔にならないよう小久保について歩き始めた。

藍那たちはメガフロートの地下に来ていた。

メガフロートの地下は3層に分かれている。

1層目はシャッター状の金属製の隔壁と太く頑丈な柱で分かれている。今いるこの区画は縦横50m 高さ15mあり、1つ1つの区画はそれなりに広い。隔壁を上げることによって、同じ造りになっている隣の区画と繋げることが可能である。これにより、この階層は倉庫兼SFの屋内訓練場として使われている。

2層目は主に食料プラントになっている。この学園で消費されている食料の多くは日本の本州、主に横浜などから海運で運ばれている。しかし、海運のみに依存するのはそれなりにリスクが伴う。よって、試験的ではあるがトウモロコシなどの穀物や緑黄色野菜などを人工光によって栽培していた。これにより、消費されている食料の約30%を賄うことに成功している。

3層目はこのメガフロートの心臓部ともいえる動力炉が置かれている。メガフロートではガルダニウムによる重力制御を利用した熱核融合炉を主動力として使用している。核融合炉とはウランやプルトニウムに代表される重い原子の原子核分裂反応を利用する核分裂炉に対し、水素やヘリウムといった軽い原子による核融合反応を利用しエネルギーを発生させるものである。

熱核融合炉はメガフロートをはじめとし、日本国内で多く使用されている。

動力源として熱核融合炉が使用されている理由として挙げられるのは、燃料の確保がとても簡単ということである。熱核融合炉で生産されているエネルギーはこの学園内のみで使用しきることができないほど膨大である。その為、海水を電気分解することによって水素と酸素とそれ以外に分解している。これによってメガフロートはエネルギーの自給自足を図り、少しずつであるが海の水質浄化にも貢献しているのである。それに加え、酸素は地下第2層の食料プラントやそれ以外の施設で有効活用されている。

藍那と香奈子は地下第1層にSFを装着した状態で待機していた。シャッター状の隔壁は上げられ縦横が250mの空間が作られており、SFを装着しているにもかかわらず自分達が小さくなってしまったのではないかという錯覚に陥る。

2人が装着しているSFは小久保のSFと同じく、腰部と肩部にスラスターユニットと背中にメインスラスターが装備されている。

「2人とも、1年生には早すぎるが、先ほども言ったが飛行訓練を行う。まずはスラスターを一切使わない、重力制御のみでの飛行だ。私が手本を見せる。」

小久保はフルフェイスのヘルメットのような物を被り、ゆつくりと2mほど浮いた。

「これが、重力制御による浮遊だ。」

小久保は藍那たちに説明をしながら左右へ並行移動や垂直移動などを見せる。

「この浮遊がSFでの飛行の基礎になる。まあ、難しく考えなくてもいい。姿勢制御や重力制御といった人間では難しいことは、SFの方^{ハード}でやってくれる。さあ、お前たちもやってみろ。」

小久保の指示を受け、藍那と香奈子は小久保と同じようにヘルメットのような物を被る。

ヘルメットの中は真っ暗で何も見えない。しかし、被った瞬間『網膜投影開始』という文字が見え、一瞬まぶしさを感じるとヘルメットを被る前と同じ視界になった。

「網膜投影はうまくいったようだな。このヘルメットにはズーム機能はもちろん、暗視とサーモ機能、そして通信機能も付いている優れものだ。それじゃあ、浮遊する練習を始めてくれ。」

藍那と香奈子は小久保の号令を受け、ゆつくりと浮き上がる。2mほど浮くと、そのまま水平移動や垂直移動を始めた。

その姿はともに危なげなく、既に浮遊するという感覚をつかんでいるかのようだった。

そんな2人に小久保は素直に感心する。

「ほー……。なかなか筋がいいじゃないか。2人ともどこかでSFの

シミュレーションでもやったことがあるのか？」

「いえ、私はやってことはないです。でも、以前友達の家でさせてもらったVRゲームが空を自由に飛び回るというものだったので、その感覚に似ていると思います。」

香奈子は浮いたままゆっくりと右に移動しながら応える。

VRゲームは2020年頃から広く普及し始めた。アミューズメント施設などに行かなくても、自宅で疑似体験できるということになり、人気を博した。

現在では視覚と聴覚だけでなく一部の触覚までも再現でき、VRゲームは若者だけでなく年配者にも人気のコンテンツとなっていた。

小久保は香奈子がVRゲームによってある程度感覚をつかめているという事に納得する。

「私は父に数回シミュレーションをやらされました。」

藍那も上方向への浮遊を続けながら答えた。

小久保は藍那の言葉に違和感を覚える。先ほど自分で冗談のつもりで言ったが、SFのシミュレーションは軍の関係者しか触ることができない。第一、SFに関する事柄の多くは国家機密になっている場合が多く、民間人の身近なものではないのだ。

ここで小久保は藍那の苗字が『仁科』であることに気が付いた。

「仁科。まさかと思うが、お前の親御さんは仁科正純国防大臣ではないよな?」

小久保は半ば恐る恐るといった様子で藍那に問う。

「そうですよ。私は仁科正純の養子です。」

「なるほど、これで納得がいった。SFのシミュレーションができるとは何者だと思ったが、国防大臣の娘さんなら納得だ。」

小久保は疑問が解けたことに満足する。

「このことを明かすと私を特別扱いする人がいますけど、できればやめてほしいです。」

「もちろんだ。ほかの生徒と同じように厳しくいくから覚悟しておけよ?」

藍那と香奈子は浮遊訓練を続けた。

約20分が経過し、小久保は2人が次のステップであるスラスターを使用しての飛行訓練に移っても問題ないと思っていた。

実際、藍那と香奈子は2人とも完全に浮遊する感覚を掴んでいる。小久保はそんな2人を見てニヤツと笑い

「2人とも、飛行訓練を試してみないか？」

小久保は2人に誘うような口調で問う。

「やりたいです!!」

香奈子は目を輝かせながら即答した。

「香奈子と同じく、私もやりたいです。」

藍那も香奈子へ続く。

「よし！2人ともスラスターの調整は分かるな？飛行は他人から教えられることは少ない。ただ、慣れるということだ。時間はまだ十分ある。ひたすら飛んで慣れる！」

ここまで嬉々として話していた小久保の声が小さくなる。

「ただ……。この空間ではSFを全力で飛ばすには狭すぎる。壁に激突したくなければ、スラスターの出力は絞っておけよ？」

「はい！」

藍那と香奈子は小久保へ返事を返し、背中のメインスラスターと肩部と腰部の補助スラスターに火を入れた。各部スラスターは「ゴォーゴォー」という空気を振動させ唸り声を上げる。

現在はSFのエネルギーシールドは展開しているが、重力制御によるパイロットへのGのカットと疑似的に空気摩擦をゼロにはしていない。

そのため、身体は完成の法則によって、後ろに押さえつけられるような感覚を感じる。

それと同時に藍那と香奈子は瞬く間に加速する。

SFが自動的に姿勢制御を行い、2人は前傾姿勢をとったまま200mの距離を飛行し旋回した。それは、まるで自分の背中に翼が生えたような錯覚にとらわれてしまうような滑らかな飛行で、始めは大きく感じていたこの空間では狭くもつと広い「空」を飛びたいという気持ちにとらわれていた。

藍那と香奈子がいなくなった後は1組の担任の藤林律香ふじばやしりつかと2組の担任の小鳥遊碧の両名監督のもと、基礎訓練が引き続き行われていた。

藤林は小鳥遊と対照的な雰囲気を持っている。小鳥遊はおっとりとした顔立ちをしており、どちらかというところと可愛いといった感じである。それに対し、藤林はメリハリがありキリツとしたルックスをしており、スタイルもよい。そのため、美しくよく仕事ができるキャリアウーマンといった感じである。

これにより、藤林は男女問わず生徒たちから人気がある。

2人はともにこのSF学園の出身者である。そのため、SFを扱うことができ、実習の監督をするなど簡単なことであった。

ちなみに、実力は小鳥遊の方が上である。

しかし、生徒からの人気というのはこのような場においては顕著に表れる。

藤林の周りには教えを乞う生徒で人垣ができているが、小鳥遊の周りには数人しかいない。

「SFの腕は律香より私の方が上なのに……。」

小鳥遊はため息とともに少し悲しそうにぼやく。

「大丈夫だって〜！ 私たちは先生派だからさ〜。」

小鳥遊の隣にいた恵利が何とも言えない笑顔で励ましている。

今回の実習は基本的にルームメイトであるペアと訓練しなくてはならないが、恵利のペアである八月ほづみ一日みさき美咲は熱狂的な藤林のファンであるため、恵利を放置して1人で行ってしまっている。

「そうですよ！ 少なくとも私達は小鳥遊のことを尊敬しています！」

恵利に続いて静もフォローに入る。

「七海もそうよね!？」

「う、うん……。私も小鳥遊先生のごことは好きだよ。」

いきなり静に話題を振られた七海は少々困惑したが、肯定の意味で頷く。

「私と佳乃はクラスが違いますが、先生にご指導願いたく思います。よろしく願います。」

静に続き刀華が頭を下げ、それに合わせて佳乃も頭を下げる。

「あなた達……。わかったわ！頑張って指導するから、期待してね！」感動している小鳥遊の声音に力が入る。

この5人は小鳥遊指導の下で藤林の所に比べメキメキと上達した。これは人数が少ないということに加え、小鳥遊の指導が上手くこの5人にあっていたということがある。

昼を迎えるまでに5人全員が握力制御と歩行、走行を習得し、次回は飛行訓練に移ることが出来るまでになった。

木曜日の昼からは石塚と岸の下で射撃戦闘訓練が行われ、これも1組と2組が合同で行われる。

今回の訓練が1回目ということもあり、藍那たち2組には馴染みのある第3特別訓練場で行われることとなった。

訓練内容としては1組を1班とし、前回この訓練場を使用した時のように模擬戦闘を行う。その後には模擬戦闘の録画を観ながら反省を行う。

5限目の開始時刻までに第3特別訓練場の講義室へ集合しておく必要がある、午前中の操縦訓練の後片付けを早く済ませないと昼食の時間がどんどん減っていつてしまう。

今回は初めてであった為、説明を受けつつということもありかなり時間が経ってしまった。

このため、皆食堂へ行く時間もなく購買へ行くしかなく、最寄りの購買は1組と2組の生徒で大混雑となった。

中には「今日の日替わり定食、楽しみにしてたのに。」やら「こんなに急がないといけないなら、先に買っておけばよかった……。」などといった声が聞こえたが、藍那たち早朝のトレーニングを行っていた4人は先に昼食を購入していたためこの混雑を回避できた。

藍那たち朝の面子はSFスーツから運動着に着替え、第3特別訓練場の講義室に先に来て昼食を取っていた。

「それにしても、藍那と香奈子はすごいなあ……。今回で飛行訓練ま

「でやったんでしょ？」

刀華がコッペパンを食べながら藍那と香奈子へ話しかける。

「そんなことないですよ。私なんてこれ以外はダメダメですし。」
香奈子が照れながら応える。

「この学園に入学できている時点で、他のことがダメダメということはないと思うわよ？ 実際、私たちの入試の倍率って45倍超えだったらしいですよ。」

「えっ！ そうだったんですか!?!」

佳乃の言葉に香奈子は心底驚く。

「知らなかったの？ ここには入れている時点で、みんな世間一般でいう天才というやつよ？」

いざ言われてみると恥ずかしい事を藍那に言われ、ほかの三人は苦笑いした。

他愛のない話をしながら昼食を摂っていると午後からの授業が始まる時間が来た。

時間ぎりぎりに入ってくる生徒もいたが、何とか遅刻せずに全員集合出来た。

授業開始時間とほぼ同時に岸と石塚が教室に入ってきた。

「全員集まってるな？ 今日やることは予め聞いていると思うが、改めて説明する。説明は石塚がしてくれるから、よく聞くように。」

「えっ！ 俺がくくあ？」

「どうやら予め話し合っていなかったらしく、岸のむちゃぶりに石塚がたじろぐ。」

「まあ、いいや。今日は前回と同じく模擬戦をやってもらおう。その録画を見ながら授業するから、皆真剣にやるように。ああ、そうだ。今回も仁科は参加するな。お前が入ると教材にならねーからな。1人少ない分、2組は頑張れよ〜。」

石塚の言葉を受け、2組の全員が納得という表情をする。しかし、藍那の現実離れした戦闘能力を知らない1組の生徒のうち、数名がムツとする。

それを感じ取った岸がすかさずフォローを入れる。

「これは、仁科を特別扱いしてのことじゃない。仁科は前回の模擬戦闘の時、2組の全員を1人でやってしまったんだ。この意味が分かるか？少し前に初めて銃を握ったようなひよっこじゃあ、仁科の相手にならないんだ。」

岸の言葉を受け、刀華を含む2組の全員が驚く。これを受け、先程ムツとした生徒が何とも言えない顔になる。

その時、藍那が立ち上がった。

「先生。私だけ参加しないというのは、私としても避けたいと思います。クラスのメンバーでの活動ですので、私も参加したく思います。」
「私も仁科さんに賛成です。仁科さんだけを外した場合、最悪クラス内での孤立を生む可能性があります。」

藍那の言葉を委員長である静が賛成する。

静の発言を受け2組の全員が藍那の模擬戦参加を支持したため、藍那には銃を持たせない状態で開始するという条件で参加が認められた。

この条件によって藍那は戦闘に参加しないなどありえないと考えていた岸と石塚の予感は的中し、藍那は1組の生徒の銃を奪い結果的に戦闘へ参加した。

その結果、またしても藍那抜きで再度模擬戦闘を行うという処置をとることになってしまい、石塚は深いため息をついた。

昼からの実習は5、6、7時限を使用しているため、この強化を終えたとすぐに放課後となる。

普通であれば自分の時間や友人との時間を楽しむべく、今着ている運動着から着替えるために自室に戻るだろう。

しかし、今日は違った。

1組の生徒を中心に藍那の周りに集まっていた。

集まっている生徒は皆無言で藍那を囲むようになり、はたから見れば入りの生徒が大勢にいじめられている現場に見えるだろう。

しかし、本当は藍那の目つきの悪さに怖気づき、誰も話しかけられ

ず様子を窺っている状態だった。

そんな時「早くいかないと、風紀委員の仕事に遅れるぞ?」と刀華が藍那に話しかけた。

それに藍那も応えてその場を立ち去ろうとした時「ちよつと待って!」と藍那を1組の誰かが呼び止めた。

「あなたの技術を少しでいいから私達に教えてくれないかしら?」

誰かはわからないが、1組の生徒のだれかが藍那に尋ねる。

それを待っていたように2組の生徒もこの人だかりに参加し、自分たちにも教えてほしいとアピールする。

「それはいいけれど、早朝と放課後以外は時間的余裕がないから無理よ?」

「はい。それでもかまいません。それで、早朝は何時から何ですか?」
間髪入れずに回答が返ってくる。

藍那は少し考える。

「一応、5時半を目途にトレーニングをやっているから、その時間なら問題ないわ。」

「分かりました!!」

必要なことを聞いたことに満足したのか、藍那を囲んでいた人垣は消えた。

「いいのか? あんな安請け合いして・・・。」

刀華が心配そうに言うてくる。

「問題ないと思うわ。誰も1人1人個別に教えるなんて言っていないだし、皆同じメニューを佳奈してもらおう予定よ。」

「それならいいんだが・・・。」

刀華は心配そうにしながら、風紀委員の仕事をすべく体育館付近へ足を向けた。

それに続く形で藍那も体育館付近へ向かった。

藍那と刀華は基本的にペアで仕事をするように小鳥遊から言われている。

体育館付近に着いたとき、見慣れた光景とみ言える喧嘩寸前の状態になっていた。

藍那はダメもとでテンプレート化した警告をした。それに対し、険悪な空気を放っていた生徒たちが藍那を威嚇するように顔を向けた。

その瞬間、顔の血の気が引き血相を変えて逃げ出した。

藍那と刀華は何が起こったのか分からず顔を見合わせる。

後でわかることだが、藍那と刀華は一部の生徒から悪魔や鬼などと呼ばれ、恐れられていた。だが、今はそんなこと知る由もない。

今日の仕事は2人が行く先々では喧嘩や揉め事がなりを潜め、とても平和なものとなったのであった。

藍那と香奈子は昨日と同じく朝5時に起床し、トレーニングへ向かった。

昨日は刀華と佳乃がグラウンドで待っていた。しかし、今日は40人ほどがおおり、その多くは1組と2組二組の生徒で各々ストレッチをしている。

「おーい！藍那ー！っ！こっちだーっ！」

どこからか藍那を呼ぶ声が聞こえ、目を凝らすと人ごみの中で手を振っている刀華を発見した。

「この人数、どうしたの？」

藍那と香奈子が手を振っていた刀華のもとへ行つて尋ねる。

「私は一切誘ってないから、藍那が昨日言ったことが原因じゃない？」

刀華の言葉を受け、藍那は少し考える。

確かに自分が「5時半を目途にトレーニングをやっているから、その時間なら問題ない。」と言った記憶があり、それが原因なら完全に藍那のせいである。

「まさか本当に来るなんて予想外ね……。でも、本当に私が原因なのかしら？」

「私に聞かれても知りませんよ。」

藍那がいきなり香奈子へ話を振り、話を振られるのを予想していたのか香奈子が藍那にツツコミを入れる。

十中八九ここに人が集まっているのは藍那が原因だが、もし間違っていた時のことを考え藍那たちは確認をとってみることにした。

「あの一。すみません、皆さん。私が昨日の「早朝なら指導することが出る」ということで集まっていた方は、こちらに集まってください。」

藍那は集まっている全員に聞こえる声量で声を掛ける。

これを受け、グラウンドに集まっている全員が藍那を囲むように集合した。

藍那はかすかな頭痛を覚え、「やっぱり……。」と漏らしながら額

に手を当てる。

しかし、せつかく集まってもらったにもかかわらず、何も教えられないでは申し訳ない。ということ、ここにいる全員で昨日やろうとしていたメニユーを行うことにした。

予想通りとっては何だが、30分を迎えるころにはほとんどの者がリタイアしへばってしまっていた。

しかし、明日以降の朝のトレーニングにも参加するとのことであり、噂などが広がり回を重ねるごとに人数が増えていくこととなるのであった。

金曜日の午前は昨日と同じくSFの操縦訓練の予定である。これも1組と2組が合同で行われる。

しかし、今日は第2グラウンドに集合ではなかった。

駐機場の隣の海側に飛行場がある。

飛行場といっても、空港のような立派な滑走路があるわけではない。

全長約330m全幅約77mの面積が滑走路と管制塔に割り振られており、見た目としてはメガフロートに大型空母がくっついているといった印象を受ける。

この滑走路には正規空母のようにカタパルトや着艦用のアレステイニング・ワイヤーが設備としては設置されている。

しかし、現代においてはガルダニウムによる重力制御によって垂直離着陸が可能になっており、残念ながらこれらの設備は使われていない。

何故、このSF学園にこのような滑走路があるのかというと、学園周辺の警戒任務を行うためである。

ガルダニウムの主な産出国は日本と中国の一部を中心とした狭い地域であり、その中でも良質なガルダニウムが多く取れる国は日本であった。

もちろん、ガルダニウムは火山のある国なら多くはないがとれる場

合もある。それでも、ヨーロッパ、北・南アメリカ、アフリカ、オーストラリアの各地域で採れるガルドニウムの量は、すべて合わせても日本に遠く及ばないほどである。

SFのコアに使用されるガルドニウムは良質かつ純度の高いものが使用され、良質なもののほど重宝され、大多数の国はガルドニウムを日本や中国からの輸入に頼っている状態である。

そのため、SFのコアは高値で取引され、テロリストに狙われる場合もある。

もちろんSF学園が保有しているSFにもコアが使用されており、このコアもテロリストに狙われる可能性がある。

警戒任務とは、海空からやって来るであろう敵に対し上空から圧力をかける意味合いを持ち、場合によっては攻撃を行い敵から学園を守るというのが任務である。

このためには、ただの偵察機では任務が務まらない。

そのため、SF学園には2機の戦闘機が配備されている。

朝練を終え、昨日と同じくSHRは行わず飛行場に1組と2組の生徒が集合していた。

隣にいる香奈子を含む朝練を行った生徒の多くは、1日の体力のすべてを使い果たしてしまったようにフラフラであり、小鳥遊や藤林が不思議そうな顔で見ている。

(やっぱり、初めてのメニューにしてはハード過ぎたかしら・・・)

藍那は表情を変えずに少々反省する。

しかし、藍那にトレーニングメニューを優しくするつもりは全くない。

リタイアする者はそれまでであり、自分についてこられるものだけと真剣トレーニングしようと考えていた。

今は本当にやる気があるかそうでないかをふるいにかけている段階であるのだ。

そんなことを考えていると格納庫ハンガーからパイロットと思われる2人が歩いてきた。

1人はがっちりとした体つきをしている白髪の少し混じった黒髪

の男性、もう1人は色の薄い大きめのサングラスをかけた栗色の髪をした男性である。

「おお、全員揃ってるか？俺はこの学園でパイロットをしているかんだてつお神田哲男だ。それで、こいつが——」

「栗原博義だ。くりはらひろよしよろしく。」

藍那は短い挨拶であったが、この2人の性格が何となくだが掴めた。

神田はノリはいいが、熱い男という印象である。栗原は冷静沈着と云ったところである。

「俺たち2人は共に操縦経験1000時間を超える超ベテランだ。今日は俺たちの後ろに乗って、空を飛ぶ感覚っていうのを体験してもらう。」

そう、今日は体験と称し、戦闘機の後ろに生徒を乗せ飛び回るといふドS科目である。

神田の言葉を受け、ほとんどの生徒の顔が引きつる。

「まあ、さつきも言ったが、俺達は超ベテランだ。大船に乗った気持ちでいればいいさ。」

神田は「ハハハハハッ」と笑いながら生徒の緊張を緩和させるために言葉をつづけた。

「神田も俺も腕は確かだ。後部座席に荷物みたいになつて乗つていればすぐに終わるさ。まあ、座席では吐かないでくれると助かるな…。後片付けが面倒だからな。」

栗原も冗談を交えつつ緊張をとろうとしてくれる。が、冗談のセンスはいまいちのようだ。

「全員を飛ばさないといけないから、時間はあんまりないぞ？付いてきてくれ。」

神田と栗原を先頭に、戦闘機が収められているハンガーに向かって移動を始めた。

生徒をハンガー前に待機させ、牽引車がハンガー内の戦闘機を牽引して出てきた。

その戦闘機を見て七海は驚きの声を上げた。

佐々木七海はオタクである。中でも戦闘機を中心とした飛行機のオタクである。

数ある戦闘機の中でも七海の1番好きな戦闘機がF-4EJファントムIIであった。

そんな彼女の前に姿を現した戦闘機はまさしくF-4EJである。それも2機。これを生で見ることが初めての七海は、一気にテンションのメーターを振り切る。

「なんで!? どうして!? なんでここにファントムがいるの!?!」

興奮を抑えられない七海を見て隣にいた静が若干引いている。

七海は物静かな印象であったため、いつものギャップに静がついていけないのだ。

「お? 嬢ちゃん、^{ファントム}こいつを知ってるのかい?」

1人興奮している七海を見て、神田が左手の親指でファントムを差しながら話しかける。

「はい! 私は飛行機の中で1番ファントムが好きなんです!!」

「おお、そうか! だが、こいつの外見はファントムだが中身は最新だぜ? なんせこいつは——」

「おい、神田。授業中だぞ?」

七海のテンションに引つ張られたのか、熱くなりかけた神田を栗原が止める。

「ああ、そうだな。嬢ちゃんとはまたゆっくり話したいもんだ。」

神田は七海にこう告げると、仕事モードなのか真剣な顔つきになった。

「今から^{ファントム}こいつの後部座席に乗ってもらって、飛行体験してもらおう。それじゃあ、パイロットスーツを着て再集合してくれ。」

栗原の号令を受け、生徒が一斉に動き出した。

七海は飛行体験が楽しみなのか、満面の笑みで移動していた。

パイロットスーツに身を包み、全員が再集合したのは約30分後だった。

「よし、全員揃ったな。今、お前たちに着てもらっているパイロットスーツに番号が割り振られているだろ? その番号が若い順に乗って

もらう。まずは1番と2番の奴だな。前に出て来い。」

神田の号令を受け、右胸に1と2と入った1組の生徒が覚悟を決めた顔で前が出る。

ファントムの後部座席に乗せられ簡単な注意と説明を受け、数分後には離陸準備入っていた。

「こちら神田、離陸準備完了。発進許可を待つ。」

「こちら栗原、同じく離陸準備完了。発進許可を待つ。」

神田、栗原が管制塔へ離陸許可を求める。

「こちら管制塔。離陸を許可します。お気を付けて。」

管制塔の許可を受け、2機のファントムがフワツと垂直に浮き上がる。

F-35B ライトニングIIのように垂直離着陸できる戦闘機は存在する。しかし、ファントムはそんなことはできない。はずである。

SF学園に配備されているファントムには、ガルダニウムを使用した重力制御ユニットを搭載している。これにより、垂直離着陸が可能となっている。

それだけではない、エンジンやレーダーなども最新の物が積まれている。

よって、この学園のファントムはファントムであって、ファントムでないものとなっているのだ。

フワツと浮き上がったファントムは轟音を響かせ、あっという間に水平線のかなたに消えていった。

数分後、ファントムが戻ってきて、発進の時と同じく滑走路の上空に帰ってきた。上空で停止して左のエンジンを切り、ゆっくりと降りてきた。

これは重力制御によって期待にかかる空気摩擦を増加させることよって、期待を上空で停止させているのだ。

後部座席のキャノピーが開くと転がり落ちるように生徒が出てきた。左のエンジンを切ったのは、降りる際にエンジンに吸い込まれるという事故を防ぐためである。

出てきた生徒は青い顔をしており、「次の人、どうぞ……。」と言つて力尽きた。

八丈島から東に約130 kmの海上に、大型のタンカー船が停泊していた。

日本は貿易大国であり毎日多くの外国船が往来しているため、この海域に大型のタンカー船が停泊していても何ら不思議はない。

しかし、この大型タンカーは偽装船であった。

この船は軍用の輸送船を大型のタンカー船に見えるように、外部パーツを取り付けて民間船に扮しているのだ。

船内の作戦司令部らしき1室は薄暗く、正面にある大型のモニターと隊員が作業するモニターのみが唯一の光源になっている。

いくつもあるモニターの前に隊員が座っており、各々手を動かしている。

そんな者たちの中程の位置に、眼鏡をかけた金髪男性が腕を組んで立っていた。彼は30代半ばといった様子で中肉中背である。恐らく彼が指揮官であり、ほかの者たちはこの男の部下なのだろう。

「目標まで距離約130。ここからであれば、怪しまれることはないかと。」

モニターを見ていた隊員の1人が、指揮官に報告する。

「よし。では、小型偵察用全方位高感度カメラ搭載ドローンを出せ。絶対に気づかれてはならん。我らは秘匿作戦部隊なのだから……。」

指揮官の男がモニターを見ている隊員に指示を出す。

ハレスは

High sensitivity cameras mounted

All range

Reconnaissance use direction

Small Drone

の略称である。

ハレスは特殊なプロペラに特殊な加工を施しており、特殊な塗料によってレーダーにも映らない。それに加えて、大きさがバスケットボールサイズであり、肉眼でも発見が難しく偵察能力と隠密能力を兼ね備えている。

今回、彼らに課せられた任務はSF学園が保有しているSFのコアの奪取の為の偵察である。

そのため、発見されることはおろか、感づかれてもならない。

(ここから130km。どうか、見つからずに任務を全うしてくれ。)

指揮官は真っ直ぐSF学園の方角へ飛んで行くハレスをモニター越し見ながら、無事に作戦が成功することを神に祈った。

飛行体験の科目が約半分終わった。

日陰でうずくまっている者、気分が悪くなり医務室へ運ばれていた者など、この科目によってファントムによる飛行体験によって、犠牲者が増えていつている。

「次、35番と36番。交代だ。前へ出てこい。」

藍那の番号は35番であり、ようやく順番が回ってきたようだ。

「あ、藍那さん。頑張ってください・・・。」

横にいる香奈子が震えながらエールを送ってくれた。

香奈子は飛行体験の被害者を見てからというもの、ずっとこの調子である。

「ええ、行ってくるわ。」

藍那は短く返し、ファントムのもとへ歩き出した。

「おーようやく嬢ちゃんか。」

神田は七海の姿を確認すると、直ぐに声を掛けた。

「はいーよろしくお願ひしますー！」

七海は神田と栗原にお辞儀する。藍那もそれに続き一礼した。

「おう、任せとけー！よしーそれじゃあ、若番が俺、そうじゃない方は栗原だな。よし、乗り込むぞ。」

「はいー！」

神田の指示を受け、後部座席に乗り込んだ。

「シートベルトはちゃんと締まったか？これがちゃんと締まってないと最悪命にかかわるから、問題があったら今すぐ言えよ。それと――」

藍那は後部座席に座り、シートベルトをきつく締め、ヘルメットを被るりマスクを装着する。

藍那の番号は35番であったため、乗る機体は神田のものだ。

横を見ると、自分と同じように七海も説明を受けている。先ほどまで楽しみでたまらないといった様子で、ソワソワしていたのが？のよううに表情が緊張でガチガチになっている。

藍那も正直緊張している。

戦闘機の後部座席に搭乗するなど、初めての経験であり緊張するのは当然である。

「よし、肩の力を抜いてリラックスしろよ？」

神田は藍那の緊張をほぐすため、ニコツと笑ってくれた。

「はい。」

神田のおかげで少しばかり気が楽になった。

前の座席に神田と栗原が乗り込み、キャノピーが降りる。

「こちら神田、離陸準備完了。発進許可を待つ。」

『こちら栗原、離陸準備完了。同じく発進許可を待つ。』

神田と無線越しの栗原の声が聞こえ、少しすると管制塔より離陸許可が下り全身に微かな浮遊感を感じた。

藍那はこの感覚を昨日も感じた。これは、SFでの浮遊訓練の際に感じた感覚と似ており、離陸したということを確認した。

その瞬間、エンジンが轟音をあげ、機体が一気に加速し藍那は座席にはりつけにされるようなGに襲われた。

神田は操縦桿をいきなり右に倒し、右に急旋回する。

右への急旋回が終わったと思った瞬間、次は左に急旋回を行う。

藍那は身体にかかる凄まじいGに必死に耐え、奥歯をかみしめる。

「どうだ？楽しいか？」

神田は後部座席の藍那に楽しげに声をかけてきた。それを受け、藍

那は驚愕する。

(こんなGに耐えながら、こんなに余裕があるなんて……)

「それじゃあ、とっておきに行くぞ?!」

藍那は神田の信じられない言葉を聞き、これ以上の飛行をされるのだと覚悟を決めた。

「イヤホオオオオオウ!!!」

神田は垂直に急上昇しながら、右ロールを4＋1／4回転を行って空高く抜ける。

これは、バーティカル・クライム・ロールと呼ばれるもので、これによってかかるGは先ほどに体験したGと比べ物にならなかった。

「どうだ? 凄いだろう?」

バーティカル・クライム・ロールを終え、やっと普通の呼吸が出来るようになった藍那に神田は自慢をする子供のような声で話しかけてきた。

「ここまで凄まじいとは思いませんでした。でも……、空を自由に飛び回るなんて、こんなに気持ちいいとは思いませんでした!」

藍那は今自分の心にある気持ちを素直に述べた。

それを受け、神田は満足げに笑う。

「それは残念だな。今日はこれでお終いだ。」

藍那はもつと飛んでいたいと思ったが、これはあくまで授業の一環であり後が使えていることを思い出す

藍那は残念に思いながら、キャノピー越しに右の空を見る。

そこには自分の乗っているファントムと同じく、優雅飛んでいる栗原の機体が見えた。

気づくはずがないと思いつつも手を振ってみる。

すると、後部座席に乗っている七海が手を振り返してくれた。どうやら、七海もこちらを見ていたのだろう。

何事もなく飛行体験が終了すると思ったその時、隣を飛んでいる栗原機の前部キャノピーが粉々に砕け散った。

七海の乗っている栗原機も、藍那たちと同じくバーティカル・クラ
イム・ロールなどの飛行を体験し、帰路についていた。

(本当にゲームの中で見た景色と同じなんだ……)

七海はこんなことを思っていた。

「楽しかったか？本当はもつと飛んでやりたいんだが、今日は残念な
がらここまでだ。」

栗原は七海へ声を掛ける。

「はい！とても楽しかったです。今回は短時間のフライトでしたが、
とても満足です！」

七海は興奮を隠すことが出来ないといった様子です。

「ハハハ。そうか。そいつは良かった。また、俺たちを訪ねてくると
いい。飛ばしてやることはできないが、座席に乗せてやるぐらいはで
きるからな。」

「はい！喜んで！」

栗原は七海との短い会話を交わし、神田機と並走する。

「ん？後ろに乗ってるやつが手を振ってるな。振り返してやるとい
い。」

七海は「はい。」と返事をし、後部座席に乗っている藍那に手を振り
返した。

(はぁ……。楽しい時間はすぐに過ぎてしまうものなのね……)

七海はため息を一つついて前を向いた。

その時、栗原の乗っている前部座席のキャノピーに何か衝突し、
粉々に碎け散った。

「おい！栗原っ！大丈夫か?! 応答しろ！おい!!」

神田は栗原機に起ったことに対し、混乱していた。

しかし、神田の冷静な部分が緊急事態発生時の対処をとらせた。

「エマーゼンシー!! 管制塔！こちら神田。並走していた栗原機に何
かが衝突した。それにより、前部キャノピーが吹っ飛んだ。栗原に何
度か呼びかけたが応答がない。どうすればいい?!」

「こちら管制塔。こちらからも誘導を試みるが、そちらでも試みてほしい。」

神田は「了解。」と応え、栗原機の後部座席に無線をつないだ。

「おい！嬢ちゃん、大丈夫か?! 怪我はないか?!」

「は、はい！私は大丈夫です。ですが・・・」

「いいか、よく聞くんのだ。フアントムそいは後部座席からでも操縦が出来る。俺が横から指示を出すから、何とか頑張ってくれ。」

「は、はい。やってみます。」

七海が戦闘機を好きになるきっかけとなったゲームは、実際の戦闘機の操縦を忠実に再現したものだだった。

いじめられていた自分が逃げ道としていたものは、インターネットとゲームであった。

そのため、大好きな戦闘機であるフアントムは、何度も何度も何度も操縦してきた。

七海は「ふーっ」と深い深呼吸をし、操縦桿を握り、下がりかけていた機首を元に戻す。

「落ち着いて操縦するんだ。お前ならできる。」

「はい・・・。」

七海は正直一杯一杯であったが、何とか声を絞り出し返事を返す。

「いいか？速度をできる限り落とし、高度を下げるんだ。」

「はい・・・。やってみます。」

七海は神田の指示に従って機体を少しずつ減速させ、高度を落とす。

(やっぱり、ゲームとは全く違う・・・。ゲームだったら落ちても死なない・・・。けど、これは現実・・・。)

最悪のことを考えると吐き気がこみあげ、口の中に酸っぱさが広がる

(落ち着くだよ、私！何千回も操縦したじゃない！私はできるんだ!! 生きて帰るんだ!!)

弱音を吐きそうになる自分を必死で鼓舞し、自分ができるんだと言いつつ聞かせる。

仮に死んでしまおうとしても、何もせずに死にたくはない。ここで弱い自分を捨てるんだ！ずっと何かに怯えていた弱い過去の自分を捨てるんだ！

心の中で決意を固め、操縦桿を強く握りしめた。

管制塔は神田からの報告を受け、全員が慌ただしく動き回っていた。

何人もが頭を突き合わせ、情報交換と対処策などを話し合っている。

「2番機栗原機が返って来るまで、あとどれぐらいだ?！」

「重力制御ユニットは生きているのか?！」

「エンジン部に損傷は?!火災は発生していないのか?!」

ここでいくら話し合っても結論は見つからない。

そのため、神田へ一度連絡を取ることとなった。

神田と藍那は七海を励ましながら、隣の栗原機と同じ速度でゆっくりと飛行していた。

「こちら管制塔。神田さん聞こえますか?！」

「ああ、聞こえてる。どうした?何か問題でも発生したのか?！」

いきなりの管制塔からの通信を受け、神田は学園側に問題が発生したのではと心配する。

「いえ、こちらは大丈夫です。いくつかお聞きしたいことがあるのですが、大丈夫ですか?！」

「ああ、問題ない。何だ?！」

神田は質問を促す。

「はい。現在2番機に火災などは発生してはいないでしょうか?それと、重力制御ユニットが正常に機能しているかの確認をお願いしたく思います。」

「エンジンの異常や火災などは確認できない。だが、重力制御ユニットはこちらからでは確認できない。一度向こうに聞いてみるから、少し待ってください。」

「了解しました。」

神田は七海に回線を切り替える。

「嬢ちゃん、聞こえるか？」

「はい。聞こえます。」

「1つ確認してほしいことがあるんだが、いいか？」
「はい。」

「そつちの機体の重力制御ユニットが正常に機能しているかを確認してほしい。モニター画面の右上に『Gravity Control Unit (重力制御ユニット)』というアイコンがある。そのアイコンの色は何色だ？」
「……。赤色になっています。」

「まずいな……。」

神田は無線を管制塔へ切り替える。

「こちら神田、管制塔聞こえるか？」

「こちら管制塔。聞えています。」

神田の無線に管制塔からの返事はとても速かった。

「2番機に確認を取った。GCUはいかれっちまてるようだ。アレスティング・ワイヤーの準備を大急ぎで頼みたい。それと、緊急事態の意備え、消火班の手配も頼む。」

「分かりました。」

管制塔からの返事を聞き、神田は無線を七海へ切り替える。

「嬢ちゃん。落ち着いて聞いてくれ、その機体はGCUつまり、重力制御ユニットがいかれちまってる。今管制塔の方で着艦用のワイヤーを用意してもらってるから、嬢ちゃんはフックを使って着艦するんだ。」

「……。」

七海は神田の言葉を受け困惑する。

（そんなの……、絶対に無理……。だって、ワイヤーでの着艦って、プロのパイロットでも難しいって聞いたのに……。）

七海は一気に弱気になる。それは無理もない、プロのパイロットでもワイヤーでの着艦は、戦闘がなくても100回無事に着艦出来れば祝杯を挙げるほどらしい。

「……み、七海。落ち着いて。あなたは出来る事をするだけよ。」

藍那が不器用ながらに七海を励ます。

(そうだ……。今更何をビビッてるんだ。やらなかつたら確実に死ぬんだ。1%でも可能性があるなら、やるしかない!)

やるしかないという覚悟か、はたまた諦めか、七海は前を見る。

「やってみます! どうすればいいか教えてください!」

七海の力強い言葉を受け、神田も覚悟を決める。

「分かった。まず――」

2番機の緊急着艦の備え、滑走路では慌ただしく準備が行われていた。

火災に備えての消火班、けが人が出ている可能性を考慮した救護班、そして、最悪の事態を防ぐためのSFを装着した教員達がどんどん集まっており、滑走路は物々しい空気に包まれていた。

生徒は一旦管制塔の1階の会議スペースに集められていた。

この会議スペースは滑走路側に大きな窓があるため、滑走路上で何が行われているのかが見ることができた。

この会議スペースへ引率してくれた事務員は必死に「これは避難訓練だ。」と説明しているが、それに騙されるほど生徒はバカではない。

(小鳥遊・藤林の2人はSFを装着し、滑走路で待機しているため事務員が引率した。)

「事務員さん、上空で何があったんですか? これは、避難訓練などではなく完全に避難ですよね? この慌てようだと、飛行機が緊急着艦でもするんですか?」

静は事務員に詰め寄り、質問攻めにする。

事務員はもうこれ以上ごまかしきれないと諦める。

「ええ、私も詳しくは分からないんだけど、どうもこの^{SF学園}飛行機が緊急着艦するらしいの……。」

事務員は混乱を起こさないように、静に聞こえるだけの声量で答える。

しかし、近くにいた香奈子に聞こえてしまっていた。

「それって飛行機事故つてことですよね!? 藍那さんたちは無事なんで

すか?!」

香奈子は血相を変え事務員へ詰め寄る。

その時、滑走路にアラーム音が鳴り響いた。

七海は神田の指示に従って滑走路ギリギリの高度を、機首を少し上げた状態で飛んでいた。

緊張のためかはたまた失敗に対する恐怖のためか、心臓はうるさいほどに脈打ち汗がとめどなく噴き出す。

操縦桿を握りしめている手は汗によってヌルヌルして気持ち悪い。しかし、そんなことを気にしている余裕はない。

ワームホールによる燃料供給（ガルダニウムの特性であるワームホールを用いた燃料供給技術により、燃料タンクを大幅に減らしている。）がストップしてしまっている今、翼部のタンクにある緊急時の予備燃料で飛んでいる。その燃料量はあくまで予備であり、残量を考えると1度しか着艦のチャンスはない。

恐らく自分の腕では、失敗すればどの道助からないだろう。つまり、真正銘1度きりの大勝負である。

もう目と鼻の先に滑走路が見える。

戦闘機の目と鼻の先など、それは一瞬である。

アレステイング・フックとランディングギアを下し、更に高度を下げる。

次の瞬間、機体が地面にたたきつけるような衝撃を感じた。

（ああ……。失敗だ……。私、ここで死ぬんだ……。）

七海はこの衝撃が着艦の失敗によって、滑走路に墜落したと思った。しかし、

「やったな、嬢ちゃん！成功だ！」

無線から自分を祝う神田の声が聞こえ、目を開ける。

目の前にはSFを装着した多くの教員達があり、皆歓喜に沸いている。

そこでようやく七海は着艦が成功したということを理解した。

2番機の後ろを飛んでいた神田と藍那は、七海の着艦成功に歓喜し胸をなでおろした。

しかし、心配なことがもう1つあった。

神田は大急ぎで自分の機体を着艦させ、エンジンを切る。そして、コックピットから飛び下り、2番機へ走った。

2番機の全部キャノピーは文字通り粉々になっており、無残な状態だったがエンジンに吸い込まれる可能性があるため、あまり近づくことができない。

「栗原ー！！返事をしろー！！」

神田は力一杯叫ぶ。

神田に少し遅れて救護班が到着し、SFを装着した教員がフロントムのエンジンを停止させるのを確認し、お急ぎで栗原を救出した。

キャノピーは無残に砕け散っていたが、救出された栗原には幸い目立った外傷はない。

しかし、意識が戻らないため、担架に乗せられ医務室へ運ばれていった。

栗原に続いて七海も教員お手を借り、コックピットから降りてきた。それに合わせて、2組の数名が七海のもとへ駆け寄る。

駆け寄った者たちは口々に賞賛やねぎらいの言葉をかける。

七海はクラスメイトの顔を見て緊張の糸が切れたのか、その場で膝をつき号泣した。

予想外の事故に見舞われ、まだ乗っていない生徒は後日に回され今日の日以上のフライトは中止となった。

破損した2番機のコックピットからぐちゃぐちゃになった金属製の物が見つかり、これが事故の直接の原因であると推測された。

意識を失っていた栗原は数時間後意識を取り戻し、命に別状はなかった。

栗原が意識を失っていた原因は、キャノピーの破損によって酸素マスクが破損。これにより、低酸素状態となって意識を失ったらしい。

栗原は数日間、検査入院ということになったが、今回は犠牲者が出なかったことが1番の幸運と言えた。

大型タンカーが全速力でSF学園から距離をとっていた。

それはハレスを使ってSF学園を偵察しようとしていた者たちである。

その様子は正に脱兎というにふさわしい程に大慌てだった。

SF学園へ到達するはるか遠くの海上で、突如ハレスが撃墜された。

今回の任務は学園側に気づかれることはおろか、感づかれてもならない。

しかし、ステルス性能に長けたハレスが、かなりの距離があつたSF学園発見されるとは考えにくい。

となると、予め自分たちの動きが何者かにつかまれていた可能性がある。

そうになると、SFのコアを奪取するという計画を延期または中止する必要がある。

薄暗い司令部の中で指揮官のジョシア・ホワイトは、冷や汗を流し続けて顔色は真つ蒼になっていた。

作戦の失敗を本部に報告する必要がある。

報告してしまうと自分や部下の進退はどうなるか。考えるだけで胃が痛くなる。しかし、自分は組織の中の歯車の1つでしかなく、報告しないなどという選択肢は自分にはない。

覚悟を決め、本部への回線をつなげる。

報告は無線ではなく、司令室内にある大モニターでテレビ通話のように行われる。

コール音が室内に響く。いつもはあまり気にならないほどの大きさの音にもかかわらず、今日はひとときわ大きく感じるさく思えるほどだ。

このまま通じなければいいのに、などと考えているとモニターに自分の上司の顔が映し出される。

「作戦終了にしてはいささか早いようだが、中間報告かね？それとも・・・。」

モニター越しの男は一切表情を崩さない。おそらく作戦を失敗し

たことにもう気づいているだろう。自分はこの男の下で長い間働いているため、驚異的な勘の鋭さを知っている。

気づいているにもかかわらず、表情が変わらないことに恐怖を覚える。

「はい……。ブレット室長……。大変申し上げにくいのですが、ハレスが何者かによって撃墜されました。本艦は作戦失敗とみなし、撤退行動に移っております。」

極度の緊張によって声がかすれそうになる。

「そう。」

モニター越しのブレットは作戦失敗の報告を聞いても、一切の動揺はない。まるで機械を相手にしているかのようだ。

ジョシアはますます恐怖を覚える。

「こつちで手を回して、面倒ごとにならないようしておくよ。君は上手く帰ってきてね。それと、一応、学園への強襲作戦は延期ということになったよ。これは、今回の作戦とは関係ないから、気にしなくていいよ。あと、強襲作戦の指揮は君に任せることになったから、今回の失敗を挽回してね。」

ジョシアは何かしらの処分を受けると覚悟をしていたため、肩透かしを食らった様な気持ちになる。

ジョシアはブレットの期待に応え、今回の失敗を挽回する意思を込め返事をしようとした時、

「今度失敗したら、わかってるよね？」

ブレットの顔が怒りに満ちたものとなり、モニターが真つ暗になる。

最後に見せたブレットの表情は、先ほどまでの無表情とのギャップとも合わさり悪魔のようにも感じられた。

(今後失敗は許されない……。)

ジョシアは手をついている手摺を強く握りしめた。

机の上に置かれた固定電が鳴る。

「はい……。ああ、あなたでしたか……。」

自身の名を名乗らず、会話を始める。

親しい間柄であれば、自身の名を名乗らないということもあるかもしれない。しかし、親しい者との通話にしてはよそよそしい。

『ああ、私だ。一応の確認だが、そつちに偵察用のドローンとか届いてない?』

固定電話の受話器を持っている男は偵察用ドローンと聞いて、昼前に起きた戦闘機の事故を思い出す。

確か、ぐちやぐちやになった金属製の物が見つかったと記憶している。

男は心の中で「あれか……。」と思う。

「はい。それかはわかりませんが、らしいものが発見されています。」

受話器の向こうの男、ブレットは深いため息をつく。

『やっぱりか……。悪いんだが、外部に漏れないように上手く処理してくれない?』

「はい！畏まりました！」

ブレットの言葉を受け、受話器を持つ男は即答する。

『そう。じゃあ、頼んだよ。』

短く用件のみを話したブレットが通話を切ったのか、受話器からはツーツーと音だけが鳴っている。

「外部に漏れないようにって、どうやって処理すれば……。」

男は座っている椅子の背もたれに体重を預け、天井を仰いだ。

予想外のアクシデントが発生したが、それはもう昨日の話。

休日にとなれば皆昨日の事故のことなど忘れたように羽を伸ばす。

そんな中、藍那と香奈子、刀華と佳乃は平日と同じように朝のトレーニングをした後、射撃訓練場に来ていた。

目的はもちろん射撃訓練である。

これは、刀華が藍那に剣術を教える代わりに、その他の戦闘技術を教えるという藍那の提案によるものである。

藍那は刀華と2人で特訓する予定でいたが、何故か香奈子と佳乃が2人についてきている。

射撃訓練場を使用するにあたって、監視員として教員がつく必要がある。そのため、藍那は予め岸に監視員を頼んでいた。

岸は快く監視員を引き受けてくれた。

そんな岸は現在、教員室でアイマスクと耳栓をして爆睡していた。

岸曰、「お前^{藍那}がいるんだったら、俺がいる意味はないだろ？射撃の腕だって一流なんだからな」とのことである。

実際、藍那は国からのライセンスを持っており、刀華達に教える分には問題ない。

それに、休日であるにもかかわらず、嫌な顔一つせず協力してくれた岸には感謝しなくてはならない。

射撃訓練場を借りているのは午前中いっぱいである為、あまり長い時間訓練できるわけではない。

それもあって刀華達3人は的へ向かって、銃の引き金を引いていた。

「柴田さんはリコイルの衝撃を肘で吸収する癖があるわね。それは今使っているオートマチックの銃にあまり適さないわ。どちらかというトリボルバー向きね。でも、オートマチックを使っていく予定なら、その癖は直した方がいいわね。」

藍那は佳乃の射撃を視的確なアドバイスをする。

「藍那さんでよろしかったですよ。私も苗字ではなく名前佳乃と

呼んでください。それと、アドバイスありがとうございます。リボルバーでしたっけ？今から試してみます。」

佳乃は藍那に言われたように、銃が保管されている棚にリボルバーを取りに行った。

「それにしても、撃ち方の癖から適した銃がわかるなんてね。やつぱり者じゃないね。私も撃ち方で相性ってわかる？」

そういう時刀華は的に向かって3発の銃弾を打つ。しかし、そのことごとくが的を外した。

それを見た藍那はため息をつき「まずは練習ね。」とだけ言った。刀華の横で香奈子はアサルトライフルを撃っていた。

香奈子はハンドガンを授業で藍那にある程度教わっていた。

そのため、今回はアサルトライフルを練習しようと予定していたのだ。

「アサルトライフルって難しいですね・・・。」

香奈子も見事に的を外している。

「香奈子も練習あるのみね。ちよつと貸してくれる？」

香奈子は藍那に持っているM4A1を渡す。

藍那は受け取ったM4A1を的へ向け構える。その動作は無駄な動きが一切なく、そのまま教本に乗せていいほどであった。

藍那はセレクターレバーをSEMI(セミオート)からAUTO(フルオート)へ切り替える。そして、短くトリガーを引き3発ずつ発射する。

撃った弾のことごとくが的の中心付近へ命中する。

藍那が1つのマガジンを撃ち尽くすころには、香奈子達3人は息のみ魅了されているようだった。

「香奈子は姿勢よく構え過ぎよ。こんな風に」藍那が銃を構えなおす。「ほんの少し背筋を丸め、両肩をすぼめるような意識をして構えるの。そうすれば自然と前傾姿勢になるわ。腰を少し落として膝を少し曲げて肩幅に足を開くの。そうすると、重心が下に落ちて自然と前傾姿勢になるわ。」

藍那はセレクターレバーをAOUTからSAFEへ切り替え、香奈

子へ返す。

「銃を構えてみて。構え方を修正していくから。」

「分かりました。」

香奈子は先程の藍那の姿勢をまねて銃を構える。

「そんな感じよ。そんな感じで重心を落とすの。ストックは肩の付け根部分にしつかりとあてて。そうすれば、構えた時の安定性が向上して、弾の軌道がぶれにくくなるわ。後は頬付けね。」

「藍那さん。勉強不足で申し訳ないのですが、頬付けって何ですか？」

申し訳なさそうに佳乃が手を挙げ、質問してくる。

「頬付けはライフルのストック部分に頬をくっつけて狙いを定める体勢の事よ。正しい頬付けができれば狙いも正確になるわ。これは、肩付けと同様に安定した弾の軌道を得るためには大切な事よ。」

藍那は佳乃の質問に対して、丁寧に解説する。

佳乃は藍那の解説を受け、理解できたのか何度も頷く。

「まあ、百聞は一見に如かずね。香奈子。撃ってみて。」

香奈子は頷き、トリガーを引く。が、弾が出ない。

藍那は香奈子の持つ銃のセレクトアーレバーの位置を見る。案の定、セレクトアーレバーがSAFEの位置にあり、安全装置が働いていた。

「香奈子。本気で撃つ気なら、セーフティを外さないよ。」

香奈子は軽く赤面し、セレクトアーレバーをSEMIの位置へ変更する。

「じゃあ、気を取り直して。」

香奈子は一度深呼吸し、引き金を引く。

パンツという子気味の良い銃声とともに弾丸が打ち出され、標的に向かって真つすぐ飛ぶ。

藍那は的の中央へ命中させたが、香奈子の弾は中心を大きく外れが的に当たった。

先ほどまでは的に緝すらしなかったのに比べれば、大きな進歩といえた。

それを見ていた刀華と佳乃は「おおー！」と感嘆の声を上げる。

「こんな感じで、正しい構えと正しい姿勢をとれば、命中精度は格段に

上がるわ。佳乃は変な癖がついていないから、正しい姿勢をとれているわ。次は刀華かしらね。」

藍那は香奈子の時と同様に刀華の姿勢を強制した。

これも結果は顕著に表れ、先ほどまで見事に外していた弾が的に当たるようになった。

藍那の指導の下、真剣に特訓し最初に比べれば格段に上達した。

やはり弾が当たるようになる楽しくなるものである。

しかし、楽しい時間とは瞬く間に過ぎて行ってしまふものである。

「おーい。もう昼だぞ？そろそろ後片付けを始めろよ。」

教員室から岸があくびをしながら出てきた。

岸の言葉を受け、4人は一斉に時計を見る。時刻は11時30分を過ぎており、片づけをすることを考えともう始めないと昼までに終わらない。

「どうだ？だいぶ上手くなったか？」

「たった半日ではあまり変わりません。しかし、朝に比べると少しは上達したと思います。」

4人を代表して藍那が応える。

「そうか。そいつは良かった。俺が休日返上で来たかいがあったってもんだ。せっかくだ。俺にもちよつと撃たせろ。」

藍那は岸の言葉を想定していたかのように、ハンドガンを差し出す。

岸は藍那と同じようなきれいな姿勢で銃を構え、的に向かい引き金を引く。

1発で的の中心付近をとらえる。

「思ったより腕が落ちてないな。」

岸はおどけるように笑いながら銃を下ろす。

「よし。俺も手伝ってやるから、さっさと片付けちまうぞ。」

片づけは岸も加わり5人で行ったため、思ったよりも早く終わり12時まで射撃訓練場を後にした。

射撃の練習を終え、4人は仲良く昼食をとっていた。

今日も朝のトレーニングの後、購買部で昼食を購入していた。

12時となると他の生徒も昼食をとるため、庭園のように人気のスポットは人でいっぱいになっている。

そのため、藍那達はグラウンドのわきにある四阿で昼食をとっていた。

香奈子はクリームパンとチーズ蒸しパン、刀華はツナマヨと焼き鮭のおにぎり、佳乃は購買部特製日替わり弁当、そして藍那はいつも通りの不味いで有名なレーションであった。

「それにしても、藍那っていつつもそのレーションよね。不味いつて噂だけど本当はおいしいとか?」

刀華は藍那がいつも同じものしか食べていないことを、素直に疑問に思っていた。

「ん?気になるなら、食べてみる?」

藍那は刀華へまだ封を破っていないレーションを渡す。

「.....まずい.....」

刀華はレーションを一口かじり、みるみる間に表情が「無」にかわっていった。

「なにこれ!?!消しゴムなんて食べたことないけど、デカイ消しゴムの味がする!こんなものよく食べれるね!」

「無」から再起動した刀華は怒涛のように話し出す。

人をここまでにするレーションとはどんなものか気になるが、わざわざまずいものを食べたくはないため香奈子と佳乃はレーションに手を出さない。

「私には味覚がないの。それに、レーションは栄養バランスを考えて作られているから、栄養バランスを考えなくていいのよ。」

藍那はサラッと応える。

しかし、「味覚がない」という単語に佳乃が引つかかる。

「味覚がない」ってどういうことですか?」

「味覚がないといっても、少しはあるのよ。ただ、何を食べても血や泥の味になってしまうの。」

「!!??」

藍那の衝撃的なカミングアウトを受け、全員が動揺を隠しきれない。

3人は何を食べても血と泥という事を想像する。もし、自分がそれなら耐えられないだろうと思う。

「私なら耐えられない……。どうして、そんなことに……。」

「楽しい食事の時間を台無しにしてしまったようね。ごめんなさい。香奈子と刀華には話したことがあるけれど、私は元子供兵なの。私の味覚がこんなことになってしまったのは、脳の異常かと思つて病院に行つたわ。でも異常は一切見つからなかつたわ。精神科医の話によると心的外傷後ストレス障害の一種らしいわ。」

藍那は「前例が無いから、確定ではないけれど。」と続ける。

予め藍那の過去をある程度知つていた香奈子と刀華はともかくとして、初めて知つた佳乃は口を手で覆い絶句している。

「まあ、私の場合慣れてしまったから、苦痛には感じないわ。でも、周りの人がおいしいといつて食べている者の味が気にならないといつたら、嘘になつてしまふわね。さあ、この話はお終ひ。楽しい昼食の時間にしましょ?」

藍那はこの空気を何とかすべく、無理矢理話を終わらせた。

昼食も終盤に差し掛かつた時、

「やっぱり、私つて走つたり飛んだりするの苦手だから、兵士に向いていないのかなあ……。」

神妙な面持ちで香奈子が呟いた。

「そんなことはないわよ。私は専ら動いて敵を討つタイプだけれど、そうでない人ももちろんいるわ。例えばスナイパーね。」

3人は「スナイパー?」と聞き返してくる。

「ええ。スナイパー。簡単に言つたら、物陰や建物の上などから敵を狙撃する者の事よ。」

「いや、流石にスナイパーの意味ぐらいは私でもわかりますよ。でも、何で私がスナイパー何ですか?」

香奈子は心底不思議そうに藍那に尋ねる。

「さっきの射撃練習で思ったのだけれど、香奈子は呑み込みが良いからすぐにアサルトライフルの射撃が上達したわ。それなら、スナイパーライフルも使えるのでは？と思ったのよ。」

なるほど、と思うと同時に、藍那に褒められたような感じがしたのか、香奈子は少し照れ臭そうにする。

「それなら、スナイパーライフルをちよつとでいいから使ってみたいですー！」

香奈子は意気込み十分といった様子で、とても気合が入っている。

「そうと決まれば、この後スナイパーライフルを使うのが上手い人のところへ行きましょうか。刀華と佳乃はどうしますか？」

「私は1日中特訓に使うと思ってたから、予定は空いてるよ。」

「私も刀華さんに同じくです。良ければついて行ってもよろしいですか？」

どうやら、刀華と佳乃も予定が開いているらしい。

藍那は「もちろん。」と応え、4人で四阿を後にした。

「それで、俺のところへ来たと・・・。」

藍那たちは第3特別訓練場の教職員室に、石塚を訪ねてやってきていた。幸い教職員室には石塚しかいなかった。

「はい。スナイパーライフルのことでしたら、あなたが1番かと思いまして。」

藍那は石塚に当たり前だと言わんばかりに話す。

藍那が「スナイパーライフルを使うのが上手い」と言われ連れてこられた3人は、何が何だかといった様子である。

「あのなあ？今日は土曜日で、俺の勤務時間は午前中までなんだぜ？昼めし食ってたらいきなり来やがって。さつさと家に帰りたいんだが？」

現在、石塚達教師の勤務時間は労働法で土曜日は午前中と決められている。

それに加え、石塚は残業というのが大嫌いであるため文句が止まら

ない。

「かわいい生徒のお願いです。」

石塚は深いため息をつく。

「何が「かわいい生徒」だ。勉強熱心つてのは認めるが、お前らも休日ぐらい休めよ。それに、家でかみさんが待つてるんだ。早く帰りたいの。」

これまで悪びれることなく真顔で淡々と話していた藍那が、石塚の「かみさんが待つている」という単語に反応する。

「石塚先生。やっぱり、ご結婚なされていたんですね？てつきり、一生独身だと思つたのに……。」

「相変わらず失礼だなくお前は。」

「それで、貴方と結婚するなんていうもの好きは、どんな方なんですか？」

「もの好きって……。お前も知つてるやつだぜ。仁科。」

藍那は少し考えこむ。

「まさか、祐美さんではないですよね？」

「おお。よくわかつたな。旧姓夏目裕美^{なつめゆみ}。今は石塚裕美だ。」

石塚は軽くどや顔を藍那に向ける。

藍那はため息を1つつく。

「なるほど。裕美さんなら納得です。」藍那はニヤリと口角を少し上げ、悪い笑みを浮かべる。「由美さんなら今から許可をとれますね。」

藍那は胸ポケットからスマートフォンを取り出し、素早く操作しメールを送る。

それを見て石塚は深いため息をついた。

「あの一、私達話についていけないんだけど……。お2人さんて昔からの知り合い？」

恐る恐る刀華が聞いてくる。

「ああ、俺がまだ軍人だったところからの知り合いだ。」

「補足して説明すると、子供兵だった私を解放してくれた1人よ。本当に感謝しているわ。」

「本当にそう思つてるなら、少しはいたわってほしいもんだぜ。」

3人は合点がいったという顔になる。

「それじゃあ、先生は藍那さんがSF学園に入学するから、ここへ来てもられたんですか？」

「いいや。俺がここへ来たのと、こいつが入学したことは何の関係もない。偶然ってやつだな。」

どうやら、香奈子は藍那が入学するからここへ来たのではと思っらしい。

「俺は軍を退役してやることもなかったからな。まあ、所帯も持って働かないってのは、かみさんに殺されるからここへ来たって感じだな。」

石塚は笑いながらここへ来た経緯を話した。

そうしていると、藍那のスマートフォンにメールの着信音があった。

藍那はすぐにメールを確認する。文面は「藍那ちゃん久しぶり。ここにいる私の旦那は、好きにこき使って構わないわよ♡」となっていた。

藍那は、石塚にメールを見せる。

「奥さんからの許可は取ったので、ご指導お願いします。」

石塚は観念したのか、両手を軽く上げ好きにしてくれと首を振った。

「それで、俺は何をすればいいんだ？他の3人ならともかく、仁科には教えることなんてないぞ？」

「はい。もちろん私ではありません。彼女にスナイパーライフルの使い方を見せて欲しいんです。」

藍那の紹介を受け、香奈子が「よろしくお願いします。」と頭を下げる。

「そいつは構わないが、何で仁科自身が教えないんだ？お前もスナイパーライフルぐらい使えんだろ。」

「ええ、使えます。ですが、超神兵であるあなたに比べれば粗末なものなので、ここはプロフェッショナルに教えていただくこうかと。」

「あんまり褒めんなって。まあ、俺が超神兵だったってのは間違いな

いがな。」

藍那たち4人は「自分で言っちゃうんだ・・・。」と心の中で呟く。「まあ、いいぜ。名前は確か西原香奈子だったよな？ついてきな。特別に俺じきじきに教えてやるよ。」

「はい！ありがとうございます。」

香奈子は石塚についていく形で教職員室を後にした。

「それじゃあ、私達は近接格闘の練習でもする？」

藍那提案に刀華と佳乃が賛成し、3人は第二グラウンドへ向かった。

香奈子と石塚は第3特別訓練場内の市街地エリアに来ていた。

市街地エリアにはビルなどの建物が忠実に再現されており、普通の町といわれても遜色はない。ただ、街並みは廃墟をモデルに作られたものであり、敢えて建物の残骸などが設置されている。

その中で、エリアの中心付近にある5階建てのビルの屋上に香奈子たちはいた。

「まあ、スナイパーライフルとアサルトライフルの構え方に大きな違いはない。構え方は仁科から教わったか？」

「はい。一通りは教えてもらいました。」

「それなら話が速いな。ちよつと構えてみる。」

石塚はレミントンM24を差し出す。

香奈子は受け取ると、午前中に藍那から習った構え方を思い出し忠実に再現する。

「ほー、なかなか様になってんじやねーか。これならいきなり射撃練習に移っても問題ねーな。」

石塚は一呼吸おき、先ほどまでの親しみやすいおじさんといった顔から、時たま藍那が見せる兵士の顔になる。

「まあ、脅すわけじゃあねーが。普通、銃てのは何発も撃って、その中の1発がたまたま相手の急所に当たって死なせる。だがな、スナイパーってのは引き金を引けば確実に人を殺すんだ。その重みに耐え

られるか？」

香奈子は先ほどまでと様子が大きく変わった声音に息を？む。

SF学園

「耐えられるかはわかりません……。でも、ここに受かった時にある程度の覚悟はしたつもりです。お願いします。私に教えてくださいます。」

香奈子は銃を下ろし、深く頭を下げる。

「よし。いいだろう。銃を貸せ。手本を見せてやる。」

石塚は屋上から打ち下ろす形で、歩道に置かれていた人型の的の頭部を吹き飛ばす。

「俺に教えられる範囲で、全部を教えてやる。毎日、放課後に俺のところへ来い。俺はなかなか厳しいぞ？」

「はい。お願いします。」

再度香奈子は石塚に深く頭を下げた。

藍那たちは第2グラウンドでゴム製のナイフを使つての格闘訓練を行つていた。

藍那1人に対し、刀華と佳乃の2人で訓練を行つている。しかし、2人のナイフは藍那にかすりすらしない。それどころか、藍那は2人を軽くあしらっている。

思い通りにいかなければ、自然と苛立ちはつのる。それも、剣の腕に自信があり、至近距離での戦いにおいて自信を持っている刀華の苛立ちはかなりのものになっていた。

そんな精神状態では自然と大振りになってしまい、大きな隙を生んでしまう。

それを藍那は見逃さない。

滑り込むように刀華の懐に入り、喉にナイフを当てる。

「この間合いにおいて、大振りはご法度。一撃で大きな傷を与える必要はないわ。」

藍那は1度刀華から距離をとり、地を這うような動きで刀華の足を最小の動きで何度も切りつける

「このように、地を這うように。浅くても何度も斬る。」

刀華はたまらず藍那から逃れるためジャンプする。

すると、藍那はジャンプした刀華を肩に抱える形で捕獲する。

「逃れるためとはいえ、ジャンプなんてしたら好きに料理してくれと言っているようなものよ。」

藍那は刀華を下ろす。

「まずは私にナイフを当てられるようにならないとね。」

藍那の言葉に刀華と佳乃は顔を見合わせ、苦笑いした。

土曜日は朝から夕方まで自主訓練をした。

明日は1週間の疲れをいやそうと、自主訓練は休みとなった。

休日にもかかわらず朝から夕方まで特訓を行っていたため、藍那を除く3人は疲れ切っていた。

そのため、いつもよりも早めに夕食を済ませ、自室で休むことにした。

「香奈子、石塚さんの特訓はどうだった？」

シャワーを済ませドライヤーで髪を乾かしている香奈子へ、藍那はシャワーを浴びる準備をしながら問いかける。

「とても丁寧に教えてくれました。来週から放課後に特訓していただけるようになりました。」

「あの石塚さんが……。珍しいこともあるものね。」

藍那は軍人時代からの石塚を知っている。

これまで、他人に熱心に何かを教えるなどということは無かった。

そのため、藍那は表情には出さないが、心底驚いていた。

「藍那さんに1つ聞きたいんですけど、何で石塚さんのところへ行っただんですか？」

「それは……。」藍那は少し考えこむ。「知っている中で、私が絶対に勝てないと思った人が3人いるわ。石塚さんはその中の1人だから。」

香奈子は何故自分を石塚のもとへ連れて行ったのかを聞きたかった。しかし、藍那からの回答は自分の求めているものではなかったため、首を傾げる。

「香奈子は何でSF学園を志望したの？」

藍那のいきなりの予想外の質問に驚き、香奈子は「え？」と聞き返す。

藍那はもう1度香奈子に同じ内容の質問をする。

「それは、軍人を目指しているためです。軍人なら早く自立できますから。」

香奈子は少しうつむき、話始める。

「私の家って、世間一般でいう母子家庭なんです。母と私、それと3つ下に双子の妹がいて、ボロアパートに暮しているんです。父は妹が1歳になる少し前に家を出て行って、それから会っていません。母はいくつも仕事を掛け持ちして、朝から晩まで仕事詰めなんです。だから、私は少しでも早く経済的に独立しないといけないんです。」

藍那は日本の一般家庭について詳しくない。しかし、香奈子の家庭が大変であるということは分かった。

「それで、この学園に入ったのね。ここなら国防大学や国防軍に入るのに有利だから・・・。」

「そうです。大学へ進学する経済力は家にはありません。でも、SF学園は学費がものすごく安いんです。」

SF学園は国家機関である。そのため、授業料は公立高校の半分ほどである。

「あなたがここへ来た理由は理解したわ。それじゃあ、あなたからの質問に答えるわね。」

藍那は一呼吸置く。

「さっきも言ったように、石塚さんは私が勝てないと思う人の1人よ。その中で、あの人はスナイパーとして最高峰だと思ってるわ。それが理由ね。それと、理由はもう1つあるわ。私は香奈子がスナイパーに向いていると思うの。」

「それって、どういうことですか？」

「香奈子は入学早々行われた、模擬戦を覚えてる？」

「ええ、もちろん。」

「あの時、私はクラスメイトを殺気を頼りに見つけたわ。まあ、香奈子以外だったけれど・・・。前にも言ったかもしれないけれど、人は銃口を向けたときほぼ確実に殺気を出すわ。けれど、香奈子からの殺気を一切感じられず、最後まで見つけれなかった。」

「それって、たまたま私が藍那さんに銃を向けてなかっただけとか・・・？」

「私は自分以外の人に向けられた殺気でも、ある程度の位置はわかる

わ。」

香奈子は「やっぱり藍那さんってただものじゃないんだ……。」と
呟く。

「こんな体験をしたのは、石塚さんを相手にして以来なの。だから、私
は香奈子がスナイパーに向いていると思っただの。」

香奈子は藍那の説明を受け、少し自信を持つ。

自分は運動が昔から得意とは言えなかった。そのため、本当に軍人
になれるかという不安があった。しかし、藍那の言葉で自分に向いて
いるものは何かを知ることができた。

(月曜日からの特訓。頑張らないと。)

香奈子は拳を固く握りしめた。

刀華と佳乃も藍那たちと同じように、自室で休んでいた。

刀華は藍那に訓練でナイフをかすらせることすらできなかったこ
とを、ベッドの上でゴロゴロと転がりながら悔しがっている。

佳乃は刀華と対照的に、ベッドに座り込んで打つもいたままずつと
考えこんでいるようだった。

ふと、刀華がそんな佳乃を心配に思い、声を掛ける。

「佳乃どうしたの？何か考え事？」

佳乃は顔を上げる。

「ええ、藍那さんのことで……。まさか、あんな過去があつたなん
て……。」

どうやら、佳乃は藍那が元子供兵であつた事について考えていたよ
うだ。

「たぶんだけど、藍那自身はあんまり気にしてないんじゃないかな。
あいつって、なんて言ったらいいんだろ。過去の事よりも未来志向
！って感じじゃない？」

「でも、昔のことを引きずっているかもしれないし……。」

「そんなに気になるなら、月曜の朝に直接聞いてみたら？」

「……！」

何でもない事のように言う刀華の言葉に、佳乃は言葉を失う。

「だってそうじゃない？ここで悩んで答えが出るならいいけど、出な

いじゃん。」

「……そうね。」

佳乃は納得したのか、数度頷く。

それを見て安心したのか、刀華は微笑む。

「フフッ。それじゃあ、さっさとシャワー浴びて、もう寝よう！今日は疲れたー！」

刀華は着換えを持って、シャワールームへ駆け込んでいった。

日曜日は疲れを癒すという大義名分で怠惰をむさぼった。

1週間の再スタートである月曜日。

藍那は香奈子を起こし、朝のトレーニングの為にグラウンドへ向かう。

グラウンドでは金曜日のように、40人ほどの生徒がいた。

藍那は人数が半分ほどになっているだろうと思っていたので、大いに驚いた。

前回と同じメニューをこなし、あまり遅くならないうちに解散となった。今日は1限目から座学であり、授業中睡魔に襲われるなどということは避けなければならぬ。

まずその前に、SHRに遅刻するわけにはいけないので、皆解散は速かった。

藍那と香奈子も遅刻しないように教室へ向かった。

SHRが始まる前の教室は、いつもであればみな自分の席へ着き静かに待機している。

しかし、今日は様子が違った。

七海の席の周りに人が集まり、人垣ができていた。

七海の席は藍那の席のちょうど1つ前であり、藍那は自身の座席へ行けなかった。

人垣を作っている生徒は2組の生徒だけではなかった。

中には朝のトレーニングの時に見た顔があり、恐らく1組の者も混じっているのだろう。

藍那は1組と2組の生徒の顔を大体ではあるが覚えている。しかし、その中のどれにも該当しない者がいた。こちらは恐らく1・2組以外の生徒だろう。

この人垣はどうやら金曜日に起きた事故のことが原因のようだ。皆に七海へ「無事でよかった。」や「飛行機を操縦できるなんてすごい!」といったねぎらいや賞賛の声をかけたり、「どこで操縦を習ったの?」や「いきなりの事故で怖くなかった?」といった質問がされたりしていた。

割合としては質問7割それ以外が3割といった具合であるため、質問攻めといっても過言ではないだろう。

七海を囲んでいる生徒は約20人。

これだけの人数の話を漏らさずに聞き取ることが出来るのは、おそらく聖徳太子ぐらいのものだろう。

人垣の中心の七海はひたすらにオロオロしており、藍那には心なしか怯えているように見えた。

「ごめんなさい。そこに集まられていると席に就けられないのだけだ。それに、もうすぐSHR前の予鈴が鳴るわ。そろそろ自分の教室に帰った方がいいんじゃないかしら?」

藍那は人垣を作っている生徒たちに聞こえるように咳払いをし、とても不機嫌そうに言った。

言葉を受け、数名の生徒が藍那へ顔を向け睨む。

しかし、藍那は自身の目つきの悪さを全力で活かし睨み返す。それを受けた生徒はたまらずたじろぐ。

「もう一度言うわ。そこに集まられていると私は自分の席に就けないの。他人の迷惑というものを少しは考えてほしいものね。」

藍那の声には怒気が混じっており、1人2人と人垣を作っていた生徒が「また話を聞かせてね」などと七海へ声を掛け教室から出て行った。

人垣を作っていた生徒全員が教室から出て行ったことを確認し、藍那は表情をいつものものへと戻す。

藍那は1つため息をつき、自分の座席へ着いた。すると、静が藍那

のもとへやって来た。

「ごめんなさい。本当は委員長である私がやらないといけない事だったのに……。」

静はとてもし訳なさそうに頭を下げる。

「気にしなくていいわ。どいてくださいと言って素直に聞き入れてくれるわけではないもの。それよりも」藍那は静の横で申し訳なさそうにうつむいている七海へ視線を移す。「こんな朝から災難だったわね。少し怯えてる様子だったけれど大丈夫？あんな風に人に囲まれることになれていないようね。」

藍那は「まあ、普通はなれて無くて当然だけど」と付け足す。

七海は顔を上げ、藍那へ何か言おうとして口をパクパクさせる。しかし、言葉へ出てこず再びうつむいてしまう。

「……私は、以前いじめられていた経験があるの。それがトラウマで大人数に囲まれるのは苦手なのよ……。」

七海はうつむいたまま蚊の鳴くような声で話した。

七海の横にいた静と藍那にはぎりぎり聞き取ることが出来たが、藍那の後ろにいた香奈子は聞き取ることが出来なかった。

「そんな事があったなんて……。」

静は七海の過去を聞き、自分のことであるかのように悲痛な表情を浮かべる。

「……静、1つ聞いてもいいかしら？いじめって何？」

藍那は『いじめ』という単語の意味がいまいちよく分からず、静へ尋ねた。

「いじめっていうのは……。まあ、説明するのは難しいんだけど……。簡単に言うと多人数で少人数に対して嫌がらせとかをする行為、だと思っ……。」

「そうなのね……。私、この学園がはじめての学生生活で、よくわからないことが多いの。」

静は藍那の言葉に少々疑問を持ったが、今はスルーすることにした。

「そんなことより、七海は何でそんな話を私達に？」

静は七海に尋ねる。

この問いは藍那も気になっていたことであつた。トラウマになるようなエピソードをわざわざ他人に話す必要は無い。にもかかわらず、自分たちに話したのはどうしてなのだろうかと気になっていた。「静は私のルームメイトだし、藍那さんにはさつき助けてもらったから……。それに、事故の時、パニックになりそうだった私を励ましてくれたから……。だからこそ、2人には話しておこうと思ったの。」今回はちゃんと顔を上げ、はつきりとした声で話した。

「私がこの学園へ来たのは、私をいじめてた奴らよりいい高校に入つて見返してやるためっていうのが1つ。それと、ここなら最新の電子機器へ触れる機会もあると思つたからなの。以前はあいつらから逃げるためにネットゲームに熱中して、コンピュータ関連に詳しくなつたから……。」

「なるほど……。もしかして、そのネットゲームっていうのは戦闘機を操縦したりするゲーム？」

七海の話聞いていた静はふと思つたことを聞いてみた。

「そう、まさかネットゲームの経験に命を救われるとは思わなかつたけどね。」

七海は少し笑いながら応えた。

そのタイミングでSHR前の予鈴がなり、各々が自分席へ戻つた。担任である小鳥遊が教室へ来て、いつもと同じようにSHRが始まると思つた。

しかし、今日は緊急の全校朝礼が行われることとなつた。

小鳥遊曰、この朝礼は今朝急遽決まつたらしい。それにより、生徒を大講堂へ集めることが出来ないかと判断し、各教室にある大型モニターを使用してのものとなつた。

「それでは、学長先生からお話があるようだから、ちゃんと聞いてくださいね。居眠りとかしちやダメですよ。」

小鳥遊がリモコンを操作し、学長室からの中継へつなげた。

「皆さん。おはようございます。」

モニターへ口髭をたつぷりと蓄えた柔和な笑みを浮かべる老人が

映し出された。この老人はおよそ60代後半だろうか、髪の毛も真っ白になっていくが頭頂部が薄くなっていたりといったことはない。

この老人はSF学園にいるものなら誰しもが1度は見たことがあるだろう。

藍那も入学式の際に学長あいさつで目にした。

この老人、山本晴信やまもと はるのぶ学長は約10年このSF学園の学長をしているらしい。人格者であり信用できる人物だと、入学式へ向かう機内で藍那は正純に聞いていた。

「今日は先日あった1年生の実習中の事故に関することを報告したいと思ひ、こういった形で場を設けさせてもらいました。まず、今回の事故による怪我人であった教員1名は命に別条無く、数日後には通常勤務へ戻ることが出来るということでありました。」

この知らせを受け七海はほっとした表情を浮かべる。

「次に、事故原因ですが、どうやらバードストライクによるものだということが分かりました。今回は幸いなことに大事には至りませんでした。以後は一層の――」

この後は約15分間にも及ぶ言い訳と再発防止策についての説明が行われた。

藍那は学長の話を聞き流しつつ、考え込んでいた。

それは学長の発言に引つかかる部分があつたためである。

（学長は今、確かに事故原因をバードストライクと言った。でも、バードストライク程度で戦闘機のキャノピーがあんな風に粉々になるわけはない……。それに、私は確かにぐちゃぐちゃになった金属のようなものを見た。事故原因は絶対にバードストライクなんかじゃない。では、何で学長は虚偽の情報を？考えられるとすれば上から口止めをされているから？それだとすると、SF学園は軍管轄の教育機関であるなら、そのトップは現国防大臣である仁科正純……。まさかね。）

藍那は考え込んでいたためか、学長の話が終わっていたことに気づいていなかっただけ隣のいる香奈子へ不思議そうな顔を向けられていた。

週が明け『年に一度のバカ騒ぎ』が終わったためか、心持ち学校内
が落ち着いた雰囲気になっていた。

生徒の環境適応力はかなり高いのか、2組は月曜日に実習がないた
め放課後まであつという間に放課後になった。

自分の荷物をまとめ、藍那は足早に2組を後にしようとしていた。
「藍那さん。急いでいるようですが、今日も風紀委員の仕事がある
んですか？」

まだ荷物の整理をしている香奈子が声をかけてきた。

「いいえ。今日は非番よ。今から刀華のところへ行こうと思っていた
の。香奈子も行く？」

「いえ、私は石塚先生のところへ行くので……。また誘ってください
ね？」

香奈子は少し残念そうにする。

「そう。それじゃあ、香奈子。頑張ってね。」

藍那は香奈子へ手を振って教室を後にした。

藍那は刀華と佳代に合流し、武道館まで来ていた。

昨日は藍那の指導で射撃や近接格闘の訓練を行った。

そのため、今日は刀華の指導で剣の訓練をしようと昨日の帰り際に
予定していたのだ。

ちなみに、刀華の風紀委員の仕事のシフトは、藍那と合うように、小
鳥遊へ頼んで調整してもらった。

武道館へ入るなり、エントランスで談笑していた数名の剣道部員と
刀華の目が合った。その瞬間、剣道部員が先ほどのような和やかな雰
囲気ではなく臨戦態勢の時のような張りつめた雰囲気になった。

これはいけないと思い、藍那が前が出る。

「今日は武道館の1部を借りられないかと思ひ、来た次第です。です
ので、あなた方と揉め事を起こすつもりはありません。」

今日はいくまでも剣の練習をしに来ているため、刀華もここで揉め
事を起こすのは本意ではない。まして、風紀委員である自分たちが率
先して問題を起こすわけにはいかない。

そのため、刀華は何も言わずに頭を下げた。

剣道部員は以前刀華1人に部員全員が全滅させられるという経験があり、それに加えそんな刀華を倒してしまった藍那までいる。

「そんな彼女たちを敵に回すのはまずいと考えたのか「主将に聞いてくる。」と言いい、張りつめた雰囲気はそのまま奥の道場へ消えていった。」

数分後、剣道部の主将が奥から出て来た。

主将の額には汗がにじんでおり、今まで稽古をしていたという事を表している。

「それで、道場の1部を貸してほしいと?」

藍那が前に出て、主将を真っ直ぐ見る。

「はい。私達も県の稽古をしたいと思ひまして。」

主将が刀華を睨む。

「俺達は、あんたには少なからず感謝はしている。しかし、横にいる奴には手ひどくやられたからな……。」

主将の言葉に少しづつ怒気は混じる。

「この際はつきり言わせていただきます。あなた方が弱いから私に負けた。それを棚に上げて私を憎まれてもお門違いというものなのですか?」

「刀華さん。こっちはお願いに来ているんですよ?それなのに、そんな言い方……。」

「私は事実を言っただけよ。負けて悔しいのなら、次は負けないうように強くなればいい。」

佳代は刀華を必死になだめるが、刀華は止まらない。

「2人ともいい加減にしてくれるかしら?私が話をするから刀華は黙っていてくれるかしら?」

藍那は自分たちが交渉に来ているにもかかわらず、他人のせいで失敗してしまうのは我慢ならない。それも、相手の失言でなく自分の仲間内での失言で失敗などもつてのほかである。

藍那は刀華せいで剣道部主将と話す機会を逃がしてしまうのではないかと考え、イライラが限界に近づく。

そのせい、藍那の言葉には殺気がまじった。

剣道部主将と刀華、佳代は藍那の殺気にさらされこれまで感じたことのない恐怖を感じ、冷汗と震えが止まらなくなる。

「分かった。道場の端でよければ月曜から水曜の放課後なら使っていて構わない。それに、稽古道具も必要であれば貸し出す。それでいいか？」

主将は藍那をこれ以上怒らせるのはまずいと体が判断し、この場を収めるために勝手に口が動いた。

「それは、ありがとうございます。それと、私の友人が失礼なことを申しました。申し訳ありませんでした。」

先ほどのまでの殺気は霧散し、藍那が感謝と謝罪を述べている。

本当に先ほどまで自分が震えていたのがうそのようであった。

「それでは有難く使用させて頂きます。刀華、佳代行きましょう。」

刀華と佳代は藍那の後ろをついて道場へ行く道中、先ほどの藍那の殺気を思い出し身震いする。

佳代はともかく、刀華は剣を握る中で幾度も殺気を受けてきた。しかし、藍那のものはこれまで体験したものと全く違うものだった。

刀華の剣術は確かに敵を倒すための技ではあるが、道場で稽古をしている以上命のやり取りはなく、殺気というのは「おまえを倒す」といったものだろう。

しかし、藍那の殺気は本当に相手を殺すというものだった。

(あれが本物の殺気……。やっぱり藍那は私たちとは違う……。)

刀華はこれまでも度々思っていたことであったが、再認識することとなった。

学期末編―1

学校生活とは早く過ぎてゆくものである。

ついこの前入学式をしたような気がするが、もう7月の半ばに差し掛かっている。

SF学園は日本の国防軍直管の教育機関である。しかし、普通の高等学校と同じように3期制が採用されており、8月に入ると待ちに待った夏休みである。

だが、夏休みに突入する前に最大の障害となるものが存在する。それが期末考査であるのは言うまでもない。

SF学園は国内で1、2を争う高い偏差値の高校である。そのため、定期考査の難易度もかなり高いものになっている。

それに加え、SF学園の期末考査は学力面のみではないのである。期末に限り、射撃や近接格闘、SFの操縦といった1学期に学んだあらゆる分野の試験が行われるのである。

SFの操縦及び射撃や近接格闘は期末考査直前の実習で行われる。そして、成績はクラス単位で競い合うということになっている。これは、生徒の競争心を高め、学力向上を図るといったものらしい。

このため、期末考査を終えてすぐにクラス対抗の競技大会が開かれ、その成績に応じてクラス全員の成績に加算されるというものがある。

これにより、SF学園期末はかなり熱気があふれるのである。

期末考査まであと2週間を切り、校内の至る所が慌ただしくなっている。

そんな校内の廊下を鋭い目つきと美しい黒髪を持った少女、仁科藍那が歩いていた。

季節は夏を迎え、スリットの入った膝丈の白色ワンピースに腰骨の辺りまである黒の上着という制服がワンピースはノースリーブになり、黒の上着は半そでになった。

SF学園は八丈島の近くにあり、気候も自然と気候も似通ったものとなる。

八丈島の気候は高温多湿で年間を通して風が強く、雨が多いのが特徴である。年間平均気温は約20度であり、「常春の島」とも呼ばれたりもする。

しかし、夏場ともなると気温は30度近くまで上がるため、夏用の制服が用意されている。

廊下を歩いていた藍那は自分のクラスである1年2組の教室の前で立ち止まり、深いため息をつき入室する。

現在、クラス内では藍那をどの競技に出場させるかという議論が繰り広げられている。

競技大会の種目は3つ。

1つ目はライフルを用いて屋内フィールドに設置された50枚の的を撃ち、そのタイムと命中精度を競うタイムアタック。通称『スピード・シューティング』。

2つ目はSFで決められたコースを飛び20枚の的を撃ち、そのタイムと命中精度を競うといったものである。通称は『フライ・&・ショット』。

そして3つ目はこの競技大会の目玉とも言える種目であるクラス対抗の模擬戦闘、通称『FFB《フィールド・フォースバトル》』である。

模擬戦闘は1クラス5名を1チームとし、特別訓練場で実戦さながらの模擬戦闘を行うものである。

これでは勿論訓練用のペイント弾を使用される。

しかし、短期間とはいえ戦闘訓練を受けた者たちによる模擬戦闘は、毎年軍の関係者が見に訪れるほど本格的なものであり、この競技大会の花形種目となっている。

この競技大会は1人最大2種目まで参加できる。

現在2組のクラス内会議の議題になっているのは、藍那をどの競技に参加させるかということである。

テスト期間の為部活動や委員会が休みとなっている。

そのため、放課後の時間は潤沢になっていた。

これにより毎日のようにクラス内会議が開かれている。議題のほ

とんどが誰をどの競技に出場させるかといったものであった。

藍那自身としてはどの競技にも参加したくない。というのが正直なところである。

理由は単純にして明快、自分は興味ないので勝手にやっってくださいといったものだろ。

しかし、クラスメイトはそれを許してはくれない。

「やっぱりFFBは外せないよ！ほかのクラスも絶対エースメンバー出してくるし、うちだって油断してられないよ！」

「聞いた話によると1組は『一斬姫《きりひめ》』と『一氷の姫《アイヌ・クイーン》』がメンバーインしてるらしいし、4組は『一二丁拳銃《デュアルガンズ》』が出てくるらしいです。」

ちなみに、『斬姫』は志摩刀華で『氷の姫』は柴田佳乃である。そして、『一二丁拳銃』は一白野日向《はくのひなた》という女子生徒である。

「それって本当？それじゃあ、こっちもベストメンバーで出るしかないじゃない。」

「やっぱり仁科さんと西原さんに出てもらいましょう。」

クラス内会議の司会をしていた小林静が意見をまとめる。

「勝手に決めないでもらいたいのね。せめて、私の意見を聞くといったことはしないのかしら？」

藍那は入室するなり静に対して苦言を呈す。

「いやいや、藍那はやって下さいって言ってOKって言わないでしょ？それなら予めクラス内の意見を統一させておいて、民主主義的に解決しようと思ったのよ。」

藍那は再び深いため息をつく。

「これは民主主義の悪用ね。それで、香奈子はFFBへの参加は了承したの？」

藍那は自分の話題から無理矢理話題を変える。

「FFBはまだよ。でも、スピード・シューティングへの参加は了承してくれたわよ。」

「そうなの……。それじゃあ、交渉頑張つてね。」

藍那は180度回転して扉へ向かおうとする。しかし、静に腕をつかまれてしまった。

「まあまあ、話だけでも聞こうよ？・ね？」

静はまさかつい先ほど入ってきた藍那が逃げ出そうとは思っていなかったため、若干焦りつつ藍那の右腕を掴んでいる。

藍那は明らかに嫌そうな表情を浮かべたまま静の方へ向き直る。

「・・・分かったわ。話だけは聞いわ。」

藍那は渋々席に着き、会議へ参加するのだった。

丁度、2組と同じ様に1年4組でもクラス内会議が行われていた。教室内は重苦しい空気に包まれており、会議は緊張感に満ちている。

教壇の横に司会を務めている4組の委員長の白野日向が座っている。

日向は黒の頭髪をポニーテールにしている美少女である。身長は170cmを超えるような長身であり、スタイルも抜群。そして、頭脳明晰、スポーツ万能と天が二物を与えたような人物である。いつもクールかつ立ち居振る舞いもカッコイイということで、男女問わず人気がある。

日向が重々しく口を開く。

「どうやら、噂は本当のようね。FFBに『アイス・クイーン』だけなら想定内だったけど、まさか『斬姫』まで出てくるなんて予想外ね・・・。」

日向の言葉に益々空気が重くなった。

現在、1年生の中には他者より圧倒的な実力を持つ者がいる。それが、刀華や佳乃といった『一二三名持ち』《ネームド》である。

二つ名で呼ばれているのは、志摩刀華、柴田佳乃、白野日向、西原香奈子、そして仁科藍那の5名である。

二つ名は各々『斬姫』、『氷の姫』、『二丁拳銃』、『一鷹の眼』《ホーク・アイ》、『一凶眼の射手』《きょうがんのしやしゅ》である。

『斬姫』と『二丁拳銃』はそのまま戦闘スタイルからついた二つ名である。

刀華は太刀を用いた近接戦闘とハンドガンによる中距離戦闘を得意としている。剣術は言わずもがな、ハンドガンの腕も藍那の指導によりかなりのものとなっており、上級生に引けを取らないほどとなっていた。

日向はハンドガンを両手に持つ戦闘スタイルを得意としている。ハンドガンのほかにもナイフ等による近接戦闘も4組の中では他の追隨を許さぬほどである。

しかし、授業中での模擬戦では二丁拳銃のスタイルをとっているため、近接戦闘が得意であるということはあまりほかのクラスには知られてはいない。

『氷の姫』は戦闘中いついかなる時も冷静で取り乱さず、冷酷に相手を追い詰めていくという事により人知れずそう呼ばれるようになっていた。

戦闘能力は藍那の指導により平均よりも優れているといった具合である。しかし、敵にすればとても厄介ということにより恐れられているのだ。

香奈子は石塚の指導の下、最早達人の域に到達しようとしていた。

石塚曰、香奈子は狙撃の天才で国防軍の中でも上位に入るのではないかとこの程である。

生徒の中で狙われたら最後、あきらめるしかない。という具合に恐れられており、いつしか香奈子は『鷹の眼』と呼ばれるようになっていた。

当の本人は嬉しそうに藍那へ自慢しているため、まんざらでもない様子である。

最後に、藍那の二つ名である『凶眼の射手』は読んで字のごとく、目つきが悪いという理由と圧倒的な戦闘スキルによって呼ばれるようになったのだ。

藍那自身はこのように呼ばれているのは不本意であるが、最近では顔も知らぬ上級生から呼ばれるほどになってしまっているため半ば

諦めている。

この5人の中で戦闘能力が1番低い佳乃でさえ、一般の生徒からすれば圧倒的に強いのである。

FFBのメンバーは5名であり、ネームドが1人いるだけでも厄介だというのに2人もいるとは頭輪抱えるしかない事態である。

「これは対策を立てないとまずいな……。その他に何か情報をつかんだ人はいる?」

日向は頭を抱えつつ話を進める。

「これは未確認の情報なんだけど……。」

気の弱そうな女子生徒が恐る恐る手を挙げ話始める。

「どうやら、2組は『鷹の眼』と『凶眼の射手』がFFBへ出場するみたいです……。ちよつと聞こえただけなので、本当かどうかはわからないんだけど……。」

これを聞いた日向は再び頭を抱え、他のクラスメイトがどよめく。

1組だけでも対処が難しいということにもかかわらず、2組までとなると対処不可能である。

日向はクラス内にこれ以上不安が広がるのはまずいと考え、不敵な笑みを浮かべる。

「なあに、私はその4人を倒せばいいんでしょう?心配することはないわ。」

これはあくまで強がってみせる演技であり、本気で4人のネームドを相手に戦って勝てるとは思っていない。

しかし、日向の演技により多少暗く沈んだ空気を改善することに成功した。

「それじゃあ、私がFFBへ出るのは決定として、あと4人を決めるわよ。まずは——。」

少し明るくなったこの雰囲気を保っている間に議題を進めようと考えた日向は、FFBへ出場するメンバー決めへと話題を移す。

(4人全員と同時に戦うわけじゃないんだ……。うまく潰しあってくればいいんだけどなあ……。まあ、これに至っては出たとこ勝負になるから、精々祈っておくしかないわね。)

日向はある程度自分の中で納得し、会議へ頭を切り替えた。

1組は4組と違い、クラス内では陽気な雰囲気で会議が進められていた。

それは、1組の委員長が竹を割ったような性格であり、物事を深く考えないといった性格だったことが大きかった。

クラス内会議を始めて一言目が「深く考えずに、自分たちが出来ることをやろ〜。」というものであったことから理解できるだろう。

その結果、各種目へ出場する選手を選び終え、作戦会議となった現在でも陽気な雰囲気のままなのである。

スピード・シューティングとフライ・&・ショットは個人種目。FFBは団体戦ということもあり、主な議題はFFBのものとなっていた。

FFBへ参加するメンバー5人と委員長を中心に集まっている。

中でも険しい表情を浮かべているのが深い藍色の長髪と紅い瞳を持つ志摩刀華と、深みのある黒の髪とセルリアンブルーの瞳を持った長身の美しい少女の柴田佳乃である。

5人だけのチームであり、連携をとることが出来なければ一瞬では敗北するであろうと予測している。

敵チームに高確率で藍那がいるであろうと予測している刀華は人一倍真剣に作戦を考える。何故なら、総合的に考えて刀華では藍那に絶対に勝てないと考えているためである。

刀華は幼いころより剣術を学び、自身の技には自信と誇りを持っている。しかし、油断していたとはいえ刀華は1度藍那に敗北している。

藍那とは共に自主訓練を行っているため藍那の実力は目にしている。決して油断していい相手ではないのだ。

正直に言って正面から1対1での勝負、それも近接格闘戦の自分に有利な間合いのみに限定すればおそらく自分に軍配が上がるだろう。

しかし、FFBは1対1などというお行儀のいい場ではないのだ。

5組のチームのバトルロワイアル。戦闘中のチームを襲い漁夫の利を狙うもよし、自分たちには有利なエリアでわなを張りおびき寄せるもよし、ほかのチームをおとりに使うもよしである。

つまり、刀華と藍那がさしの勝負などできないと考える方が正解であり、他の敵がいる環境下では勝率はどんどん下がるのである。

どうすれば自分たちが有利に戦えるかといったことを真剣に考える。

そんな刀華たちへ委員長が「その場に合わせて臨機応変に対応でいいんじゃない？」などと言ってきたが、あえて無視する。

刀華はこの委員長が大物なのか馬鹿なのか良く分からなくなってきた。

「私たちが2組のチームを抑えるから、刀華さんは思う存分藍那さんと戦ってくださいな。」

佳乃が刀華へ微笑みかける。

「2組の人たちは私たちよりも実力派上だからかなり厳しいと思うけれど、抑え込んで見せるから刀華さんは大船に乗った気持ちでいればいいわよ。」

佳乃が微笑みを浮かべたまま宣言する。その言葉には力強さがあり、佳乃の真剣さが伝わってきた。

刀華は佳乃の心強い言葉を受けて心に誓う。

絶対に藍那に勝利し、自分達が優勝するのだと。

渋々席に着いた藍那へ静をはじめ数人が必死になって、競技に参加するように懇願してくる。

ここまでされて断ってしまったら、藍那が悪者のようになってしまう。そのため、仕方なく参加することを了承したのだった。

クラス内で自分だけが悪者のようになるというのは避けたい、という事も了承した理由の一つだろう。

しかし、それ以外に藍那興味を多少なりとも刺激したのは、ネームドがFFBへ参加する可能性は濃厚であるということだ。

自分は『凶眼の射手』という不本意な二つ名をつけられたが、自分と同じように二つ名を付けられている人物があと4人居るといふことは知っていた。何せ香奈子が嬉しそうに自慢してきたということがあったためである。

このネームドの中で1人藍那に面識のない者がいるため、この者に興味を持ったためであった。

(私の知らない技術を持っているかもしれない。もしそうなら面白いわね。)

藍那は少し期待する。自分が満足できる相手であればいいな、と。藍那から何とか了承を得た静達は胸をなでおろしていた。

「そうだ。フライ・&・ショットのメンバーつてもう決まっているの？」

藍那からのいきなりの問いに、静は意外そうな顔を向ける。

「今から決めようと思っていたところだから、まだ決まっていけないけど……それがどうかした？」

「この際ついでだから、フライ・&・ショットにも参加したいのだけだ。お願いできないかしら？」

藍那はSFでの射撃練習なども行っており、この際だから実力を試すいい機会だと考えていた。

静からしても2組一の操縦技術を持っている藍那へ頼もうと思っていたところであったため、2つ返事で了承する。

ほかの者もこの決定に依存は無いようで、反対意見は一切出ることにはなかった。

会議はほどなくして終了し、解散となった。

忘れてはならないのが、今現在テスト期間中なのである。

各々自分の勉強をしなければ、競技云々以前の問題である為解散後は皆真つ直ぐ自室へ帰っていった。

藍那にも勿論苦手科目というものは存在するため、ほかのクラスメイトのように自室への帰路へ着くのであった。

学期末編―2

週が明けた7月20日月曜日、今日より5日間の学期末期末考査が始まった。

藍那たちは早朝のトレーニングは継続して行っていたものの、放課後の自主訓練は中断し勉強に注力していた。

しかし、以前にも述べたがSF学園は国内有数の高い偏差値を誇る高校である。一夜漬けなどの付け焼刃では通用しない。

藍那は自分の席へ座り深呼吸を一度する。

授業の板書を何度も復習し、演習問題や発展問題を何度も繰り返し解いた。自分の考え得る最高を尽くし、今日を迎えた。

しかし、いくら勉強しようと、いくら「大丈夫だ」と自身に言い聞かせようとテスト前は不安なものである。

それは藍那だけではなくクラスメイトも同じようで、直前まで授業ノートを復習や問題を解いている者が目に入る。

藍那はテスト前の憂鬱な気分を払拭するため、もう一度深く深呼吸し気持ちを落ち着かせた。

期末考査などの定期テストは始まってしまうと短いもので、あつという間に1日目が終わった。ちなみに、今日の科目は数学Ⅰと公民、そして英語であった。

公民のように暗記系の科目は正直に言って藍那は苦手であった。しかし、教師が親切であったため、授業中に出題するような問題を言っていたのだ。

藍那は惨憺たる結果にはなっていないだろうと思いついて頭を切り替えた。過ぎ去ったことを後になって悩んでもどうにもならないのである。

時刻はまだ昼前である。昼食を済ませ自室に帰ろうと思いついて、隣の席にいる香奈子へ声をかけようと顔を向ける。

香奈子は机に突っ伏していた。

「香奈子、どうしたの？」

香奈子は顔だけ向けた。

「エイゴ、・・・オワツタ・・・」

返答は片言になり、心持ち語彙力も低下しているように思う。どうやら英語で玉砕してしまったようだ。

「今から昼食へ行こうと思うのだけれど、香奈子はどうする？」

「イツシヨニイキマス。」

返答は相変わらず片言のままだが、藍那について食堂へ向かった。こうして期末考査1日目が無事でない者も居るが終了した。

あつという間に期末考査最終日の放課後になった。

教室内では「テスト内容が難しかった」やその逆に「簡単だった」といった感想や、他人の出来栄えを聞いて一喜一憂する者たちが多くいる。

この風景は如何に高偏差値の学校といえども他と変わらない。

藍那は内心焦っている。

期末考査最終日の金曜日は2科目だけだったこともあり、かなり早く終わった。

しかし、帰って自室でゆっくりなどは出来ない。

週が明けた月曜日、その日から1週間が競技大会の日程なのである。

1日1種目の開催が予定されており、2年生以降は2種目追加されるので計5日ということとなっている。

初日に開催される予定となっているのが藍那も出場する『フライ・&・ショット』である。

今日までテスト期間ということもあり、生徒へのSF貸し出しは禁止されていたためにはつきり言って練習不足なのである。

SFの飛行練習を開始してまだ約2か月、射撃練習に至っては1か月も経っていない。

SFには姿勢制御ユニットや照準補正などの射撃補正機能も搭載されている。しかし、圧倒的に練習量の足りていない今、本番までに少しでも練習をしてSFになれる必要があるのである。

これは他人より早く飛行訓練を開始した藍那も例外ではない。

飛行に限っては上級生とそんな色ないほどに成長している。しかし、射撃練習は他の者と同じタイミングで開始するようにされ、アドバンテージを稼ぐことが出来なかった。

藍那はこの学年では1番銃になれているという自信がある。だが、SFでの射撃と生身で撃つのでは勝手が違い、独特の癖に慣れるのに少し手間取っていた。

つい最近まで銃を見たことも触ったことも、ましてや撃ったこともない者には撃ち方に変な癖などついておらず、SFでの射撃の独特の癖も「まあ、こんなものか」程度で済ませることが出来た。

しかし、藍那は銃に慣れ過ぎており、いつもと同じように撃っているにもかかわらずうまくいかないということに悩まされている。

教官曰く、1度慣れてしまえばあとはどうにかなるとのことだが、藍那はあと少しというところまで来ているがまだ慣れたとはいえないというのが現状であるのだ。

藍那が焦っているのにはもう一つ理由がある。

期末考査を終えた今日の放課後から実際に競技で使用されるコースが解放されるのだ。

初日ということもあり今日は混雑が予想されるため、1秒でも早く競技用SFの貸し出しを申し込みに行きたいと思っているためなのだ。

競技に使用されるSFは実習でも使用されている『初風』である。

初風の正式名称はSFT-T-60Cであり、初風は訓練及び軽攻撃機として10年以上前に登場した機体である。

過去2度のマイナーチェンジを経て現在に至る。

初風は国内におよそ220機あり、その内訳は国防軍が100機で学園が300機である。

SF学園には1校、姉妹校がある。その学園との総数が120であり、SF学園の保有数60機である。

この保有数は異常なほど多い。

しかし、これは国がどれだけSFパイロットの養成に力を入れてい

るという証明でもあるのだ。

藍那は昼食をいつもと同じようにレーションで素早く済ませ、SF訓練場へと向かった。

予め買っておいたレーションを食べてすぐに来たため、あまり貸し出しを待つ者は多くはなかった。

しかし、現在受付を待っている生徒は藍那を含め5人おり、藍那が受付を済ませるころには長蛇の列になっていた。

藍那がSF訓練場へ来たのは、SFを起動させるための許可をもらうためである。

この学園にある訓練用のSF自体は基本的に学生証により起動させることが出来る。しかし、SFは国家機密相当のものであり初風もその限りではない。

そのため、今現在誰が何処でどの機体を動かしているかということの申告が義務付けられているのだ。

今日藍那が使用する練習機は、実習で使用したものと同じものを使用することになった。そのため、グラウンドに併設されているハンガーへ行き、解放された競技用コースへ向かった。

コースは藍那にとってなじみのある第3特別訓練場である。

第3特別訓練場は市街地エリアであり、ビル等の建物も忠実に再現されている。『フライ・&・ショット』はビルの間を縫うようなコースとなっており、ビルなどの建物に的が設置されている。

的は直径60cmの金属製のものが用いられ、使用弾頭はSF用のペイント弾である。

大会当日までコース内での射撃練習は安全面等の関係により禁止されているが、飛行練習は飛行速度を抑えるなど制限はあるもの許可されている。

藍那が第3特別訓練場内の市街地エリアへ到着した時には、まだ藍那を含め3人しかいない。

飛行練習をするには絶好の機会である。

あまりゆつくりしていると混雑が予想されるため、早速飛んでみることにした。

とりあえず、スラスタの出力を抑え低速でコースを飛んでみる。SFのフルフェイスのヘルメットのような頭部装甲内はARのようになっており、レーダー情報や赤外線探知情報、火器情報、ムービングマップ、エンジン関係情報などの必要な情報が表示されている。これにより、コース内を飛行している時にナビゲーションをしてくれるため、コースを間違えることはない。

コースをゆつくりと1周し、2周目は少し速度を上げて飛行してみる。

(思ったよりこのエリアは飛ぶのが難しいわね・・・)

市街地エリアは実際の道幅で道路が設けられており、それなりに広い。安全を考慮してある程度の道幅の道路の上がコースとなっている。

道幅がそれなりに広いため、藍那は飛行だけなら簡単であると高をくくっていた。

しかし、ビルの間を飛ぶとなると両側に高い壁があるようになり、かなり圧迫感を感じるのだ。

飛行自体は難しくはないものの、精神的な面で難度が上がっている。

今日は感覚をつかむために3周ほどコースを飛行した。

かなり人も増えてきたため、現在の課題でもある射撃練習をするためSF用の射撃訓練場へ向かった。

SF用の射撃訓練場は藍那たちがはじめに飛行訓練を行った地下第1層にある。

SFの兵装に使用される弾丸は基本的に15mm以上のものであり、実弾を使用してしまうとコンクリート製の建物を破壊してしまうのだ。

そのため、地下第1層に大量の土嚢を積みSFでの射撃に耐えられるようにしている。

しかし、実弾を使用すると施設を破壊してしまう恐れがあり、授業や訓練等で使用される弾は金属製ではなくプラスチック製の模擬弾を使用している。

なお、プラスチック製の模擬弾といえど殺傷能力は十二分にあり、SFの兵装の恐ろしさがよく分かる。

藍那はアサルトライフルを構える。

SF自体が人間の約2倍ある。それにより兵装もSFに合わせてサイズが大きくなる。

今藍那が構えているアサルトライフルは、国防軍で使用されていた89式5.56mm小銃を模した66式15.5mm小銃である。

66式15.5mm小銃の銃身長は850mmであり、口径は銃の名前から分かるように15.5mmである。この銃のモデルとなった89式5.56mm小銃の銃身長は420mmで口径が5.56mmである。さらに、重量は小銃にもかかわらず30kgを優に超えることから、SFの兵装が如何に巨大かわかるだろう。

銃を構えるとSFの照準補正機能によりAR上に命中予測円が現れ、自動照準補正機能が作動し照準の微調整が開始される。

これが藍那の慣れない点の1つである。

命中予測円は銃の角度や目標との距離などの情報をもとに予測演算したものである。

この命中予測円が邪魔に感じているのだ。

藍那は視力と経験に基づく感覚で射撃を行っている。

ただでさえAR上に表示されている情報は1人で処理できるぎりぎりの量である。にもかかわらず、更に視界内に情報が追加されるのだ。

それに加え、自動照準補正機能によって照準が勝手に固定される。初心者からすればこの命中予測円と自動照準補正機能はともありがたいものだろう。しかし、藍那からすれば邪魔でしかないのだ。

藍那は深呼吸をして心を落ち着かせ、セレクターレバーをア(安全)からタ(単射)へと変更して引き金を引く。

15.5mmという大口径の銃を撃ったにもかかわらず、あまり反動を感じない。

これはひとえにSFの衝撃吸収能力がとても高いことが挙げられる。しかし、この優秀過ぎる衝撃吸収能力こそが藍那の慣れない違和

感の一因である。

衝撃吸収能力が優秀過ぎるあまりに生身で撃つ時よりも反動が小さいのである。

藍那は反動を無意識に考慮し構えている。しかし、生身の時とあまりにもかけ離れており無意識に構えるのでは思ったところへ弾が当たらない。

銃口の位置が1度ずれると100m先では約1.8cmのずれとなる。

SFの操縦を行いながら撃つとなればいちいち意識して構えるなんてことはできない。一瞬の油断が命取りになるのだ。

この反動に慣れるにはひたすらに数を撃ち、自分のものにするしかない。

本番まで今日を入れてあと3日。

藍那は少しの不安を感じつつも、引き金を引き続けた。

真つ暗な自室で刀華は座禅を組み、ひたすらイメージ内で藍那と戦っていた。

藍那とは何度も手合わせをしているし、彼女からは多くの戦闘技能を学んだ。これにより、刀華の中にはかなりリアルな藍那をイメージ出来ている。

刀華はそのリアルなイメージと何度も繰り返し戦っていた。

勝率はどんなに自分に都合よくイメージしても3割弱。しかし、刀華が1番得意とする太刀の間合いで戦いならば5割まで上がる。

刀華が藍那とナイフで戦ったのなら間違いなく敗北するだろう。もしかしたら1分も持たないかもしれない。

だが、自分が太刀で戦うのなら油断しない限り敗北はないだろう。まあ、相打ちを考慮するならの話だが。

ただ、刀華のこのイメージが正確ではない。

それは、あくまでもこれはイメージでしかなく現実ではない事と、藍那の全力を体験したことがない事が原因である。

もしも藍那の全力が私の想定しているものよりもっと上なら、その時はあきらめるしかないだろう。

しかし、刀華は次こそは藍那に勝利しようと心に誓っていた。

藍那に勝利しなければF F Bで1組が優勝できないという事も勿論ある。だが、それ以上に刀華は藍那に負け越したくないのだ。

藍那と始めて戦った時は己の油断と慢心により敗北した。

あれまで刀華は負けたことがほとんどなく、藍那に敗北したということが刀華の自尊心を大きく傷つけた。

だが、刀華は腐ることなくリベンジの機会を待ち続け、やっとその機会が巡ってきたのだ。

次は絶対に私が勝つ。そう再度心の中で誓い、刀華は再びイメージトレーニングに集中する。

夜も更け、藍那は自室で据え付けの椅子にもたれて休息をとっていた。

今日は半日S Fでの射撃練習をしていたため、心身ともかなり疲労している。

「あれ、藍那さん帰ってたんですね。」

シャワールームから香奈子が髪を乾かしながら出て来た。

「ええ……。なかなかうまくいかなかったから、こんな時間になってしまったわ。」

時刻は8時をとうに過ぎている。休憩も取らずに昼の2時から8時までぶっ通しで射撃練習をしていたのだ。

そのおかげか、だいぶ自分の思うように弾が飛ぶようにはなっていた。

「そうだったんですか……。藍那さんは夕食食べてきましたか？」

「いいえ、まだよ。いろいろと後始末をしてすぐに帰ってきたから。」

「やっぱり。そうだと思って、藍那さんの分のお弁当も用意しておきましたよ。藍那さんも先にシャワーを浴びて夕食にしましょう！」

「ええ、そうね。香奈子、ありがとう。それじゃあ、シャワーを浴びて

くるわ。」

藍那は椅子から立ち上がり、香奈子を見る。

「それよりも、せめてタオルぐらい巻かないの？」

香奈子は手に髪を拭くためのフェイスタオルだけを持ち、身体にはバスタオルなどは巻かれておらず生まれたままの姿となっている。

隠すものが一切ない為、年齢不相応に育ち過ぎた胸にやはり目が行ってしまう。

「まさかと思うけれど、見せつけたいなんてわけじゃないわよね？」

「ち、違いますよーっ！ただ、藍那さんが帰ってるとは思わなくて、1人だからいいかなって思ったんですよ……。」

「はあ……。いきなりの来客があるかもしれないのに油断し過ぎよ。」

「はい……。次からは気を付けます。」

若干しゆんとした香奈子に目をやりつつ、藍那はシャワールームへ向かった。

「それで、藍那さんは何でこんな時間までつかったんですか？」

夕食をとりながら香奈子が質問してきた。

「SFでの射撃にまだ慣れていないのよ……。反動への対応はだいぶ上手くいくようにはなったのだけれど、どうしてもARに表示される情報が視界に入って邪魔なのよ……。これになかなか慣れることが出来ないのよ……。」

「え？それって照準予測円とか姿勢制御ユニット系統の表示とかですよね？それって非表示に出来ますよ？」

「……えっ？」

「えっ？」

「も、もちろん知ってたわよ？」

これは強がりである。

（え……、？……。あれって非表示にできるの？知らなかった……。でも、どうやって非表示にするの？知っていたと言ってしまった建前いまさら聞けないし……。）

藍那は内心かなり慌てつつも、なんとか平静を装う。

「表示したままということは、フライトするときにはオールマニュアル

操作なんですか？なのに射撃は演算に頼るなんて、藍那さん変わってますね！」

藍那は少しイラツとしたが、素直に話を聞いてみることにした。

「香奈子はマニュアル操作にしないの？射撃もマニュアル操作にしようかと私も思っていたところなの。」

「そうですねー。私の場合は姿勢制御や重力制御とか難しいことは全部SFに丸投げして、加減速と左右への移動、あとは上下移動ぐらいしか自分ではやってないですね。射撃はオールマニュアルですけど。」

「そうなの……。私も香奈子みたいにしようかしら。参考までにいろいろと聞きたいから、よければなのだけれど明日SFの練習を一緒にしない？」

「藍那さんから誘ってくるなんて珍しいですね。いいですよ。その代わり日曜は私の練習に付き合ってもらってもいいですか？」

藍那はうまくいったと心の中でガッツポーズする。

「ええ、構わないわよ。それじゃあ、9時から始めましょうか。」

「分かりました。」

2人は微笑みながら食事を再開した。

学期末編―3

翌朝、藍那と香奈子の2人はSFを装着した状態で地下第1層にある屋内飛行訓練場に来ていた。

屋内飛行訓練場は1週約400mのトラックが4レーン並んでおり、レーン幅はSFが飛行するものであるため陸上競技に使われるものより広くなっている。

最初は翌週に飛ぶコースで練習する予定であった。しかし、藍那たちが行ったときにはすでに人でごった返しており、ゆっくり練習などできなくなっていた。

そのため、やむなく実習などでも利用している屋内飛行訓練場に移動したのだ。

コースのある第3特別訓練場に人が集中しているためか、幸い屋内飛行訓練場にはまばらにしか人がおらず練習をする環境としては最適といえる。

「それじゃあ、ウォーミングアップもかねて軽く飛んでみます?」

香奈子の提案に藍那はうなづく。

「せっかくだし、コース3周の競争にしない?」

「いいですね!負けませんからね!」

2人はコースのスタート位置に移動した。

2人はスタートラインに着くなり、重力制御によって地面から数センチ浮上する。

「それじゃあ、カウント3で始めるわよ。」

「わかりました。」

「3、2、1、Go!!」

2機のSFは背部スラスタの出力を上げ、一気に加速する。

機体にかかる空気抵抗などの摩擦によって生じるエネルギー減衰を重力制御によって軽減し、スラスタの推進力を運動エネルギーに変換する。

2機は轟音をあげながらほぼ同時に1回目のコーナーに差し掛かり、香奈子が藍那よりも少し早くコーナーを抜ける。

ここで明暗を分けたのは、処理する情報量の差である。

香奈子の場合には姿勢制御や重力制御関連を全てSFのシステムに任せており、香奈子自身は曲がりたい方向に意識を向けるだけで済む。

しかし、藍那の場合はオールマニユアルでSFを操っていた。それにより、藍那は姿勢制御や重力制御などの複雑な操作を常に要求されている。

カーブを曲がる時などは一瞬の判断で差が生まれる。操縦技能が五分五分ならばこの差は決定的なものとなるのだ。

これにより、コーナー勝負で藍那は香奈子に敗北した。

コーナーを抜けると直線勝負である。

コーナーで僅かながらにリード許した藍那は懸命に香奈子を追いかける。しかし、2人の操縦技術は拮抗しており、なかなか追いつくことができない。

香奈子は藍那の追撃から必死に逃げ、次のコーナーに突入する。

先も述べたようにコーナーでは香奈子の方が有利である。

2人がコーナーを抜ける頃には、藍那との差がまたしても開いていた。

藍那は必死に香奈子に食らいついたが、善戦むなしく敗北してしまった。

ウォーミングアップを終えた2人小休憩をとることにした。香奈子は藍那に勝つことができてご満悦といった様子である。

「いやあー、何とか私の勝ちですね。オールマニユアル操作であそこまでの飛べるなんて、やっぱり藍那さんはすごいですよ!」

「そう?けれど、負けてしまっただけは意味がないわ。」

「そうですか?でも、そうですね…。週明けには本番ですし…。」

「そうよ。早速で悪いのだけれど、香奈子の飛行方法を教えてくれなにかしら?」

藍那はさっそく本題に入る。

「わかりました。藍那さんなら知っていると思いますけど、SFのシステムコンソールから各所設定を開いて、姿勢制御と重力制御を開い

てください。開いたらどちらでもマニュアルからオートに変更して完了です。これと同様に、コンソールから照準補正を開いて、命中予測円をOFFにすれば完了です。」

香奈子はついだとばかりに照準補正機能切りかたの説明もしてくれた。

「なるほど……。参考になったわ。あとは飛んでみてなれるだけね。」
「そうですね。もう一回競争しません?」

香奈子は得意げに藍那を誘う。

「いいわよ。次は私が勝つから。」

「私だって負けませんよ!」

そうして2人はもう1度コースへ向かった。

先ほどと同じように2人は同時にスタートする。

前回と違うのは、藍那が処理しなくてはならない情報が一気に減ったということだろう。

重力制御による浮遊1つとっても、姿勢を安定させた状態を保つだけでも緻密な制御が必要となる。イメージするならばバランスボールの上に立つといったものだろう。

飛行時の制御は浮遊時の比ではない。高速飛行中はそれ以上だ。

(まさか、これほどとはね……)

藍那は姿勢などのこまごまとした制御をする必要がなくなった結果、これまで以上に速度を上げることに成功し香奈子より先にコーナーに入る。

そして、ほとんど減速することなくコーナーのインコースギリギリを飛行する。

藍那は飛行する際の無駄の一切を無くしていた。そうしなければオールマニユアルでの飛行など不可能であったためだ。

これにより、藍那は完全に香奈子を置き去りにした。それも圧倒的な差で。

香奈子は先ほど以上の差で置き去りにされ混乱する。

そのまま香奈子は藍那との差を詰めるどころか、大差をつけられ敗北した。

「藍那さん、さつきは全然本気出してなかったんですね？」

加奈子は若干不機嫌そうである。

「そうでもないわよ。オールマニュアルでの操縦はさつきが限界ね。」
「そうだったんですね……。オールマニュアルであれだけ飛べるなんて、やっぱりすごいですね。私じゃ絶対に無理ですよ。」

「そうでもないわよ。要は慣れだから。」

香奈子は苦笑いを浮かべる。

「そうはいつでもですね……。それより、月曜の飛行はどっちで飛ぶんですか？」

「オールマニュアルは疲れるし、タイムも望めないから制御はオートで行くわ。あと数回飛んで慣れたら射撃の練習に移ろうと思うのだけれど。付き合ってくれる？」

「もちろんですよ！」

2人は再度コースへ向かった。

飛行訓練場を後にした2人は昼食をとった後、同じ階層にある射撃訓練場に来ていた。

藍那は慣れた手つきでマガジンを取り付ける。

藍那が持つ66式小銃の上部には後付けの小型照準器が取り付けられている。

いつもであれば藍那は後付けの照準器はあまり使わない。それは、小銃などに元からついているピープサイトやゴーストリングサイトなどで十分な命中精度を実現できるためだ。

しかし、SFでの高速飛行中にピープサイトなどで狙うのは、制御をオートにしているともしすがに困難であったのだ。

この照準器はSFの照準補正システムと連動しており、銃口の角度などを元に演算し着弾予想地点に赤い点が表示される。

これにより、ダットサイトのようなになるのだ。

この照準器の利点は着弾予測円と違い赤い点しかAR内に表示されない。そのため、視界の邪魔になりにくいということだ。

藍那は先ほど制御をオートにして今できうる範囲の全力で飛んでみた。

とても正確な射撃などできない。

一般的にSFでの射撃は1度停止又は減速して目標に照準を合わせる。

目標の弱点部位を自動的に精密照準するという戦車も存在するが、SFの場合は戦車と違い火器を手に持っているため自動照準を戦車と同じようにはできない。

藍那はセレクターレバーをア(安全)からタ(単射)へと変更する。今日は昨日と違い動く的を狙う。

藍那は月曜の本番での的を狙うために毎度毎度静止するなど、そんな余裕は存在しないと思っている。

いくらSFでも一度静止してしまうと再加速に時間がかかってしまう。

更にコースに設置されている的の間隔的に一度静止してしまうと次の的までの間で、トップスピードまで加速するのはほぼ不可能であるというのは確認済みである。

そのため、藍那は減速しても停止はしないと決めていた。

仮に他の選手が停止していたとしてもむやみにタイムを落とすようなまねはできないのである。

銃を構えるとの的が高速で動き始め、射撃練習が開始される。

藍那は的を銃口でなぞるように動かし、交わった瞬間に引き金を引く。

けたたましい銃声とともに打ち出された弾は的に命中するが、的の中心をとらえることはできていなかった。

藍那は素早く射撃タイミングを調整し次の的に向けて引き金を引く。

これもタイミングがうまく合わず、またしても中心を外してしまう。

続けて3発撃つが同じような結果になる。

藍那は思わず苛立ちから舌打ちをしてしまう。

藍那は少し苛立ちつつも冷静さを保ち、引き金を引き続ける。

30発の弾を撃ち尽くし、一呼吸おいて銃を下す。

「藍那さんってやつぱりすごいですね。動く目標に向かってこんなに早く当てるなんて。それも全弾命中なんてすごいです。」

香奈子が感激しながら賞賛してくる。

しかし、藍那からすれば満足する結果ではなかった。

「それでもないわ。まだ的の中心を外しているし、照準を合わせる速さも遅いわ。もつと速さと正確性を上げないと駄目ね。」

藍那はため息一つ漏らす。

「そんなことないと思いますけど……。少なくとも私はこんな正確な射撃はとてできませんし。月曜日の大会でもここまでできる人はいないんじゃないですか？」

「香奈子。希望的観測はよくないわよ。まあ、私も問題ないとは思うのだけれど……。私自身が納得いかないというのが正直なところなのよ……。」

藍那はマガジンを交換し再び銃を構える。

「フライ・&・ショットだと使える弾の上限があるから、1発1発を無駄にできないのよ……。それに、マガジンチェンジはタイムロスにつながるもの。」

『フライ・&・ショット』は20枚の的に対し、60発の弾が支給される。

この競技はタイムと命中精度を競うというものであり、銃弾をばらまきその1発が的をとらえるというものでは意味がない。そのため、使用可能な銃弾の上限が決まっているのだ。

「何だか、藍那さんを見てると私も頑張らないとって思えてきます。私もこの練習してもいいですか？」

「ええ。私も競う相手がいた方が練習になるもの。こちらからお願いしたいぐらいよ。」

2人は夕方になるまで射撃訓練場で過ごした。

日曜日、藍那と香奈子は朝から第3特別訓練場にいる石塚を訪ねていた。

今回は依然と違い藍那が予め石塚にアポイントメントをとっていた。

「失礼します。」

2人は待ち合わせ場所として指定されていた教職員室に入室する。「あら、おはよう。2人とも早いわね。まだ約束の9時半前よ?」

そこには藍那にとって予想外の人物がいた。そこにいたのは石塚裕美であった。裕美は大きな目とボブカットにした黒髪の美しい顔立ちの女性である。大きな目はネコ科の動物を思わせるような獯猛で愛らしいものである。そんな彼女であるが、一番目を引くのは香奈子以上の巨乳であることだ。

藍那は裕美に近接格闘で勝てたことが1度もない。巨乳は俊敏な動きの天敵であるはずにもかかわらずだ。

「おはようございます。裕美さんがいらっしやるとは思いませんでした。」

「いやね、藍那ちゃん。昔みたいに『スターチス』って呼んでくれてもいいのよ?」

裕美は母親を思わせるような柔らかな笑みを浮かべる。

「そうですね……。それでは、スターチス。石塚先生はどちらに?」
「藍那ちゃん。堅苦しいわよ。あの人なら明日のコースを見に行ってるわ。あとちよつとで帰って来るんじゃないかしら。そのソファアにでも座って待ってて。」

裕美は窓際のソファアを指さす。

「そうですね。ありがとうございます。」

藍那と香奈子はソファアに腰掛ける。

「ところで、藍那ちゃん。そっちの娘が香奈子ちゃんよね?」

香奈子は勢いよく立ち上がる

「はい!初めまして!西原香奈子といます。えっと、石塚先生には大変お世話になってます!」

「そんなに緊張しないで。それよりも、うちの一旦那《お馬鹿さん》が迷惑かけてないか心配ね。」

裕美は楽しそうケラケラと笑う。

「ハハハハ。まったく、相変わらず口の悪い女だぜ。」

「あら、意外と早かったわね。もう少しかかると思ったんだけど。」

コースの確認を終えた石塚が帰って来た。

「それで……。西原は練習ってわかるが、仁科はスピードシューティングに出ないんだろ？他の競技に出るんだったら、こんな所でさぼってていいのか？」

「ええ、今日は香奈子の付き添いです。私は明日のフライ・&・ショットに出場しますが、今日は英気を養うための休養です。」

「あら、明日は藍那ちゃんを応援しないといけないわね。それで、香奈子ちゃんはどの競技に出るの？」

「はい！私は水曜日のスピードシューティングに出場します。」

「そうなの……。」

ニコニコしていた裕美がいきなり真面目な顔になる。

「香奈子ちゃん、競技にはどの銃で出るつもりなの？」

「えっと……。いつも練習で使っているレミントンM24を使おうかと……。」

香奈子は少し戸惑いつつ答える。

裕美は少し考えこみ口を開く。

「レミントンか……。啓吾、他の銃を使わせて練習させたことはあるの？」

「ん？今のところはねえ。どうしたんだ？」

「スピードシューティングって、言ってしまうえば動きながらの速撃ちでしょ？それなら、いちいちコッキングするのって、タイムロスにならない？」

石塚は少し考える。

「確かにそうだよなあ……。西原、今日は違う銃を使うぞ。」

「はい。お願いします。」

「ところで、どの銃を使用するんですか？香奈子が使おうとするならスナイパーライフルであることは間違いないと思うのだけれど。セミオートのライフルだとすると、ドラグノフかM110かしら？」

藍那は興味があったのか、石塚に尋ねる。

「ああ、M110だ。この学園にはドラグノフはねえからな。」
「そうですか。」

藍那と石塚、裕美の会話に香奈子は全くついていけずちんぷんかんぷんになっている。

「まあ、そうと決まれば善は急げ、だな。さつそく移動するぞ。」

石塚は香奈子連れ、教職員室を出ていった。

「あらあら、行っちゃったわね。どう、藍那ちゃん。久々に組み手でもしてみない?」

「望むところです。スターチス、今日こそは勝って見せます。」

「まだまだ負けないわよ。」

藍那と裕美は互いに獰猛な笑みを浮かべ、第3特別訓練場内の格技場へ向かった。

第3特別訓練場内の射撃場に到着した石塚は早速香奈子に銃の説明をはじめた。

「こいつはM110SASSだ。SASSはSemi-Automatic Sniper Systemつまりは半自動狙撃システムって意味だ。まあ、これはどうでもいいや。いつも使っているレミントンとの大きな違いは、1回1回コッキングする必要がないってところだ。その他にも細かいところはいろいろと違うが、それは慣れるしかないからなく。」

香奈子は石塚から渡された銃を的に向かって構えてみる。

ストックの長さや重心の位置、銃自体の重さなど違うところはいろいろとあるが、射撃自体にはあまり問題ないように感じる。

「今、そいつには光学照準器とバイポットがついていて、だいたい7kgってところだ。いつも撃っていたM24はだいたい4.4kgってところだから、かなり重く感じるだろ?」

「はい。確かに少し重いですけど、問題ないと思います。」

香奈子は銃を構えたまま答える。

「M24の装弾数5発だが、M110は10発だ。M24は長距離精密射撃に向いているが、スピードシューティングみたくそこまで精密射撃を求められない競技なら、M110の方が装弾数もリロード速度

も上だからな。」

石塚は「使ってる弾は同じだな」とつけくわえた。

「まあ、御託はいいや。とりあえず慣れないとな。撃ってみろ。」

香奈子は「はい」と返事をし、スコープ越しに見える100m先の
的へ向かって引き金を引いた。

藍那と裕美が来ている格技場は名ばかりで、30畳程の板間であり
どちらかと言えば格技室の方がしっくりくる。

格技場には採光窓があり、まだ時間が早いこともあって室内はとて
も明るい。

「組み手なんて久々だわ。体力が落ちない程度にはトレーニングして
はいるけどね。」

裕美はストレッチをしながら藍那に声をかける。

「私も最近私より強い人とはやっていなかったので、本気をするの
は久々です。」

「そうよね。藍那ちゃんには物足りないわよね。三井君じゃあ藍那
ちゃんには絶対に勝てないもの。」

裕美が挙げた三井君とは、一三井昭正《みつあいあきまさ》という3
年前から近接格闘実習の臨時講師として来ている国防軍の軍人であ
る。三井は裕美が軍人だったころの部下であり、それと同時に教え子
でもあった。

三井は初回の近接格闘実習で自分の実力を生徒に見せつけ、それ以
降の実習をスムーズに進める目的があった。

そのため、三井は生徒から無作為に3人選び、3対1で組手を行い
圧勝するということを毎年していた。

しかし、今年はどうもいかなかった。

三井は藍那を含む3人を運悪く選んでしまったのだ。

藍那はデモンストレーションに選ばれ、内心面倒くさいと思ったの
だ。そのため、小さな反抗を起こした。

藍那は一切の容赦をせず、教員である三井を投げ飛ばし逆十字固め
をかけたのだ。

三井は理解が追いつくよりも速く藍那に敗北し、赤っ恥を書く結果

となったのだった。

「私の教え子の中でも、三井君は結構やる方だったんだけどね。いきなり泣きついてきたときにはびっくりしたけど、話を聞いていたら納得しちゃった。」

裕美はケラケラと楽しそうに笑う。

「まさか、三井先生がスターチスの教え子だったとは知りませんでした。世間は意外と狭いものですね。」

「まあ、そんなものよ。さあ、始めましょうか。」

裕美は藍那へゴム製のナイフを渡し、2人は臨戦態勢をとる。

2人の動きには全く無駄がなく、最小の動きのみでナイフを振るい回避をとる。

(流石はスターチス。ナイフがかすりすらしない・・・。)

藍那は低い体勢で一気に距離を詰めナイフを振るう。裕美は藍那のナイフを払い、距離を詰めてきている藍那へ前蹴りを入れる。藍那は裕美の蹴りを読んでおり、バク転をして距離をとる。

これはもう何度目になるかわからない攻防である。

(このままじゃ埒が明かないわね。そろそろたたみかける！)

藍那の様子が変わったことを鋭敏に感じ取った裕美は口角を上げる。

「さあ、いらっしやい！」

藍那は裕美の声にこたえるように突撃した。

板張りの床の上で仰向けになり肩で息をしている藍那は、横で涼しそうな顔で立っている裕美を見て「やっぱり勝てない」と思う。

「藍那ちゃんが思いのほか強くなつててびっくりしたわ。何だか前よりも体の軸がしっかりしたわね。何か特別なことでもしたの?」

「ええ、まあ・・・。剣術を友人から少々教わるようになりました。」

裕美は納得したといった顔をする。

「それで、気分転換はできた?」

「?」

藍那は首をかしげる。

「何かに悩んでたでしょ。私にはわかるのよ。」

藍那は少々驚きつつも、納得する。

「藍那ちゃんはいろいろ考え過ぎちゃうからね。とりあえず、自分に出来ることを精一杯してみるといいわ。明日は頑張つてね。」

裕美は手をひらひらと振りながら格技場から出ていった。

藍那は自分が思い悩んでいたことを見透かされていたと分かり、小さく笑みを浮かべる。そして、改めて裕美には勝てないと思ったのだった。

学期末編―4

7月27日、雲一つない夏空のもとでSF学園クラス対抗競技大会が始まった。

このクラス対抗競技大会では、軍関係者や生徒の家族など多くの観客が訪れる。

オープニングセレモニーでは学園長のお話と生徒代表の宣誓を終えた後、学園が所有している2機の一F―4EJ《ファントムII》がアクロバット飛行を披露する。

2機ということもあり、できる演目には限りがある。

しかし、フォー・ポイント・ロールやスラント・キューピット、バツク・トウ・バツクといった技、計12の演目を神田と栗原が見事に披露し、オープニングセレモニーが行われた第1グラウンドは感動と歓声に包まれた。

藍那達2組でもそれは例外ではなかった。

ファントムオタクの七海は2機の曲技飛行に感動しすぎるあまり鼻血を出して倒れ、静に介抱されて医務室に運ばれていくという事件も発生したりもした。

後日、このことを笑い話とされたことに七海は恥ずかしさのあまり真っ赤に赤面し、泣き出しそうになったためこの話は彼女の前では禁止という暗黙のルールができることになった。

オープニングセレモニーが終われば早速、競技が開催される。

初日の競技はフライ・アンド・ショットである。

競技は予選と本戦が有り、予選は1年生から2、3年生の順番で行われその後に本戦が行われ各学年で1位を決定する。

1クラス3名が出場し、1レース3人で行われる。

選手は予選開催直前にくじ引きを行い、自分が何レース目のどのコースになるのかということが決まるのである。

これにより、藍那は4レース目の第2レーンに決まった。

選手は各々開始前の約15分という短い時間を使いウォーミングアップを行い、モチベーションを上げる。

SFは前日のうちにスタート地点の第3特別訓練場に移動されており、学園専属整備士の手によって性能を十二分に発揮できるようにメンテナンスされている。

そのため、ハンガーからSFを生徒が運ぶということはしなくても良い。

しかし、各自SFの設定を自分仕様に変更する必要がある。

スタート地点近くの広場にずらりと並べられたSFは圧巻に一言に尽きる。

レースでは自分に合った機体を使うことがベストであるため、選手の機体選びは真剣そのものである。

藍那も自信が使うSFの品定めをする。

多くの機体の中で自分に合った機体というのはなかなか見つかるものではない。正直なところ、藍那は自分に合った機体というのとはどういふものかよくわかってはいない。

機体性能はどれもほぼ同じであり、照準補正機能やスラスターの癖など細々したところの違いはあるものの大きな違いはない。

それよりも、藍那にとってはレースで使用する銃の調整の方が重要であった

競技が始まるまであまり時間もないため、藍那は「飛べるなら何でもいい」と思い偶然近くにあった機体にすることにした。

偶然選んだ機体の機体番号を見て藍那は驚く。

それは一昨日自分が使用していた機体と同じであったのだ。

運命のようなものを感じ、微かに微笑む。

藍那は機体を装着し、手早く設定を変更に取り掛かる。

その時、藍那はかすかにであるが興奮していた。

柴田佳乃も藍那と同じくフライ・&・ショットに出場する選手である。

彼女は意気揚々と準備を進め、競技が始まるのを今か今かと待ち望み興奮を抑えられないといった様子であった。

それは、いつも冷静沈着であるがゆえに付けられた『氷の姫』の名前からあまりにもかけ離れた様子であり、彼女のいつもの様子を知るものを驚かせた。

佳乃はSFの緻密かつ精密な操作を得意としている。

それは飛行だけでなく射撃にも当てはまることであった。まさに、このフライ・&・ショットにおあつらえ向きであったのだ。

そのため、佳乃はクラス内での選手決めの時際、クラス内の大多数の者から推薦される形で決定した。

佳乃はこの競技に出場することに関し、あまり乗り気ではなかった。

それはひとえに、競い合って面白そうなものがないということの原因であった。

佳乃自身は自意識過剰ではない。

しかし、自身の技能が学年内で数名を除き頭1つ分抜きんでているという自覚があった。

自分が楽しめそうな相手と言えば、同じくネームドの藍那と香奈子ぐらいのものである。

先週の金曜日、香奈子がこの競技に出場しないと耳にした時は軽く絶望しかけ、モチベーションは最低まで下がった。

しかし、そんなモチベーションを一気に頂点まで上げることがついで数分前であったのだ。

それは、出場選手の点呼とくじ引きの際、全員が1度整列させられた時だった。

その時に佳乃は確かに藍那の姿を確認したのだ。

その瞬間、佳乃は楽しそうにない競技へ参加するというストレスから一気に開放されたような感覚を覚え、1分でも1秒でも早く藍那と勝負がしたいと待ちきれない思いがこみ上げたのだった。

佳乃はSFの最終調整を行いながら周囲を見回す。

残念ながら藍那の姿を確認することは出来なかった。

少し残念だと思う。

しかし、残念と思う気持ちはこみ上げてくる気持ちは一瞬で飲み込

まれた。

佳乃は1度深呼吸をする。

「藍那《あなた》倒すのはこの私よ。他の人に負けたら承知しないわよ。」

どこにいるかわからない藍那に向い、小さな声ではあるが力強く宣言布告をしたのだった。

フライ・&・ショットとはSFで決められたコースを飛び20枚の的を撃ち、そのタイムと命中精度を競うといったものである。

予選から本戦に出場可能な選手は、予選の各コースで1位になった者と敗者の中で最も成績の良かった1名の合計6名である。

競技中に使用可能な弾薬は支給される66式15.5mm小銃の弾60発のみである。

66式小銃で使用される15.5mm弾のマガジンの装弾数は30発であり、スタート前にマガジンを2つ渡される。

他の選手への妨害行為は全面的に禁止されており、他選手への攻撃などはもつてのほかである。

競技中に他選手への意図的な妨害などの禁止行為及び他選手へ向かって発砲などの危険行為を犯した者は、即刻失格となる。

時刻は10時となり、観客席に設けられている巨大モニターに次々と入場してくる選手が大きく映し出される。

それを観客は特別訓練場内の外に設けられた観客席から割れんばかりの歓声で迎えた。コース内にも届いてくる歓声を選手は手を振り歓声にこたえる。

これにより、観客席のボルテージは更に上がった。

(ここまでの歓声とはね……。私はあまり気にしていなかったけれど、かなり大々的なイベントにしているのね。)

藍那はたかが学校のイベントと、あまり気にしてはいなかった。

しかし、この競技大会は軍関係者や生徒の家族のほかにも一般の観覧客を招き、毎年恒例の人気イベントであるのだ。

(まあ、私は観客のことなんて気にせず、自分の全力を出すだけね。) 藍那は観客の大歓声に驚きはしたが、すぐに気持ちを切り替えて順番を待つ列に並んだ。

第1レースが始まり、藍那はコースを飛んでいる選手を第3特別訓練場内に設けられたモニター越しにつまらなそうに見ていた。

それは、藍那が期待していたようなものでなかったからだ。

藍那は射撃の時、タイムロスを避けるために減速はするだろうが停止はしないと思っていた。

しかし、ふたを開けてみれば藍那の予想は違っていた。

選手達は的を外して無駄な射撃をしないために、SFの照準補正機能をフルに使っていた。

照準補正機能を使った場合であっても移動をしながらの射撃では、命中精度が下がってしまう。そのため、一度完全に停止し照準を合わせ、射撃を行っていた。

藍那は香奈子が言っていたことの方が正解だったのだとため息をつく。

(まさか、本当に私は考え過ぎていたとはね……。でも、たまたまこの第1レースだけかもしれない。気を抜くのはまだ早いわ。)

藍那は気持ちを切り替え、顔を上げモニターを見た。

第2レースの1レーンに佳乃がいた。

先程の第1レースを見た限り、佳乃は自分を脅かすような存在はいないと感じていた。

もしも自分が勝てないような強者がおり、本戦に出場できないかもしれないと多少は不安があった。

しかし、自分のレースも先程のレースと同じレベルの選手であるならば、1位になることは正直容易い。

佳乃は気持ちが少し軽くなったような気がした。

Standby

機械音声が流れ、佳乃たち選手3名はエンジン内の回転数を上げる。

Ready

重力制御で機体を数センチ浮かせる。

Go!!

佳乃はスタートの合図とともにトップ飛び出した。それはまさしく弾丸のようである。

瞬く間に一つ目の的が視界に入り、減速を開始する。

そして、佳乃はほんの一瞬停止し射撃を行い弾が的をとらえるのをSFの360度ARモニターで確認、次の目標に向かい再び加速を始めた。

佳乃の流れるような射撃を目にし、モニターを注視していた者はみな感嘆の声を漏らした。

通常、照準補正機能の演算時間は0.3〜0.5秒の時間を要する。これはあくまで完全停止状態での演算時間であり、飛行中であればこれ以上の時間を要する。

しかし、先程の佳乃の停止時間は0.1秒ほどであり、演算を終える前に射撃を行っていたのだ。

どのようにして演算時間を短縮したのかと観客席や順番待ちの生徒は初対面であるはずの隣の者と意見を交換する。しかし、結論は出ない。

それは当然である。

佳乃は演算時間の短縮などはしていなかったからだ。

佳乃が行ったことは単純である。

予め自分の射撃体勢をSFに記録し、的が見えた時点でこの射撃体勢をオートで寸分たがわずとった。

そして、射撃体勢のロードを行う直前に自分が停止する位置を変数として入力し、先に演算を終えていただけである。

SFは機体にかかる空気抵抗を限りなくゼロにすることが出来るため、飛行中の急激な体制変化を行ったとしても大きくバランスを崩すということはなく、SFの姿勢制御によって容易にカバーできる。これにより、予定していた位置に停止し引き金を引くだけとなるのだ。

しかし、予定していた位置に確実に停止するというのは緻密かつ精

密な制御が必要であり、何でもないのでこの制御を行う佳乃の技能は恐ろしく高いものなのだ。

佳乃は最初のリードから更に距離を離し、2位とは大差でゴールした。

（さあ、藍那さん。あなたも本戦に上がってきてくださいよ。私を失望させないくださいね。）

佳乃はモニターを見ているであろう藍那に向かって、挑戦的な表情を向けた。

あつという間に藍那の順番が回ってきた。

先程佳乃が向けた挑戦的な表情は自分に向けたものだと、藍那は感じ取っていた。それは、予感よりも確実なものであった。

藍那も「負けていけない」と一層気合が入る。

スタートラインに立つ。沸々と湧き上がる高揚感が心地いい。

藍那の両隣にいる選手はSFのフルフェイスヘルメットをかぶっているため、表情を窺うことはできない。しかし、ピンっと張り詰めた緊張感が伝わってきた。

Standbyという機械音声が聞こえ、それを合図に藍那たち3人はエンジンの回転数を上昇させる。周囲には『キイイイイイン』という耳をつんざくような音が響く。

Readyという機械音声が聞こえ、期待を浮かせすぐでも飛び立つ準備をする。

Go!!と音声が聞こえ、3機はほぼ同時に『ゴーーーーッ』という轟音とともに飛び出した。

藍那はスタートダッシュに遅れてしまい、最下位からのスタートとなった。

SFがトップスピードになる直前で1つ目的が見え始める。

藍那の前方を飛んでいる2機は照準補正機能の演算のために減速を開始して程なくして停止した。

しかし、藍那は減速するどころか、さらに加速した。

藍那は一切の減速をすることなく銃を構え、引き金を引いた。照準補正機能に頼らず、見事に的を打ち抜いた。

そして、藍那の前を飛んでいた2機を抜き去った。抜き去られた2人は愕然とする。

この射撃に観客や他の選手も度肝を抜かれていた。

藍那は更に観客や選手に驚きを与えた。

コース上のカーブを曲がる際、普通であれば一度減速する。

しかし、藍那は曲がる方向の腕のみの空気抵抗を増大させ、腕を支点とし極小の旋回半径でほぼスピードを落とすことなく曲がったのだ。

そして、再び減速することなく次の的を撃ち抜いた。

そのまま藍那は一切のタイムロスをすることなく圧倒的大差でゴールした。そして、静に着地しモニター用のカメラに向かって手を挙げた。

観客たちは藍那へ割れんばかりの歓声をあげた。

時刻は12時を超え、2組全員は藍那たちフライ・&・ショットの選手を中心にして、昼食をとっていた。

「まさか、本当に無減速で射撃するなんて、びっくりですよ。」

香奈子の言葉にクラスの半分以上が頷く。

「どうやってあんなことしたの？演算をしいてる時間なんてないはずよね？」

静は不思議そうに聞いてくる。

「簡単なことですよ。藍那さんは照準補正機能を一切使っていないんですから。」

「何で香奈子が答えるのかしら……。まあ、香奈子がさつき言ったように、システムの補助は使っていないわ。」

藍那は香奈子に少し呆れつつ、何でもないかのように話す。

それを聞き、辺りは啞然とする。

「あの速度で飛びながら、あんな正確な射撃を？本当に言っているの？」

静は驚きを隠せないといった様子だ。

「ええ、慣れればあまり難しくはないわ。」

「そうですね。私もあそこまでではないにしろ、一応はできますし。」

静は驚きを通り越して笑い出した。

「何というか、この2人は次元が違い過ぎてよくわからないや。」

他の者も静と同じような反応である。

「それよりもさ、どうやったたらあんなふうに曲がれるの？あんな旋回半径での曲がり方なんて、授業じゃ教えてくれなかったよ。」

藍那と同じく、本戦出場が決まった星川恵利が手を挙げた。

「カラクリを聞けば簡単な話よ。旋回を行う方の腕だけ空気抵抗を上昇させただけよ。」

藍那の説明を聞き、恵利の頭の上にはなマークが浮かぶ。

「船が錨を下ろして無理やり急旋回できるのは知っている？簡単に言えば、それを故意に起こしたのよ。まあ、船と違って私がやったのは空気の壁をひっかいたということね。」

「ほえ。私じゃ考え付かないや。それより、SFって飛行機みたいに抵抗を減らすだけじゃなくて増やすこともできるんだね。しらなかつたや。」

「私もちよつと前に実験していて気が付いたのよ。まあ、SFのコアの劣化版みたいなのを使っている戦闘機に出来て、SFにできない訳はないけれど。」

恵利は「私もやってみようかな」と呟くが、「ぶっつけ本番はやめて!!」と止められた。

「午後からは本戦よ！2組でワンツーフィニッシュを決めれるように、藍那と恵利には気を抜かないように頑張ってもらわないとな。」

静が選手2人にエールを送ると、他のクラスメイトも口々に応援の言葉をかける。

藍那と恵利は気恥ずかしそうにしていた。

本戦は1本勝負であり、記録タイムで順位が決まる。

レース開始前に本戦出場6名で再びクジ引きが行われた。その結果、神の悪戯か藍那と佳乃の直接対決が実現した。

この1年生最強の対決に観客は大いに湧いた。

藍那と佳乃が同時にコースインした時に観客のボルテージは最高潮に達した。

「佳乃、あなた私を挑発してきたでしょ？」

「やつぱり、藍那さんならわかってくれると思いましたがよ。」

「後腐れなく、全力で勝負よ。」

「言われるまでもないわ。」

藍那も佳乃はフルフェイスをかぶっており表情はわからない。しかし、互いに喜悦に満ちた笑みを浮かべていることが分かった。

Standby Ready Go!!

レースが開始された。

フライ・&・シヨット1年生の部の順位は、1位仁科藍那、2位柴田佳乃、3位星川恵利という結果になった。

恵利は藍那と共にワンツーフィニッシュを遂げたいと全力を尽くしたが、佳乃には遠く及ばず3位という結果に終わった。

しかし、2組としてかなり幸先のいいスタートとなり、他の競技に出場するメンバーの士気は更に上がった。

時刻は19時30分、佳乃は自室のベッドの上でうつ伏せになり、一人泣いていた。

ルームメイトである刀華は会場周辺の警備に出ているため居なかった。

佳乃は様々な面で藍那に勝てないでいる。佳乃自身は自分が藍那と同じネームドとして肩を並べられているとは思っていない。

であるからこそ、今回のフライ・&・シヨットで今度こそ藍那に勝利し、正真正銘藍那と肩話並べられる存在になろうと意気込んでいた。

にもかかわらず、結果は藍那に大差を付けられた敗北した。

(やつぱり、藍那さんには勝てなかった……)

その事実を思い出すたび、悔しい思いがこみ上げてきた。

「今回は佳乃の負けだ。」

いつの間にか帰ってきていた刀華に改めて事実を述べられ、佳乃は激昂する。

「そんなこと、言われなくても分かっている！私が一番それをわかっているのよ！」

佳乃は体を起こし、刀華へ怒鳴りつけた。

「佳乃、勘違いするなよ。私は佳乃の事実を伝えるために、まして励ますために言っただけじゃない。」

「じゃあ、どうして!!」

「こんな所で泣いていたら――藍那《あいつ》に勝てるのか？」
「……………」

「あいつと次に対決するのは金曜のFFBだ。もう時間がない。次こそ勝ちたいなら、今できることを何でもして、備えるしかないだろう？」

刀華の言葉を受け、佳乃はハッとすする。

「次は佳乃だけじゃない。私もいるんだ。今度こそあいつを倒す。」

佳乃は刀華の力強い言葉を聞き、涙をぬぐう。

(こんなことをしている暇があるなら、藍那さんを倒すために何かをしなくちゃいけない。技術でも経験でも圧倒的に負けているなら、頭を使うしかない。)

決心を固めた佳乃の表情を見て刀華は微笑む。

「よかった。佳乃がいつもと同じ顔になった。」

「刀華さん。次こそ私たちが勝ちますよ！」

2人は打倒藍那への決心を新たにした。